清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発　掘　調　査　報　告　書

辻　　遺　　跡

昭和55年4月

清武町土地開発公社
清武町教育委員会

清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書　辻　遺　跡
清武町土地開発公社・清武町教育委員会

清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発　掘　調　査　報　告　書

辻　　遺　　跡

昭和５５年４月

清武町土地開発公社
清武町教育委員会

序

清武町におきましては、町内に存在する埋蔵文化財を記録保存するため、開発工事等行なわれる場合は文化財保護法第57条の2の規定により開発行為者において発掘調査を行うことになっております。

今回は清武町土地開発公社が大字木原字辻地区に計画している清武工業団地の造成区域内に埋蔵文化財包蔵地(辻遺跡)があり、これを記録保存するため清武町教育委員会に調査依頼したものであります。

本書は本町の歴史をひもとく資料として広く活用していただくとともに、数すくない文化財について充分認識していただき、文化財保護に今後一層の御理解と御協力を願うものであります。

この調査にあたりましては、県文化財保護審議会委員日高正晴氏をはじめ、県埋蔵文化財調査員北郷泰道氏、宮崎考古学会員長津宗重氏には種々御配意、御協力を賜り深甚の謝意を表します。

昭和５５年４月１日

清武町土地開発公社

理事長　落　合　兼　俊

例　　言

1．本書は清武工業団地造成工事に伴ない、清武町土地開発公社の依頼を受けて、清武町教育委員会が実施した辻遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は昭和54年12月10日から昭和55年1月5日まで実施した。

3．調査関係者は次の通りである。

調　査　主　体

清武町教育委員会

教　育　長	黒　木　盛　幸	
教育次長	落　合　兼　敏	
社会教育課長（文化財担当）	岩　切　　哲	
調　査　員	日　高　正　晴	(県文化財保護審議会委員)
	北　郷　泰　道	(県埋蔵文化財調査員)
	長　津　宗　重	(宮崎考古学会員)

事　業　主　体

清武町土地開発公社

理　事　長　　落　合　兼　俊

4．本報告書の作成には調査員があたり、執筆および挿図作成は第Ⅳ章を長津、他を北郷が担当し、監修を日高が行った。

5．本報告書に用いたレベル数値は、海抜絶対高である。

6．土層図中の土色は、『標準土色帖』（監修、農林省農林水産技術会議事務局）を基とした。

本　文　目　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1. 発掘調査に至る経過 …… 1
2. 遺跡の位置と環境 …… 1
3. 発掘調査の概要と経過 …… 2

第Ⅱ章　包含層の状態 …… 5

1. 第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の状態 …… 5
2. 第Ⅳ・第Ⅴ地区の状態 …… 7

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物 …… 9

1. 集石遺構・ピット …… 9
2. 遺物の出土状態 …… 10
3. 遺物 …… 12
   (1) 土器 …… 12
   (2) 石器 …… 35

第Ⅳ章　辻遺跡出土の土師器と須恵器について …… 42

1. 土師器と須恵器の出土状態 …… 42
2. 土師器 …… 43
3. 須恵器 …… 51
4. 小　結 …… 53

第Ⅴ章　ま　と　め …… 57

(1) 縄文前期土器の出土頻度について …… 57
(2) 層位について …… 57
(3) 縄文前期土器について …… 58
(4) 集石遺構について …… 59
(5) 石器について …… 60

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡所在地図 …… 1
第 2 図　第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区地形図および発掘区位置図 …… 3
第 3 図　第Ⅳ・第Ⅴ地区地形図および発掘位置図 …… 4
第 4 図　第Ⅰ地区C－3～5・北壁土層断面実測図 …… 5
第 5 図　第Ⅱ地区C－1～9・南壁土層断面実測図 …… 6
第 6 図　第Ⅲ地区 1～3・西壁土層断面実測図 …… 7
第 7 図　第Ⅳ地区D～7・東壁，南壁土層断面実測図 …… 7
第 8 図　第Ⅴ地区A－1・南壁土層断面実測図 …… 8
第 9 図　第Ⅱ地区C－8・集石遺構および周辺遺物出土状態実測図 …… 9
第 10 図　第Ⅱ地区A－5・ピット実測図 …… 10
第 11 図　第Ⅰ地区E－6・押型文土器出土状態実測図 …… 10
第 12 図　第Ⅱ地区C－3・Ⅲ類土器出土状態実測図 …… 11
第 13 図　第Ⅳ地区C，D－3，4・土層断面実測図 …… 11
第 14 図　第Ⅳ地区C，D－3，4・集石遺構および遺物出土状態実測図 …… 13～14
第 15 図　第Ⅰ・第Ⅱ地区出土Ⅰa類土器実測図・拓影 …… 18
第 16 図　第Ⅳ地区出土Ⅰa類（塞ノ神A式）土器実測図・拓影 …… 19
第 17 図　第Ⅳ・第Ⅴ地区出土Ⅰa類・Ⅰb類土器実測図・拓影 …… 20
第 18 図　第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区出土Ⅱ類土器実測図拓影 …… 22
第 19 図　第Ⅰ・第Ⅱ地区出土Ⅲ類土器実測図・拓影 …… 23
第 20 図　第Ⅰ地区出土Ⅳ類土器実測図・拓影 …… 27
第 21 図　第Ⅱ・第Ⅳ地区出土Ⅳ類Ⅴ類土器実測図・拓影 …… 28
第 22 図　Ⅴ類土器実測図・拓影 …… 29
第 23 図　第Ⅰ・第Ⅳ地区出土Ⅳ類（押型文）土器実測図・拓影 …… 31
第 24 図　その他の出土土器実測図・拓影 …… 33
第 25 図　石器実測図 (1)　石鏃 …… 37
第 26 図　石器実測図 (2)　石斧・凹石・磨石 …… 39
第 27 図　石器実測図 (3)　敲石・尖頭器・石錘など …… 41
第 28 図　第Ⅰ地区C－7 Ⅰ″ 層の土器の出土状態 …… 42
第 29 図　第Ⅱ地区C－7・北壁（上），西壁（下）土層断面実測図 …… 42
第 30 図　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器実測図 …… 49
第 31 図　織布圧痕土器実測図・拓影 …… 50
第 32 図　第Ⅱ地区出土土錘実測図 …… 50
第 33 図　第Ⅲ・Ⅳ地区出土土師器実測図 …… 51
第 34 図　須恵器実測図・拓影 …… 52

表　目　次

第 1 表　Ⅰ類土器一覧表 …… 16～17
第 2 表　Ⅱ類土器一覧表 …… 22
第 3 表　Ⅲ類土器一覧表 …… 23
第 4 表　Ⅳ類土器一覧表 …… 25～26
第 5 表　Ⅴ類土器一覧表 …… 29
第 6 表　Ⅵ類土器一覧表 …… 30
第 7 表　石鏃一覧表 …… 36
第 8 表　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器（坏）の法量 …… 44
第 9 表　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器（坏）の計測表 …… 45
第 10 表　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器一覧表 …… 47～48
第 11 表　法量対照表 …… 54
第 12 表　法量対照表 …… 54
第 13 表　タイプ別からみた各地区の出土パーセント …… 57
第 14 表　地区別からみた各タイプの出土パーセント …… 57

図　版　目　次

図版１　(1)　第Ⅰ・第Ⅱ地区遠景
　　(2)　第Ⅰ地区発掘風景
図版２　(1)　第Ⅱ地区発掘風景
　　(2)　第Ⅳ地区発掘風景
図版３　(1)　第Ⅳ地区・アカホヤ層の状態
　　(2)　第Ⅳ地区Ｃ，Ｄ－３，４・塞ノ神Ａ式と集石遺構
図版４　(1)　第Ⅳ地区・集石遺構
　　(2)　第Ⅱ地区・集石遺構
図版５　(1)　第Ⅱ地区・Ⅲ類土器出土状態
　　(2)　第Ⅳ地区・Ⅰ類土器出土状態
図版６　　Ⅰ類土器　(1)
図版７　　Ⅰ類土器　(2)
図版８　　Ⅰ類土器　(3)
図版９　　Ⅱ・Ⅳ類土器
図版１０　　Ⅲ・Ⅴ類土器
図版１１　　Ⅳ類土器
図版１２　　Ⅵ類土器
図版１３　　その他の土器
図版１４　　石　器　(1)
図版１５　　石　器　(2)・第Ⅳ地区押型文土器出土状態
図版１６　　土師器(1)
図版１７　　土師器(2)
図版１８　　織布圧痕土器・須恵器・土錘

第Ⅰ章　序　　説

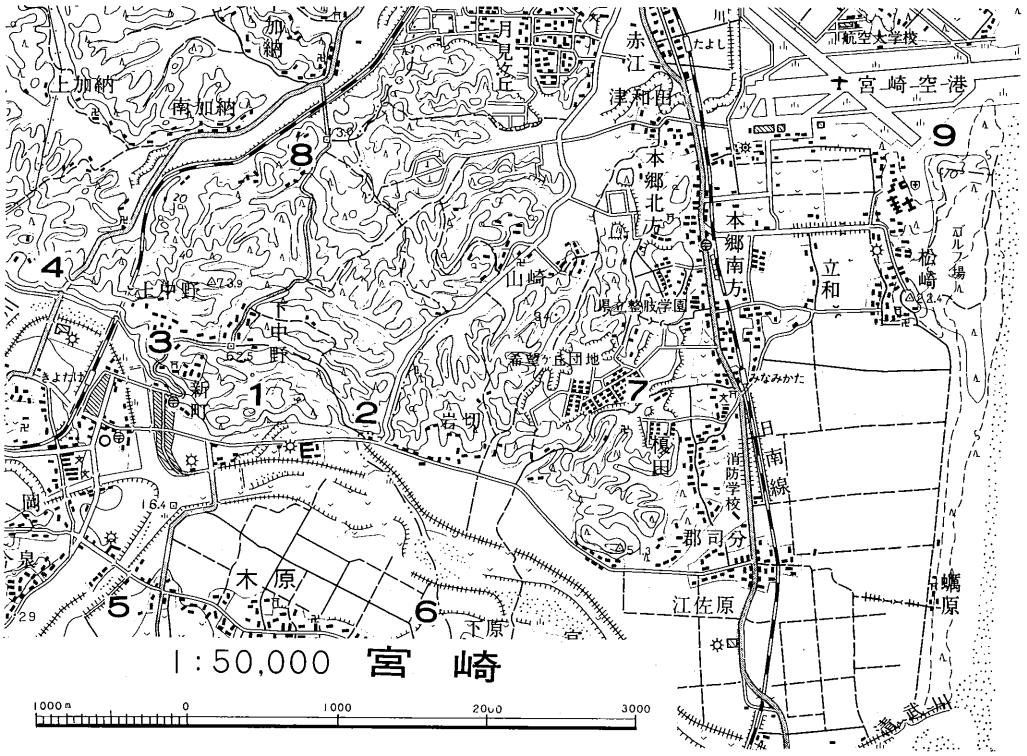
1　発掘調査に至る経過

辻遺跡は，昭和５４年九州縦貫自動車道埋蔵文化財分布調査において遺物の散布が確認され，「下中野遺跡」として周知された遺物包含地であった。その後，昭和５４年１１月清武工業団地造成事業として，辻遺跡を含めた大字木原の丘陵地を造成する計画がもちあがり，宮崎県商工振興課，同文化課，清武町開発課，同社会教育課の間で同遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果，昭和５４年１２月１０日～昭和５５年１月５日まで，発掘調査を行い記録保存の措置をとることになった。

2　遺跡の位置と環境

辻遺跡は，宮崎郡清武町大字木原字辻（７３０番外）にあり，水無川が清武川と合流する地点の北側の洪積台地上に位置する。

清武町に所在する遺跡について，発掘調査等についてその内容が明らかにされた例は意外と少なく，この方面についての調査・研究は全く停頓していたといえる。しかし，最近昭和５１年に九州縦貫自動



第１図　遺跡所在地図

（1. 辻遺跡　2. 若宮田遺跡　3. 上中野遺跡　4. 清武城跡（城内遺跡）　5. 永田遺跡　6. 木花古墳群　7. 松ヶ迫窯跡　8. 清武古墳群　9. 飛行場遺跡）

車道建設に伴ない城内遺跡（清武城跡）が発掘調査され，又昭和５４年辻遺跡の発掘調査に先立ち若宮田遺跡が発掘調査されるなど，次第にこの地域の遺跡についてその内容が明らかにされ始めている。

城内遺跡は中世の山城である清武城の所在地にも比定されていて，発掘調査によっても二ノ丸跡に当たると考えられる遺構が検出され，又縄文土器の出土もみている。一方，若宮田遺跡からは 縄文前期土器と土師質の糸切り底をもつ土器が混在して出土していて，層位的に縄文前期層を検出することは出来なかったが，ことにバラエティーに富んだ縄文前期土器が清武川の北岸の台地上から出土した意義は大きくその一連の台地を見直す機会ともなり，その成果を踏まえて辻遺跡の発掘調査も実施し得たといえよう。

3　発掘調査の概要と経過

辻遺跡の位置する台地は，海抜絶対高６０ｍ以上の高まりをもつ三つの丘陵地からなる。今回の発掘の対象区は，その内の東の二つの丘陵地であり，その中でも東の丘陵地を畑地の段差に応じ３地区に分け，西の丘陵地を２地区に分けた。東丘陵地の３地区は，最も低位な東の畑地を第Ⅰ地区，その一段上の畑地を第Ⅱ地区，最も高位な西の畑地を第Ⅲ地区と名付けた。一方，西丘陵地の２地区は，比較的低位な西の畑地を第Ⅳ地区，東の一段高まりをもつ畑地を第Ⅴ地区と名付けた。

第Ⅰ地区には３×３ｍのグリッドを設定し，南から北へＡ～Ｅ，西から東へ１～１１としてグリッド番号を定めた。第Ⅱ地区も同様に３×３ｍのグリッドを設定し，南から北へＡ～Ｄ，西から東へ１～９とした。第Ⅲ地区には２×１５ｍのトレンチを設定し，それを１～３に区切った。第Ⅳ地区は第Ⅰ・Ⅱ地区と同様に３×３ｍのグリッドを設定し，南から北へＡ～Ｇ，西から東へ１～１３とした。第Ⅴ地区には３×３ｍのグリッドを３箇所設定した。

以下，週を追って発掘調査の概要と経過を記す。

＜第　１　週＞

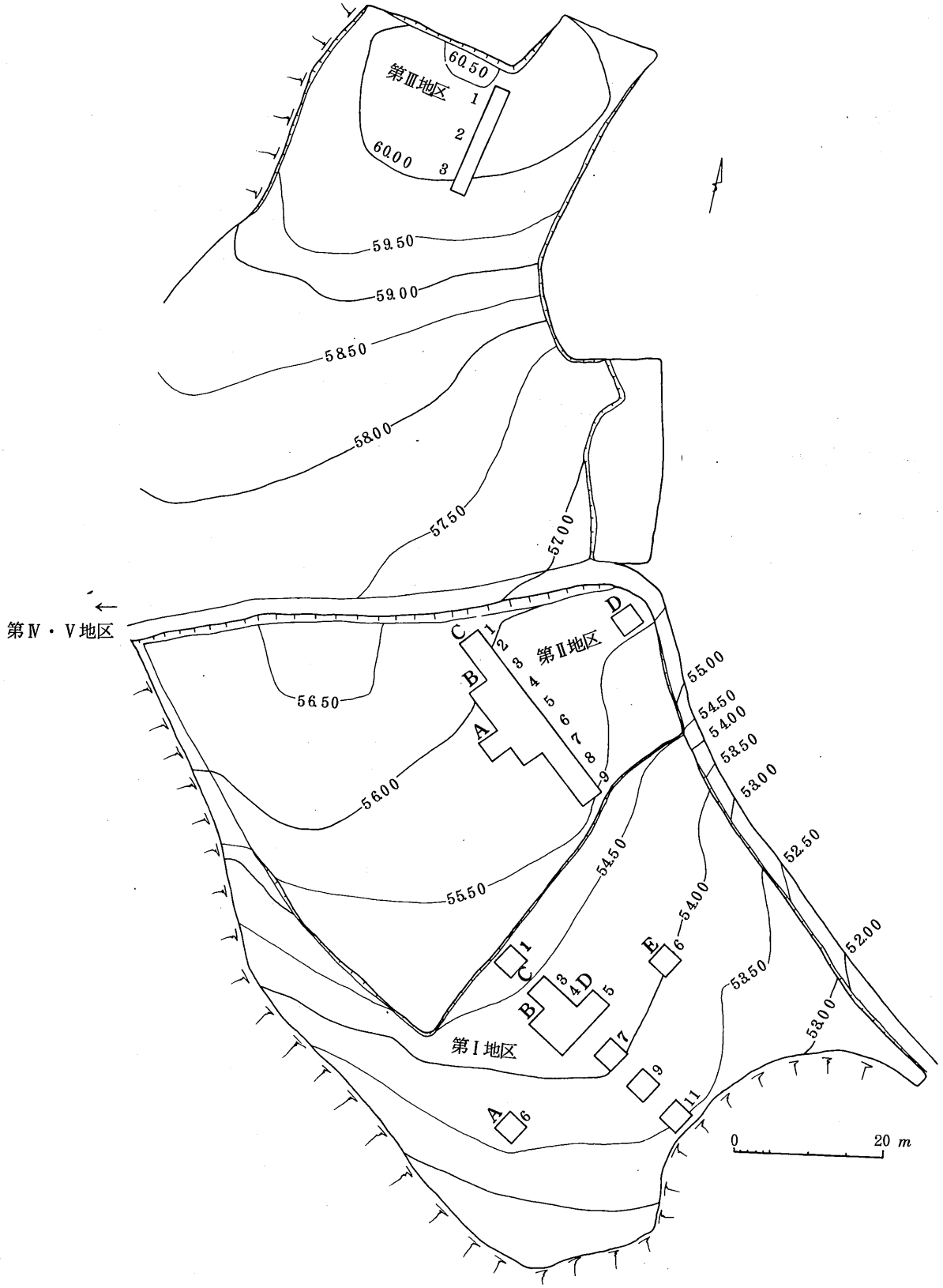
第Ⅰ地区から発掘調査を開始する。Ｃ－１，３，５，７，９，１１を発掘し，特にＣ－５から縄文前期土器の比較的良好な出土をみる。　又，Ｃ－９からは須恵器・土師器等の出土をみる。Ｃ－５の縄文前期土器の出土の広がりを確認するためＣ－４を発掘，又平行して第Ⅱ地区Ｃ－１，３，５，７，９を発掘する。第Ⅱ地区においてもアカホヤ上の自然層は削平され，アカホヤ下から縄文前期土器の出土をみる。

＜第　２　週＞

前週に引き続き第Ⅰ地区　Ｂ－４，５，Ｄ－５等を前期層の広がりをつかむため拡張発掘。Ⅲ層褐色土層から塞ノ神式，Ⅳ層暗褐色土層から前平・吉田式が出土し，層序関係の一つの指標となる。第Ⅱ地区では比較的土器出土の多いＣ－３，５を中心としてＡ－５，　Ｂ－４，５，６を発掘し，又全体の地形上の傾斜と土層の状態を明らかにするためＣ列を通して発掘する。一方，第Ⅲ地区，第Ⅳ地区Ｄ－１，３，５，７，８，１０，１３を発掘する。第Ⅲ地区では遺物の出土がⅢ層上面に限られ，以下は無遺物層となったが，第Ⅳ地区では第Ⅰ・第Ⅱ地区と同様，縄文前期層をとらえることが出来た。

＜第　３　週＞

第Ⅰ地区Ａ－６，Ｅ－６，第Ⅱ地区Ｄ－４を全体地形把握のために発掘。第Ⅱ地区Ｄ－４からは出土

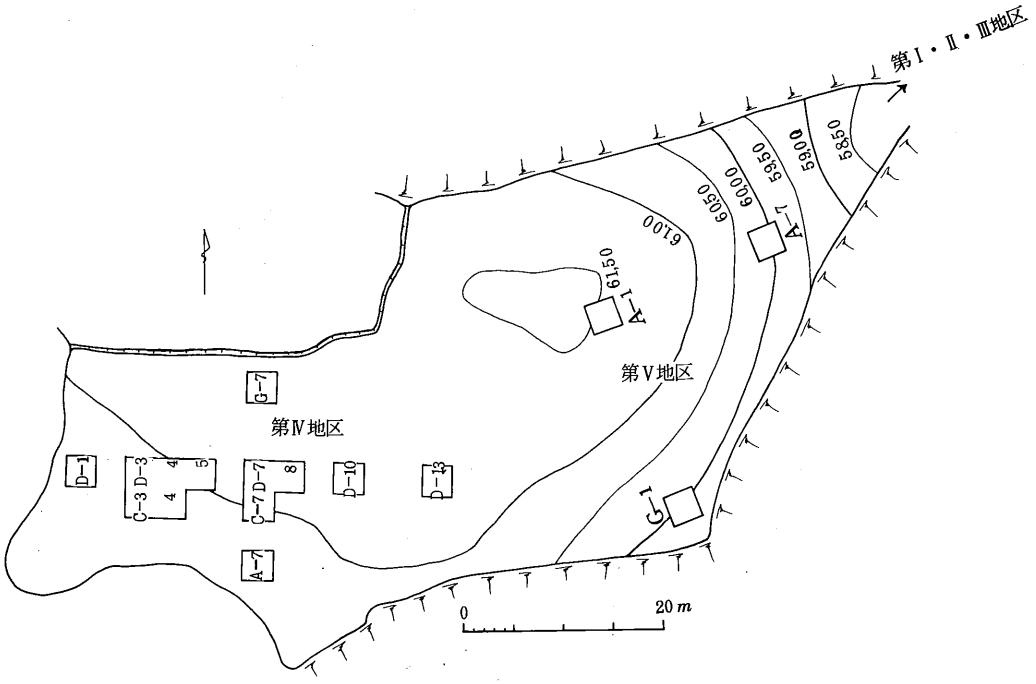


第２図　辻遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区地形図および発掘区位置図

遺物が確められなかったが，E－6からは押型文土器片等の出土を確める。又，第Ⅳ地区D－4において良好な出土状態で遺物がみられたため，C－3，4を拡張発掘する一方A－7，C－7，G－7を発掘。C－3，4　D－4．掘り下げの結果，塞ノ神A式系土器の1／3個体分の胴部片と底部片を押し潰された状態で検出，又礫石の集石様の集合の片鱗をとらえることが出来た。そのため，集石様の礫石の集合の全体をとらえるためD－3を発掘。以後，C，D－3，4として平面的に掘り下げ全体の散布状態を検出することに努めた。一方，第Ⅴ地区に3箇所グリッドを設定し発掘。当初，第Ⅳ地区より高位にあることからアカホヤ上の自然層の残存状態に期待が持たれたが，結果は他地区と同様にアカホヤ上の自然層を欠き最も高位の部分に設定したA－1では表土下1 *m*ほどで礫層にたっした。

＜第　4　週＞

第Ⅰ地区C－7で土師器・須恵器と共に住居跡と思われる片鱗を確認。又，第Ⅱ地区C－9よりも土師器坏の完形品出土。この週は各地区を無遺物層まで掘り下げることに努めた。その結果，第Ⅰ・Ⅱ地区ではⅣ層（暗褐色上層）下のⅤ層（硬質褐色土層）から無遺物層となり，第Ⅳ地区ではⅤ層（灰褐色土層）から無遺物層となった。平板測量ほか土層断面実測図，遺物出土状態実測図など測量・実測作業を行い，出土遺物のレベルをとり，遺物の取り上げ等を行う。



第3図　辻遺跡第Ⅳ・第Ⅴ地区地形図および発掘区位置図

第Ⅱ章　包含層の状態

各区とも，耕地のため著しく削平され，表土（耕土）下からはすぐアカホヤが露出し。アカホヤ上の自然層はすでに失われていた。発掘調査区内でアカホヤ上の自然層が残存していると考えられたのは，わずかに第Ⅰ・第Ⅱ地区の東端に限られる。

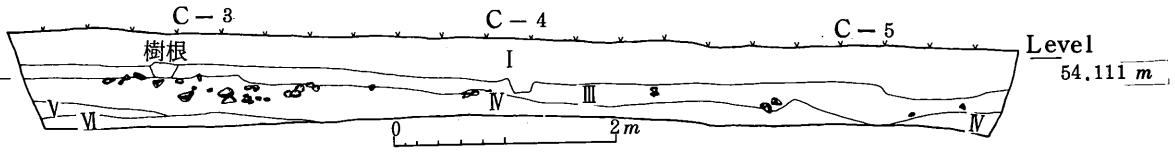
第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の位置する東丘陵地と第Ⅳ・第Ⅴ地区の位置する西丘陵地とでは、同一台地上ながらアカホヤ下の土層の様相に若干の差違が認められる。各区の包含層の状態の中でそのことに触れるが，本遺跡の土層図の作成は，一応各区を一定程度掘り下げた１２月２５日の段階で各区の土層を比較観察・検討し，次のように各区の土層の共通項から基準を定め，それを基に統一的に土層図を作成し，時間的制約による掘り下げの不足を出来る限りおぎなうように努めた。

	第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区	第Ⅳ・第Ⅴ地区
Ⅰ　層	表　上　（　耕　土　）	
Ⅱ　層	ア　カ　ホ　ヤ	
Ⅲ　層	褐　色　土　層	黒　色　土　層
Ⅳ　層	暗　褐　色　土　層	
Ⅴ　層	黒　褐　色　土　層	灰　褐　色　土　層
Ⅵ　層	硬　質　褐　色　土　層	褐　灰　色　土　層
Ⅶ　層	粘　質　黄　褐　色　土　層	褐　色　土　層
Ⅷ　層		礫層（粘質褐色土混じり）
Ⅸ　層	礫　　層	

1　第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の状態

<第Ⅰ地区>

第Ⅰ地区ではⅡ層アカホヤまでが削平され，わずかに同地区の南端（Ａ－６），北端（Ｅ－６），東端（Ｃ－１１）においてその片鱗を確認し得たにとどまる。しかし，かなり同地区は東に向って傾斜しており，その部分においては土師器・須恵器を伴なうアカホヤ上の自然層を残存させていた。



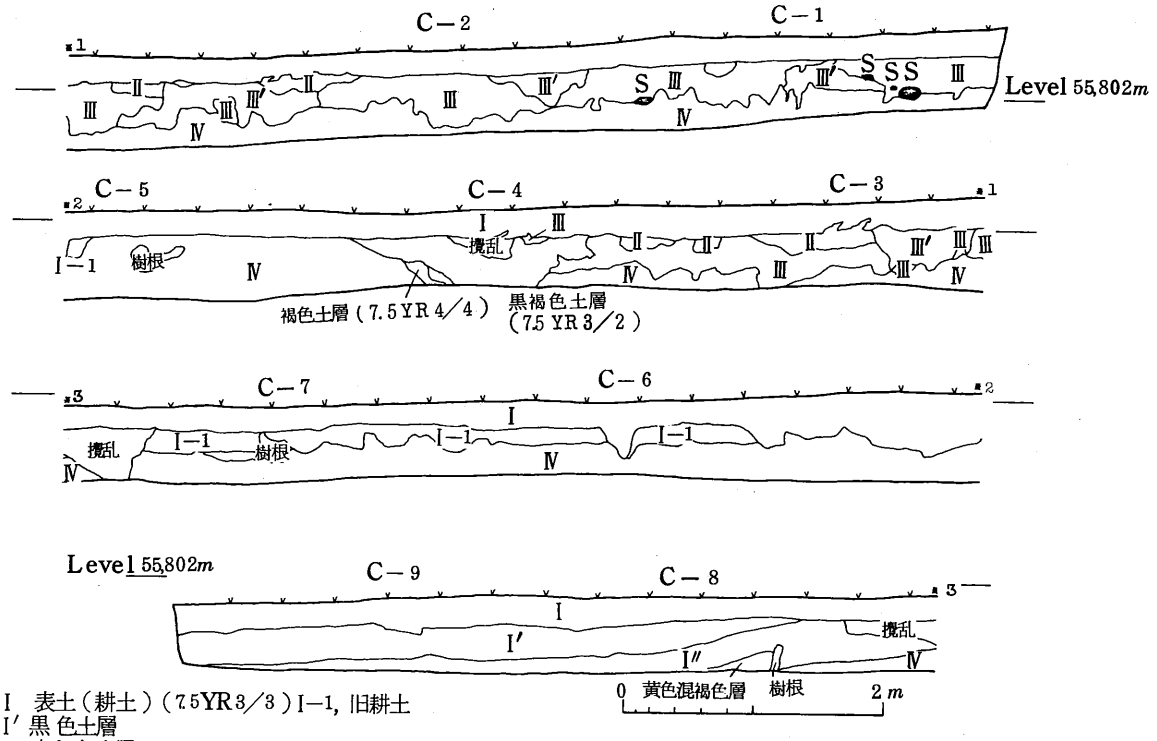
Ⅰ　表土（耕土）（７５YR３／３）
Ⅲ　褐色土層（７５YR４／６）
Ⅳ　暗褐色土層（７５YR３／４）
Ⅴ　黒褐色土層（硬質）
Ⅵ　褐色土層

第４図　第Ⅰ地区Ｃ－３～５・北壁土層断面実測図

縄文前期土器を比較的良好に検出することの出来たC－3～5グリットにおいては，Ⅱ層アカホヤはカットされⅢ層褐色土層，Ⅳ層暗褐色土層に縄文前期土器を包含している。Ⅲ層においては塞ノ神A式，Ⅳ層においては前平・吉田式がその主な出土土器である。地層は西から東に傾斜しており，9mで50cm程傾斜している。又，Ⅲ層とⅣ層の境からⅣ層中層にかけて礫の集石様の集まりを断面において確認出来たが，やや全体に地層にそって流れており，平面上で集石遺構となるものは検出し得なかった。Ⅴ・Ⅵ層は掘り下げの結果，無遺物層と確認された。

＜第Ⅱ地区＞

第Ⅱ地区では，ブロック状にアカホヤを確認し得たが，完全な層としては検出されていない。Ⅰ層表上（耕土）があり，同地区の西側（C－1，2）からC－3あたりまでⅡ層アカホヤをその下に追うことが出来た。C－6，7で旧耕土と思われる腐蝕土（Ⅰ－1層）が確認され，C－8，9でクロボクに似た黒色の腐蝕土（Ⅰ′層）がみられ，又その下に土師器を包含する暗褐色土層（Ⅰ′層）が認められた。前期縄文土器出土は第Ⅰ地区と同じくⅢ層褐色土層から認められ，Ⅳ層暗褐色土層との漸移層的な暗褐色土層（Ⅲ層）が部分部分に出てきている。Ⅳ層からは貝殻文系土器（Ⅲ類土器）およびヘラ描きによって綾杉文を施文する土器（Ⅱ類土器）などが出土している。第Ⅱ地区でも第Ⅰ地区と同様東端におい



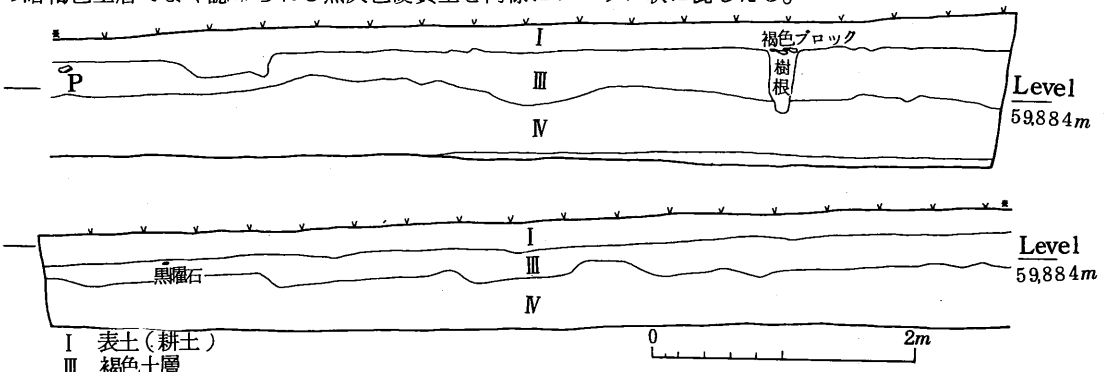
Ⅰ　表土（耕土）（7.5YR 3/3）I－1，旧耕土
Ⅰ′ 黒色土層
Ⅱ″ 暗褐色土層
Ⅱ　アカホヤ（7.5YR 5/8）
Ⅲ　褐色土層（7.5YR 4/6）
Ⅲ′ 暗褐色土層（7.5YR 4/4）
Ⅳ　暗褐色土層（7.5YR 3/4）やや粘質を帯びる

第5図　第Ⅱ地区C－1～9・南壁土層断面図

て土師器等の出土をみていることは，この地の旧地形の復元に有効であるが，第Ⅱ地区ではⅢ・Ⅳ層の層の乱れが著しく，C－8，9の掘り下げを土師器出土の面でとどめたことからトータルな地層の把握に若干問題を残した。

＜第Ⅲ地区＞

第Ⅲ地区は東台地では最も高位置にあることから，アカホヤの自然層の残存に最も期待が持たれたが，第Ⅰ・Ⅱ地区と同様すでに削平されていた。Ⅰ層表土（耕土），出土土器片，石鏃類はⅢ層褐色土層上面にのみ限られ，Ⅳ・Ⅴ層は無遺物層であった。Ⅳ層は褐色土をブロック状に混じえる他，アカホヤ下の暗褐色土層でよく認められる黒灰色硬質土を同様にブロック状に混じえる。



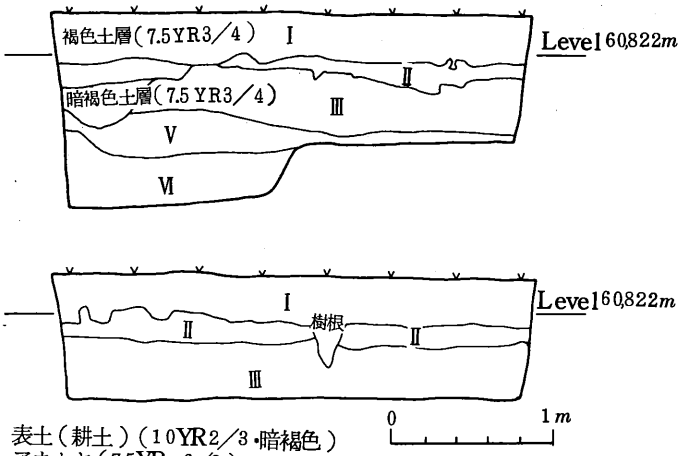
Ⅰ　表土（耕土）
Ⅲ　褐色土層
Ⅳ　暗褐色土層（Ⅲ層褐色土をブロック状に混入・同層上層の所々に黒灰色硬質土を混入）
Ⅴ　褐色土層

第6図　第Ⅲ地区1～3・西壁土層断面実測図

2　第Ⅳ・Ⅴ地区の状態

＜第Ⅳ地区＞

第Ⅲ地区もアカホヤ上の自然層は失われていたが，アカホヤは第Ⅰ・第Ⅱ地区に比し明瞭な層として把握出来る。しかし，アカホヤ下の層に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区と対照的な相異が認められる。Ⅲ層は漆黒に近い黒色土層で，前期縄文土器の出土はこの層に限られる。このⅢ層は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区におけるⅢ層褐色土層，Ⅳ層暗褐色土層に対応するものと考えられた。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区ではⅢ層とⅣ層に出土土器の相異が認められたが，第Ⅳ地区Ⅲ層には塞ノ神A・B式，前平・吉田式等が混在した状態で出土している。又，Ⅴ層から無遺物層となり，Ⅲ層中層あたりで集



Ⅰ　表土（耕土）（10YR2／3・暗褐色）
Ⅱ　アカホヤ（7.5YR　6／8）
Ⅲ　黒色土層（7.5YR2／1）
Ⅴ　灰褐色土層（7.5YR4／2・硬質）
Ⅵ　褐灰色土層（7.5YR4／1）

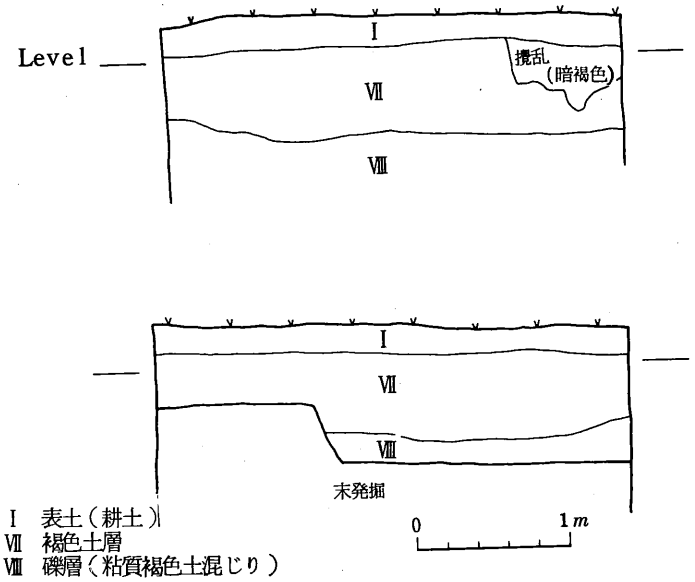
第7図　第Ⅳ地区D－7・東壁(上)，南壁(下)土層断面実測図

石遺構が検出されていることなどが，その理由である。

Ⅴ層灰褐色土層は，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区での黒褐色土層に，Ⅵ層褐灰色土層は，同区での褐色土層にそれぞれ対応させることが出来る。

＜第Ⅴ地区＞

第Ⅴ地区は，西丘陵地で最も高位置にあり，東丘陵地での第Ⅲ地区と同様層の残存に期待が持たれたが，ここもかえって削平が著しかった。



第８図　第Ⅴ地区Ａ－１・南壁土層断面実測図

第Ⅳ地区でのⅥ層までが削平されており，Ⅶ層褐色土層・粘質をもち乾燥するとブロック状にはがれる粘土質層，Ⅶ層礫層・粘質褐色土を混じえる，までを確認した。

土器出土はⅠ層下面に限られ，いずれも細片で削平時にはさみ込まれたものと考えられる。Ⅶ層からポイント様の石器を検出していることは特記すべきであろう。

以上，各地区の包含層および土層について述べたが，問題となるのはやはり第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区でのⅢ・Ⅳ層，第Ⅳ・Ⅴ地区でのⅢ層の対応の仕方であろう。先にも述べたように第Ⅳ・Ⅴ地区Ⅲ層黒色土層に土層色上からも，また集石遺構への層位的位置関係からも，周辺に出土する土器類に層序関係を決定的に与えることは困難であった。この問題については，縄文前期土器を出土した遺跡の土層を比較検討する中で「まとめ」で再度触れたい。

なお，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区と第Ⅳ・Ⅴ地区の土層の対応・対照は，遺跡の所在する台地の一部崩壊した崖面を参考として行った。

第Ⅲ章　縄文時代の遺構と遺物

1　集石遺構・ピット（第9図・第10図・第14図）

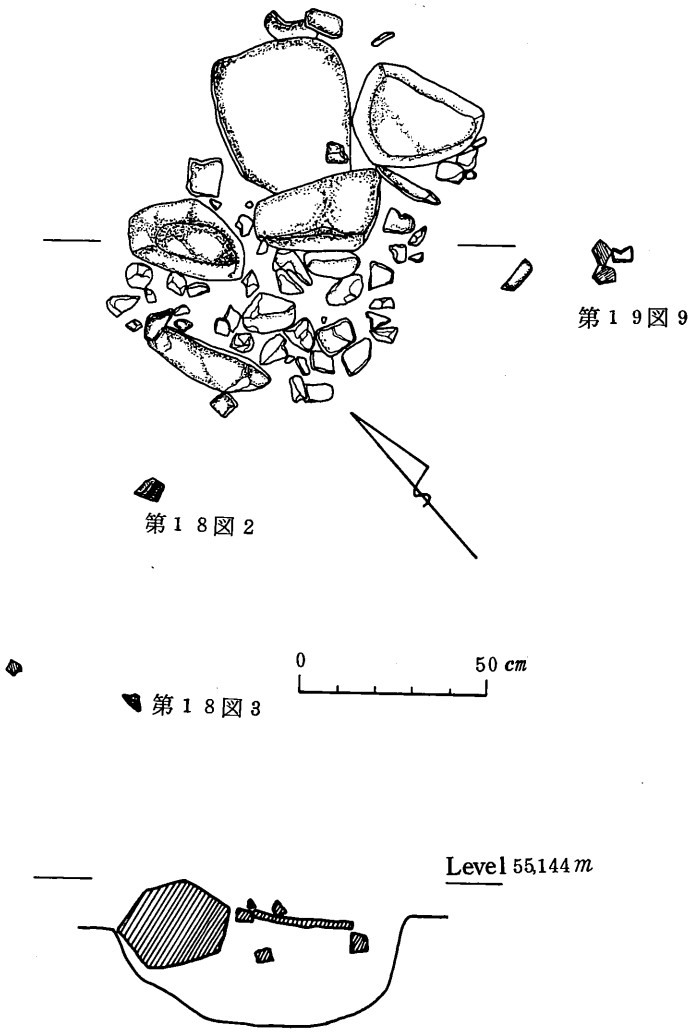
第Ⅱ・第Ⅳ地区において，拳大から人頭大の円礫あるいは角礫のまとまりのある集合を検出した。こうした礫の集合は第Ⅰ地区の土層断面（第4図）においてもその片鱗を認めることが出来る。礫のまとまりの在り方，あるいは周辺の遺物の出土状態からして，人為的な集石遺構として把握出来よう。

<第Ⅱ地区>（第9図，図版4－2）

この集石遺構は比較的大きな長軸40cm大の石から拳大以下の小さな礫の集合からなる。周辺からはヘラ描き綾杉文を施文する土器片あるいは条痕文土器片が検出されているほかやや離れてはいるが同様の礫の散布中から片面あるいは両面の凹石（第26図5・6）も検出されている。集石は60×110cmの不整形な広がりをもつが，集石下の掘り込みは明確ではない。又，礫は明赤褐色～灰褐色の色調を呈する安山岩質のものである。

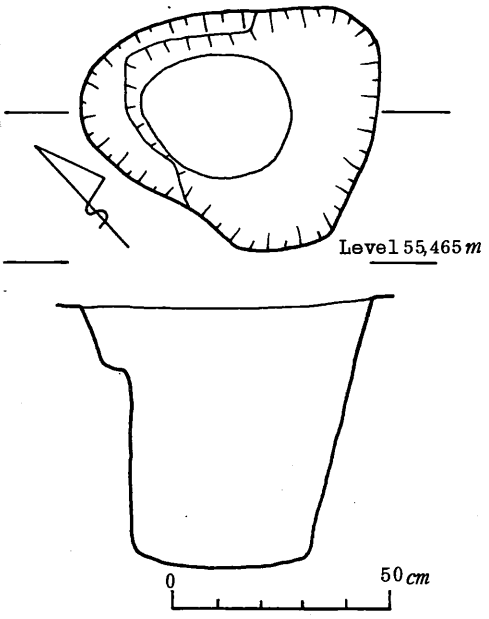
<第Ⅳ地区>（第14図，図版4－1）

第Ⅳ地区C，D－3，4からは比較的良好な状態で塞ノ神A式（Ia類土器）をはじめとする前期縄文土器の出土をみ，又その中に多くの礫の散布と集石遺構を検出した。集石に近い礫の間からは長二等辺三角形の凹基式の石鏃（第29図30）が出土している。この集石遺構は第Ⅱ地区のものに比して比較的均一な拳大の礫の集合からなっているが，第Ⅱ地区と同じく集石下の掘り込みは明確ではない。集石は90×120cmのほぼ円形状をなしている。



第9図　第Ⅱ地区C－8・集石遺構および周辺遺物出土状態実測図

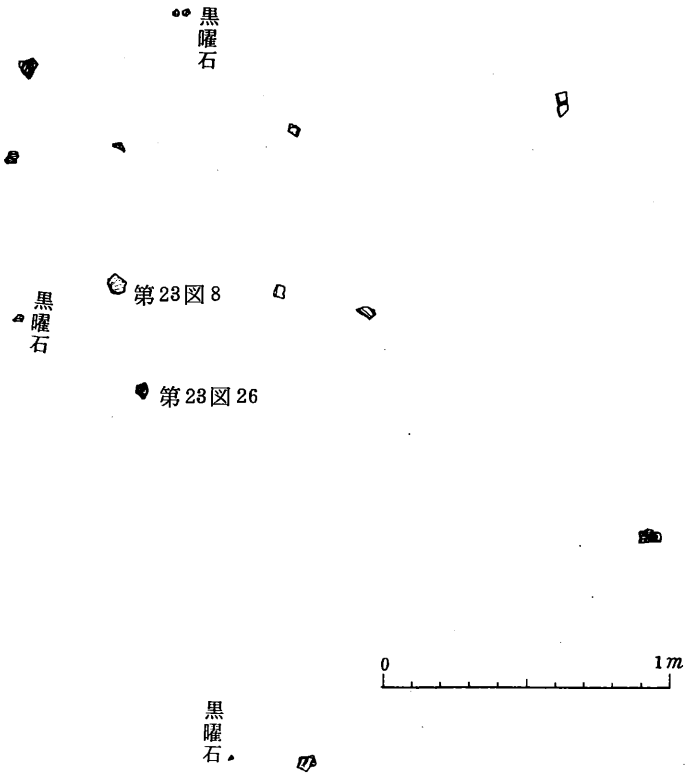
遺構としては他にピット状遺構を検出している。検出地は第Ⅱ地区集石遺構の南約１０mの地点である。ピットの存在はⅣ層の上層を掘り下げた段階で確認された。口径の長軸６７cm，短軸５５cm，底径は３４×２５cmの楕円状である。ピット内部の上層の地点から石錘（第２６図７）他土器細片を検出している。ここではピットとして扱ったが，石錘等出土遺物がその上部に限られたこと，あるいは周辺の遺物出土状態との関連を若干欠くこと，又その形状の不整形もあわせて，どのような用途のものであるのか，どの時期のものであるのか，又ピットとして断定し得るのか，不明な点は多い。



第１０図　第Ⅱ地区Ａ－５・ピット実測図

２　遺物の出土状態

５つの地区に分けた発掘区は，現在の畑地の段差に応じ便宜的に設定したものにすぎないが，それぞれの地区からの土器の出土状態・頻度には大きな差異が見られる。まず，押型文土器（Ⅵ類）の出土はほとんどが第Ⅰ地区に集中している。第Ⅰ地区以外からは、わずかに第Ⅳ地区において山形押型文が１点検出されているにすぎない。しかし，第Ⅰ地区における出土状態もまとまりのあるものではなく（第１１図），散漫な状態である。次に前平（Ⅴ類）・吉田（Ⅳ類）式系土器については，第Ⅰ地区にやや集中化した出土が見られたものの，



第１１図　第Ⅰ地区Ｅ－６・押型文土器出土状態実測図

第Ⅱ・第Ⅳ地区の出土状態は散漫であった。ヘラ描き綾杉文（Ⅱ類），貝殻腹縁刺突連続山形文（Ⅲ類）土器は主には第Ⅱ地区に次いで第Ⅰ地区に集中化して検出され，塞ノ神式（Ⅰ類）系土器は第Ⅰ・第Ⅳ地区に集中化して検出されている。

＜第Ⅰ地区＞

第Ⅰ地区からはほとんど各タイプの土器が出土しているが，この地区において塞ノ神A式（Ia類）系土器がⅢ層（褐色土層）から前平（Ⅴ類）・吉田（Ⅳ類）式系土器がⅣ層（暗褐色土層）から出土しており，それぞれの先後関係を一定程度押さえることが出来た。

＜第Ⅱ地区＞

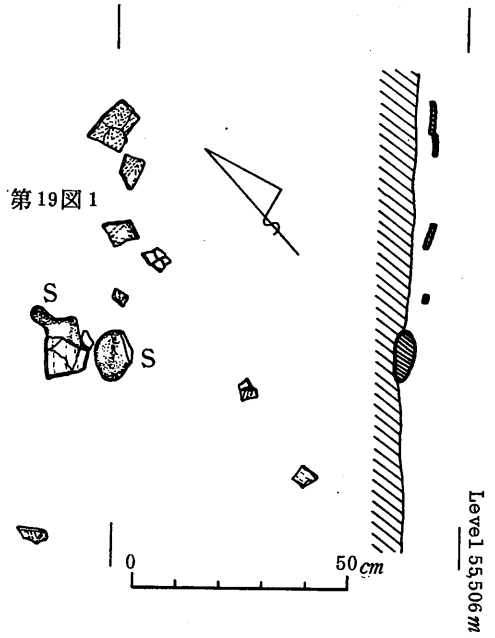
第Ⅱ地区からは塞ノ神式（Ⅰ類）系土器はほんの数点検出されたのみで，前平（Ⅴ類）・吉田（Ⅳ類）式系土器のタイプとⅡ類・Ⅲ類のヘラ描き綾杉文・貝殻腹縁刺突連続山形文の両タイプとでは，相対的には後者に比較的良好な出土状態をみることが出来た（第１２図）。又，石鏃の出土の大半がこの地区に集中していることは注目される。

＜第Ⅲ地区＞

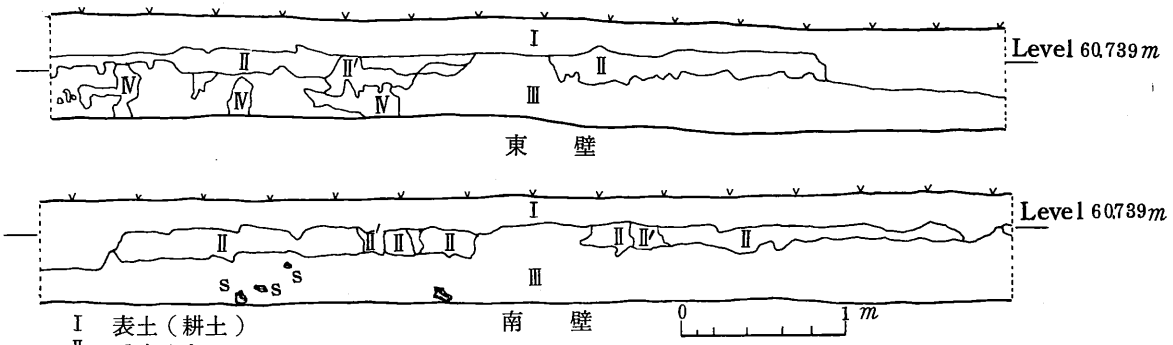
発掘面積が第Ⅴ地区と共に相対的に狭小であるため第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区との同列の比較は出来ないが，遺物の出土はⅢ層上層に限られる。

＜第Ⅳ地区＞

第Ⅳ地区C，D－３，４からは集石遺構と，良好な出土状態での塞ノ神式（Ⅰ類）系土器の資料を得ている（第１４図）。しかし，出土層が第Ⅰ



第１２図　第Ⅱ地区C－３・Ⅲ類土器出土状態実測図



Ⅰ　表土（耕土）
Ⅱ　アカホヤ
Ⅱ′　アカホヤ混褐色土層
Ⅲ　黒色土層
Ⅳ　灰褐色土層（硬質）

第１３図　第Ⅳ地区C，D－３，４土層断面実測図

・第Ⅱ地区のⅢ層（褐色土層）とⅣ層（暗褐色土層）とは全く色調の異なる黒色土層中より前平・吉田式系土器も出土しているため，この地区においては両者の先後関係はさほど明確ではない。

Ⅰ層は表土，Ⅱ層がアカホヤ層で，第Ⅰ・第Ⅱ地区に比し，比較的厚い層（約２０cm前後）で入ってきており，アカホヤ層の状態は同地区が最も良好である。アカホヤ層は所々で途切れⅡ′層（アカホヤ混褐色土層）がブロック状に入ってくる。Ⅲ層の黒色土層が縄文前期の包含層で，所々に下位の層であるⅣ層（灰褐色土層）がブロック状で浮き上がってきている（第１３図）。このⅢ層（黒色土層）は第Ⅰ・第Ⅱ地区のⅢ層（褐色土層）・Ⅳ層（暗褐色土層）に対照させることが出来る。第Ⅰ・第Ⅱ地区において礫の集石がⅢ層下面からみられⅣ層上層に至ることに対応して，第Ⅳ地区においての集石遺構あるいは礫の散布はⅢ層黒色土層の中層に見られる。このことから，集石を境としⅢ層上層が第Ⅰ・第Ⅱ地区のⅢ層（褐色土層）に，Ⅲ層下層がⅣ層（暗褐色土層）に対照されよう。

しかし，出土遺物をⅢ層上層と同下層において峻別することはほとんど出来ず，遺物の出土はⅢ層中層に集中していた。この内，Ⅰa 類とした塞ノ神A式の底部を含むほぼ1/3個体分（第１６図）が，いわば押し潰された状態で出土している（第１４図）。この土器の原位置は，破壊廃棄されたものではなく，底部が正位置の状態で検出されたことからも，正位置で置かれた土器がその後自然的な原因で押し潰された状態になったものと考えられる。又，他の前平・吉田式・押型文系等の土器は集石遺構を中心とした広範囲な礫の散布の中に散漫に出土している。

＜第Ⅳ地区＞

発掘面積が第Ⅲ地区と同様狭小であり，遺物の出土状態も細片の散布程度にとどまる。

3 遺　物

(1) 土　器

Ⅰ類としたものは，従来「塞ノ神式」とよばれているもので，第Ⅰ・第Ⅳ地区に集中した出土が見られた。撚糸文系を「塞ノ神A式」，貝殻文系を「塞ノ神B式」とする従来の分類に従い，前者をⅠa 類，後者をⅠb 類として分類するが，Ⅰb 類と認め得るものはわずかに第Ⅳ地区出土の１点にすぎない。

Ⅱ類としたものは，ヘラ描きによる綾杉文を縦位あるいは横位に施文するもので，県下においてはあまり知られていないタイプである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から少量ながら比較的大きな破片で出土している。

Ⅲ類としたものは，貝殻腹縁を鋸歯状あるいは山形状に施文するものを基本的タイプとし，あるものは平行に施文するものも含むタイプである。ここでは便宜的に貝殻腹縁刺突連続山形文と呼ぶことにする。鹿児島県下からも数例出土しているが，まだ標準遺跡の発見がなく型式化されていない。

Ⅳ類としたものは，従来「吉田式」とよばれているもので，貝殻腹縁刺突文とクサビ形貼付け文を施文するというその特徴を具備したものである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から出土しているが多くは第Ⅰ地区に集中してみられた。

Ⅴ類としたものは，従来「前平式」とよばれているもので，口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文あるいはヘラ状施文具により羽状に凹凸文を施し，器面には条痕文が施文されるものである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から出土しているが多くは第Ⅱ・第Ⅳ地区にみられた。

第１４図　第Ⅳ地区Ｃ，Ｄ－３，４・集石遺構および遺物出土状態実測図

Ⅵ類としたものは，いわゆる押型文土器である。山形・楕円・格子目の各タイプが出土しているが，第Ⅰ地区に集中して出土しており，他には第Ⅳ地区からわずかに１点出土しているのみである。

他に点数は１点ないし数点ではあるが特徴ある数種の土器が出土しており，それについては一括して扱うことにした。

宮崎県内では，いまだ縄文前期土器の資料の蓄積と分類が充分なされているとはいえず，本遺跡出土のものもまたそうした現段階での枠を抜け出ることが出来ない。今後の資料の蓄積の中で新たに提起される問題も出てこようが，一応前記の通り大枠の分類で以下土器類を紹介していきたい。

Ⅰ類（第１５～１７図，図版６～８）

Ⅰ類の内，Ⅰa 類とする塞ノ神Ａ式系土器は本遺跡における主要な土器群の一つである。

口縁部の形態には，第１５図１・２・５～８の「く」の字に外反するものと，第１７図３～６・８・９の若干内湾する傾向のものが認められる。地区別にいえば第Ⅰ地区のものが前者で，第Ⅳ地区のものが後者である。又，第Ⅴ地区出土の第１７図３７も後者のタイプにあり，出土地区の傾向の相異が存在するようである。前者のタイプでは，頸部から上を飾るものがほとんどで沈線文で，頸部から網目状撚糸文の施文が行われている。後者のタイプでは，口縁部は沈線文・刺突文等で飾られ，ほとんどのものが口唇部に刻みを施している。第１７図３７は区画する沈線文の中に撚糸文を施文している。

第１５図３は，「く」の字に外反し山形口縁をなすもので，口唇部に刻目をもち特徴のあるものである。頸部は「く」の字形をなすものがほとんどで，沈線文あるいは刺突文が施されている。

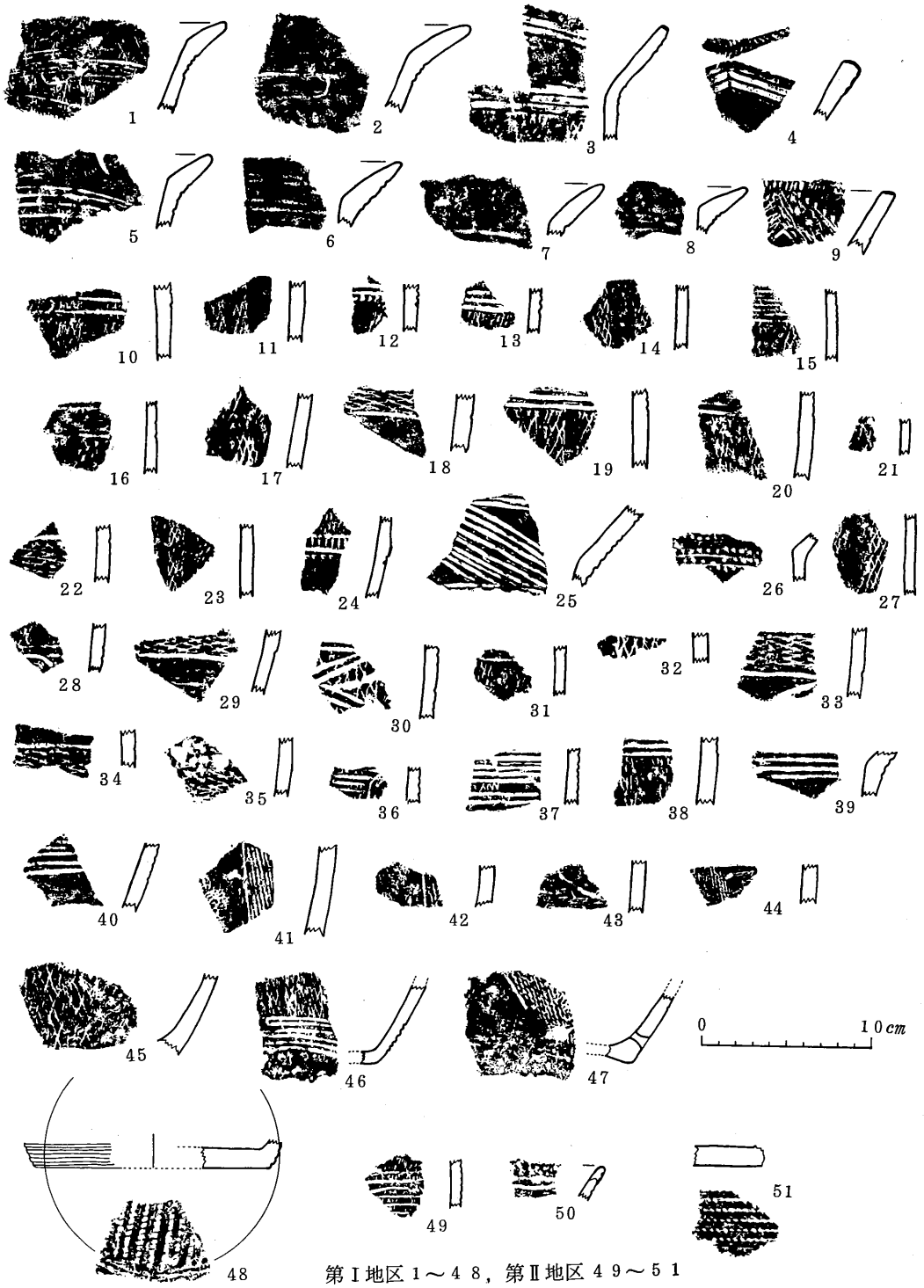
胴部はさほどふくらみを示すものがなく，ほとんどが胴部の下位まで直口するもののようである。施文には縦位と横位の網目状撚糸文（塞ノ神Ａ－ａ式）と平行撚糸文・斜縄文（塞ノ神Ａ－ｂ式）があり，第１５図１８・２２・２９・３３～３５が横位の網目状撚糸文である他縦位の網目状撚糸文で，平行撚糸文・斜縄文は第１５図４１～４４・４７，第１７図１６・１７・２６・２７・３４・３５で数は少ない。沈線文の採用には大きくは２種類あり，無文帯と撚糸文帯とを区画的に表現するものと，撚糸文帯の上に施文されるものである。横位あるいは斜位に撚糸文が施文される場合に前者が採用され，縦位の場合はほとんどが後者の採用によって装飾される。又，沈線文も平行に施される場合と，第１５図３０，第１７図１７のように横位にあるいは斜位に撚糸文を横切る場合があり，全体の文様帯としては第１６図のようにその組み合わせによって構成されよう。底部はおおむね平底ないし若干の上げ底である。第１５図４６・４８・５１，第１７図３３は平底，第１５図４７，第１７図３４，第１６図は若干の上げ底である。第１５図４７には穿孔がみられる。文様は第１５図４６，第１７図３３・３６の平行沈線文を胴部底辺に施文するもの，第１５図４７，第１７図３４の沈線文で区画された撚糸文を施文するものがある。本遺跡出土では前者が平底，後者が上げ底となる傾向がみられる。

第１６図の土器は本遺跡出土の中で最も良好なⅠa 類の資料である。頸部での半径１６.５*cm*，底部半径が８.２*cm*の大きな深鉢形土器で，現高２８.５*cm*で底部までを含め復元するならば３７*cm*以上の器高をもつと思われる。口縁部は明らかでないが，口縁近くまで沈線文が施文されると考えられる。胴部にはややふくらみをもつもののようであるが，底部にかけてすぼまる器形である。器壁は底部付近よりむしろ胴部最大径から上の頸部，あるいは口縁部にかけてが厚く，胴部下位の底部にかけては逆に薄くなる。

第１表　Ｉ類土器一覧表

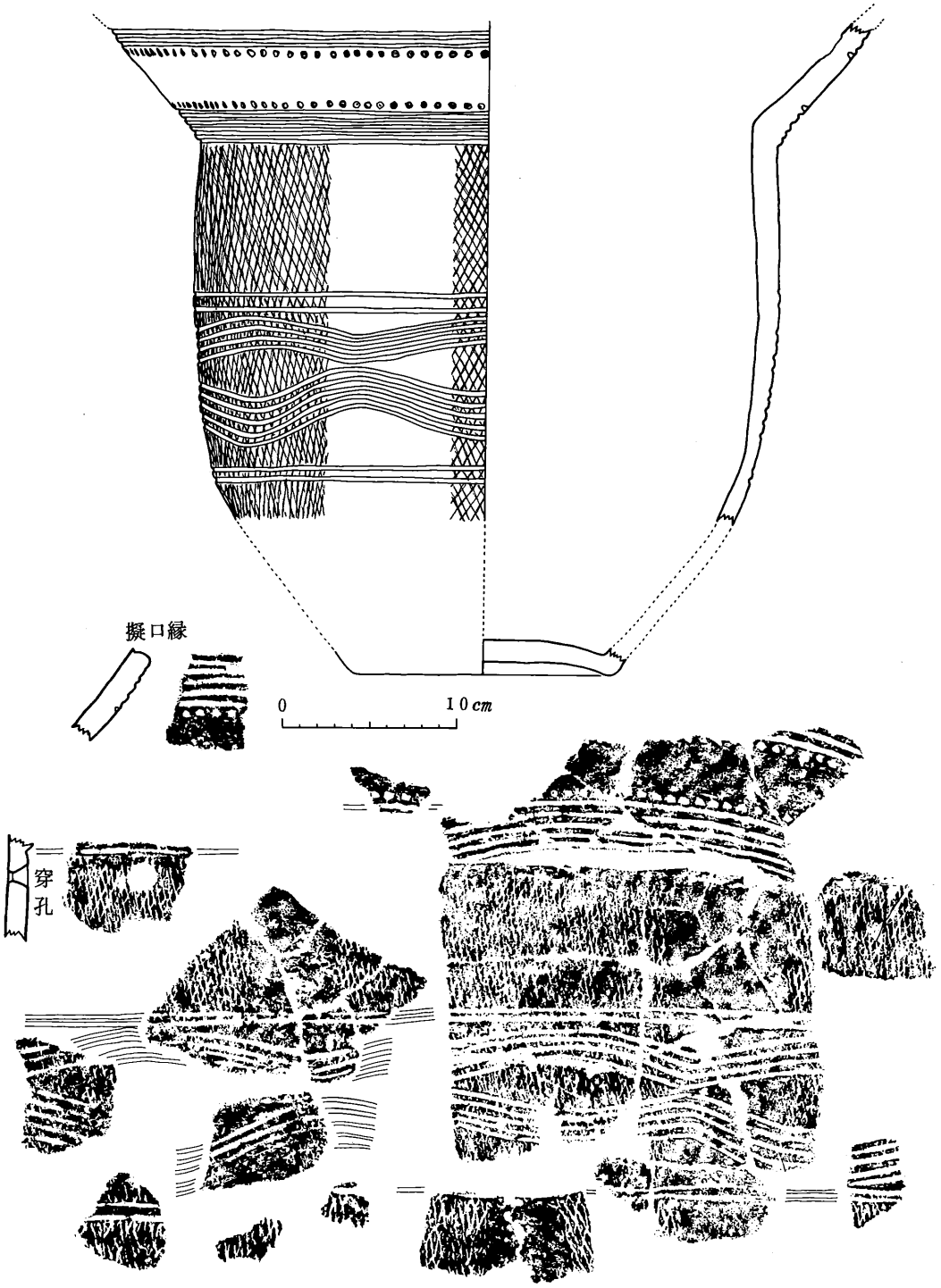
挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第１５図　１	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	網目状撚糸文・沈線文	「く」字口縁	石英粒混	暗黒褐色	不良	推定口径１２cm
２	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	沈線文	「く」字口縁	石英粒混	白黄色	良好	
３	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	網目状撚糸文・微隆起	山形口縁	微細石英混	黄褐～黒褐色	普通	同一個体
４	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	突帯文・口縁部刻目					
５	Ｉ・Ｂ－４	口縁部	網目状撚糸文・沈線文	「く」字口縁	石英粒混	黄褐色	良	
６	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	沈線文	「く」字口縁	石英粒混	白黄色	普通	
７	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	沈線文	「く」字口縁	石英粒混	黒褐色	良	
８	Ｉ・Ｄ－５	口縁部	沈線文	「く」字口縁	石英粒混	白黄色	良	
９	Ｉ・Ｃ－３	口縁部	区画沈線文・網目状撚糸文		微細石英混	灰褐色	良好	
１０	Ｉ・Ｃ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文	胴部にややふくらみをもつ	石英混を多く混入	黒褐～赤褐色	不良	
１１	Ｉ・Ｃ－７	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	白黄色	良好	
１２	Ｉ・Ｃ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	黄褐～灰褐色	不良	
１３	Ｉ・Ａ－６	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	白灰色	良好	
１４	Ｉ・Ｅ－６	胴部	網目状撚糸文	器壁は薄い方である	微細石英混	暗赤褐～黒灰色	良	
１５	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文	器壁は薄い方である	石英粒混	白黄色	良好	同一個体（？）
１６	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	灰褐色	良好	
１７	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文		微細石英混	白黄～白灰色	良好	
１８	Ｉ・Ａ－６	胴部	区画沈線文・網目状撚糸文		石英粒混	赤褐～褐色	普通	横位に撚糸文を施文する
１９	Ｉ・Ｃ－Ｅ	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	暗褐～黒褐色	普通	
２０	Ｉ・Ｂ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	褐～灰褐色	普通	
２１	Ｉ・Ｃ－３	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	黒褐色	普通	
２２	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		微細石英混	灰褐～褐色	良	横位に撚糸文を施文する
２３	Ｉ・Ｅ－４	胴部	網目状撚糸文		微細石英混	黒褐～灰黒色	良好	
２４	Ｉ・Ｃ－１	胴部	網目状撚糸文・竹管刺突文		石英粒混	暗赤褐色	普通	上下の沈線により突帯を作り出し，刻み目を施す
２５	Ｉ・Ｃ－１	頸部	沈線文		石英粒の混入は少量で精良な粘土	白黄～灰白色	良好	
２６	Ｉ・Ｄ－５	頸部	沈線文・刺突文		微細石英粒を多く混入	黒褐色	不良	
２７	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文	器壁は薄い方である	石英粒を多く混入	黒褐～灰褐色	良	
２８	Ｉ・Ｃ－１	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	白黄～黒褐色	普通	
２９	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒を多く混入	暗黒褐～暗褐色	良	横位に撚糸文を施文する
３０	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	赤褐～黒色	良好	
３１	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	白黄色	良好	
３２	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	赤褐～黒灰色	良好	
３３	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	黒褐色	普通	３４と同一個体（？）
３４	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	灰褐色	普通	３３と同一個体（？）
３５	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文		微細石英混	赤褐～黒色	良	風化剝離が著しい
３６	Ｉ・Ｃ－４	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	白黄色	普通	
３７	Ｉ・Ｂ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文		雲母・石英粒混	暗黒褐色	不良	
３８	Ｉ・Ｄ－５	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	淡灰褐色	普通	
３９	Ｉ・Ｄ－５	頸部	沈線文		微細石英混	白黄色	良	
４０	Ｉ・Ｄ－５	胴部	沈線文		石英粒混	白黄色	良好	頸部上の口縁部に近いところの破片（？）
４１	Ｉ・Ａ－６	胴部	区画沈線文・斜縄文	器壁は比較的厚い	微細石英混	淡黄～灰褐色	良好	同一個体 塞ノ神Ａ－ｂ式
４２	Ｉ・Ａ－６	胴部						
４３	Ｉ・Ｃ－３	胴部	平行撚糸文		石英粒混	淡赤褐色	良好	スス付着，塞ノ神Ａ－ｂ式
４４	Ｉ・Ｄ－５	胴部	平行撚糸文		石英粒混	白黄色	普通	塞ノ神Ａ－ｂ式
４５	Ｉ・Ｃ－４	胴部～底部	網目状撚糸文		石英粒混	黒褐色	普通	

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
46	Ⅰ・C－9	底部	網目状撚糸文・沈線文		微細石英混	黄褐色	良好	
47	Ⅰ・E－4	底部	平行撚糸文・沈線文		雲母・石英粒混	灰褐色	良好	穿孔有り・炭化物内面付着 塞ノ神A－b式
48	Ⅰ・B－4	底部	平行沈線文	（推定径14cm）	石英粒を多く混入	黒褐～灰褐色	良好	底に貝殻腹縁の平行刺突文
49	Ⅱ・C－7	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	暗赤褐色	普通	
50	Ⅱ・C－8	口縁部	沈線文・刺突文		大きめの石粒混入	茶褐色	不良	
51	Ⅱ・C－8	底部		（推定径9.6cm）	石英粒を多く混入	白黄色	良好	底に貝殻腹縁の平行刺突文
第16図	Ⅳ・C,D－3,4	———	網目状撚糸文・沈線文・刺突文	深鉢形土器	石英粒を多く混入	茶褐色	良好	胴部全体の1/8が出土している
第17図 1	Ⅳ・C,D－3,4	口縁部	口唇部へラ描き綾杉文		石英粒混	白灰～灰褐色	良好	スス付着
2	Ⅳ・B－1	口縁部	沈線文・刺突文		微細石英混	黒灰～黄褐色	不良	
3	Ⅳ・C,D－3,4	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内湾する口縁（穿孔有り）	石英粒の混入は少量で精良な粘土	灰褐～黒褐色	良好	同一個体
4	Ⅳ・C,D－3,4	口縁部						
5	Ⅳ・D－1	口縁部	沈線文・口唇部刻目		石英粒混	暗褐色	良好	
6	Ⅳ・D－8	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内湾する口縁	微細石英混	黄褐～黒褐色	不良	
7	Ⅳ・D－5	口縁部	沈線文・刺突文		石英粒混	灰褐色	不良	
8	Ⅳ・A－7	口縁部	沈線文・刺突文	やや内湾する口縁	微細石英混	黄褐色	良好	
9	Ⅳ・D－1	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内湾する口縁	石英粒混	黒褐色	普通	
10	Ⅳ・D－5	口縁部	沈線文・刺突文		石英粒混	赤褐色	良好	
11	Ⅳ・D－10	頸部	沈線文		石英粒を多く混入	白黄色	普通	
12	Ⅳ・D－3	頸部	沈線文・刺突文		石英粒混	淡黄褐色	良好	
13	Ⅳ・D－1	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	黄褐～黒色	不良	
14	Ⅳ・D－1	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	褐～黒褐色	普通	風化が著しい
15	Ⅳ・D－1	胴部	網目状撚糸文・沈線文		微細石英を多く混入	褐～黒褐色	普通	
16	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	斜縄文・沈線文		微細石英混	赤褐～黒褐色	良好	粘土のつなぎ目から剥離した破片
17	Ⅳ・D－8	胴部	平行撚糸文・沈線文		石英粒混	褐～灰褐色	良好	塞ノ神A－b式
18	Ⅳ・D－1	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	黒～暗褐色	良	
19	Ⅳ・D－1	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	暗黄褐色	普通	
20	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	淡褐色	良好	
21	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒の混入は少ない	黒褐～灰褐色	良好	
22	Ⅳ・D－5	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	暗赤褐～暗褐色	普通	
23	Ⅳ・D－8	胴部	網目状撚糸文		石英粒混	黄褐～黒褐色	普通	
24	Ⅳ・D－5	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	赤褐色	良好	
25	Ⅳ・D－5	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	黒褐～灰褐色	不良	
26	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	平行撚糸文		石英粒混	赤褐～灰褐色	普通	同一個体（？）塞ノ神A－b式
27	Ⅳ・C,D－3,4	胴部						
28	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒の混入は少ない	灰黒～黒色	不良	
29	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	沈線文	器壁は比較的薄い	石英粒の混入は少ない	暗黄褐色	良好	同一個体
30	Ⅳ・C,D－3,4	頸部						
31	Ⅳ・D－1	胴部	平行撚糸文		微細石英混	淡黄褐～黒褐色	普通	風化が著しい
32	Ⅳ・D－13	胴部	網目状撚糸文・沈線文		石英粒混	淡黄褐～黒褐色	普通	
33	Ⅳ・C,D－3,4	底部	網目状撚糸文・沈線文	平底	微細石英混	灰褐～白黄色	良好	
34	Ⅳ・D－1	胴部～底部	斜縄文・沈線文	若干上げ底となる	微細石英混	赤褐～黄褐色	良好	同一個体 塞ノ神A－b式
35	Ⅳ・D－1	胴部～底部						
36	Ⅳ・D－1	底部	網目状撚糸文・沈線文	平底	微細石英混	赤褐色	良好	
37	Ⅴ・A－1	口縁部	平行撚糸文・沈線文・口唇部刻目		微細石英混	黒褐色	良好	
38	Ⅴ・A－1	頸部	沈線文・刺突文		石英粒混	白黄色	良	
39	Ⅴ・G－1	胴部	網目状撚糸文・沈線文	器壁は比較的薄い	微細石英混	淡黄褐～白灰色	良好	
40	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	貝殻刺突文		石英粒混	赤褐色	良	Ⅰb類（塞ノ神B式）

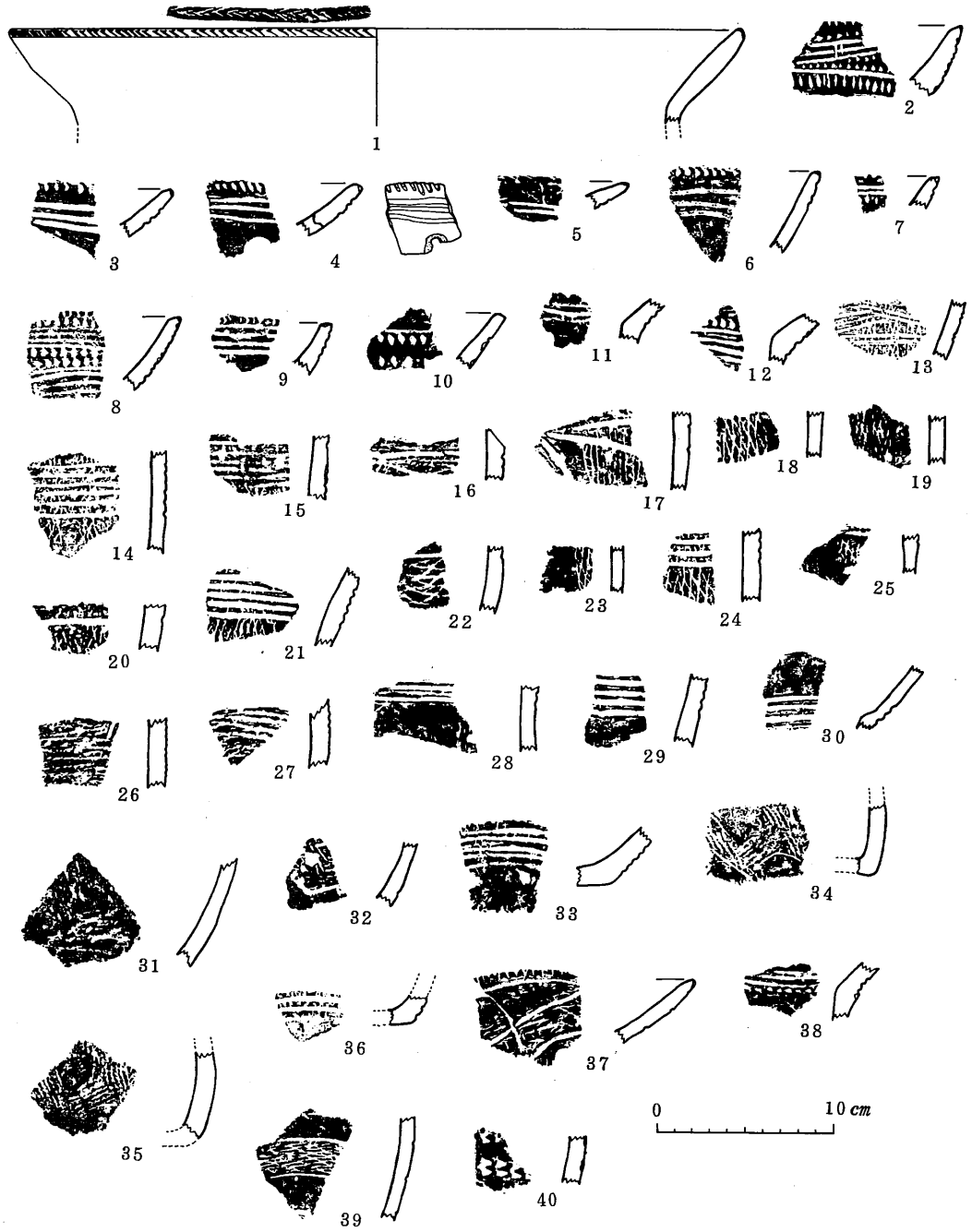


第Ⅰ地区 1～48，第Ⅱ地区 49～51

第15図　第Ⅰ・第Ⅱ地区出土 Ⅰa類土器実測図・拓影



第１６図　第Ⅳ地区出土Ⅰa類（塞ノ神A式）土器実測図・拓影



第Ⅳ地区１～３６・４０，第Ⅴ地区３７～３９

第１７図　第Ⅳ・第Ⅴ地区出土Ⅰa類・Ⅰb類土器実測図・拓影

底部は上げ底である。文様は頸部から口縁部にかけて平行沈線文と竹管による刺突文を施し，頸部下の胴部には網目状撚糸文を施文している。また，胴部最大径部から平行沈線文と曲線沈線文が採用されている。上段２条・下段２条の間を４条と５条の沈線文を相対する波状に組み文様帯を構成している。口縁部に近い破片に，粘土帯のつなぎ目から剝離した「擬口縁」が観察出来，又頸部直下の胴部片に穿孔を認める。胎土には石英・長石等の砂粒を比較的多量に混入し，焼成は良好である。

貝殻文系の「塞ノ神B式」の特徴を備えた土器片は**第１７図４０**の一点である。貝殻縁による刺突文を二条器面に施しており，胎土には石英粒を混じえ，赤褐色を呈し，焼成は比較的良いものである。

Ⅱ　類（第１８図，図版９）

ヘラ描きによる綾杉文を施文するもので，口縁部が肥厚化する特徴をもつ。胎土には石英・長石等の砂粒を混入し，全般に焼成も良好で比較的堅牢な感じを与える土器である。

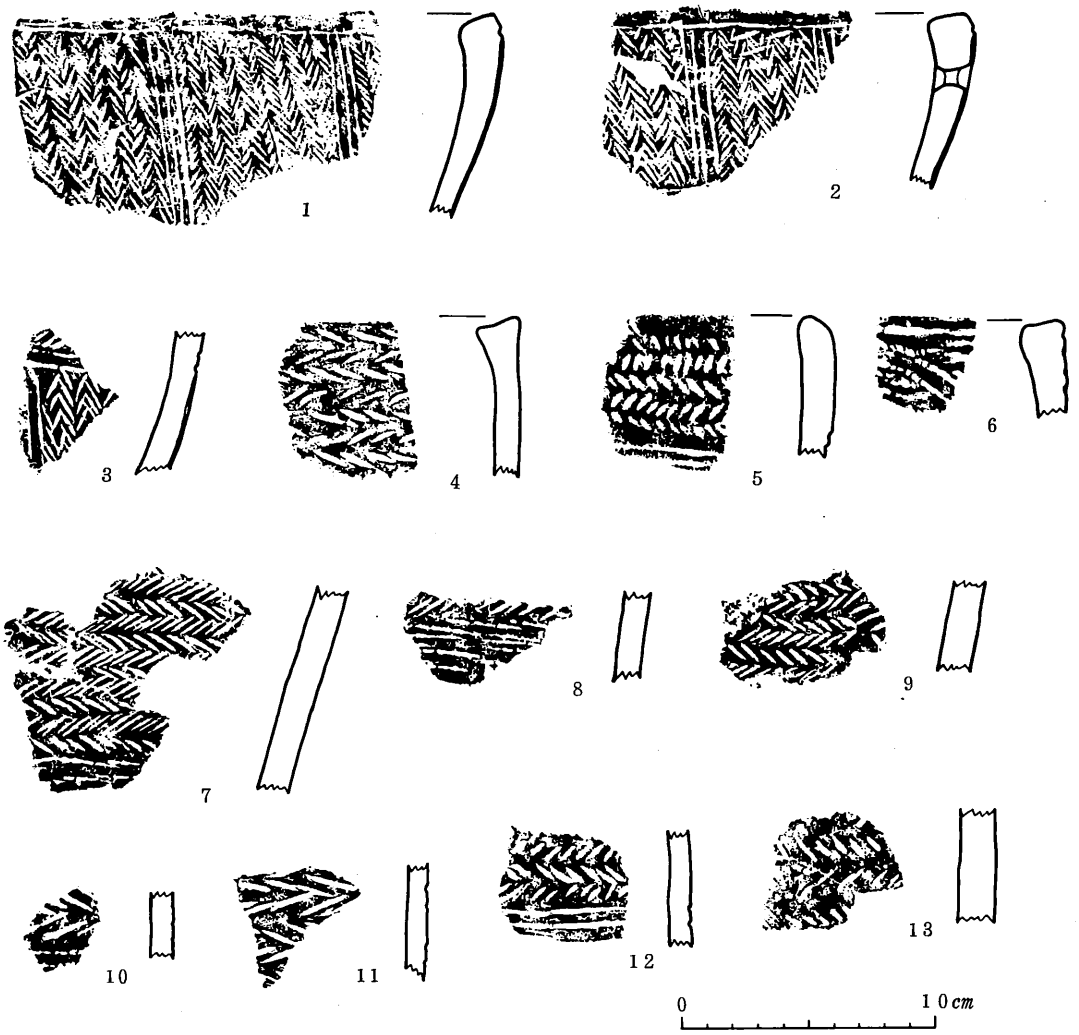
第１８図１・２は同一個体で，３も焼成・色調・胎土および綾杉文の形状も似ているが，上部に横位の綾杉文の片鱗がうかがえ，全体の文様帯の復元は得られた資料の中では困難であるが，ここでは一応疑問符を付しておくにとどめようと思う。器形としては，１・２は胴部に向かう器面の角度からして余り深くはない鉢形を呈すると考えられる。口径の大きさは推定３４*cm*で，２には穿孔が認められる。４は綾杉文が横位に施文される他，１・２に比してやや文様が粗大で，口縁の肥厚化あるいは口唇部の形状にも違いがみられるが，焼成は良好でやはり堅牢な感じを与える。５もまた口縁・口唇部の形状が前二者と異なり肥厚化もさほど大きくはなく丸みを帯び，文様も綾杉が開きぎみに表現されている。胎土には石英・長石等を多量に混入し，砂質の強い粘土を用いている。７～９は同一個体と思われ，綾杉文の下位に横位の貝殻腹縁による刺突文が施されることが知られる。これらは，やや焼成が１・２・４に比べ劣るが，全般的には精製された土器である。１１の文様は４に類似し，１２・１３は５の文様に近いが，１３では粗っぽく文様のパターンが踏襲されているにすぎない。

６は，施文が貝殻腹縁による刺突文であり，他と文様要素に差異が見られるが，口縁・口唇部の肥厚化・平坦化など１・２・４に類似するもので，他に類例がないため別に扱わずⅡ類中に分類した。

全般には器面の内側はほとんど丁寧に研磨されており，精緻な土器の部類に入る。

Ⅲ　類（第１９図，図版１０）

貝殻腹縁による刺突文を連続した山形あるいは鋸歯状に施文するもので，全般に胎土に混入される石英・長石等の砂粒も多く，混入物におおくの場合雲母が加わることが特徴である。焼成もさほど良好なものはなく粗製的な土器である。器形は，胴部にあまりふくらみをもつことのない深鉢形が主と考えられる。１・２は同一個体で縦位に連続山形文を施文している。口縁は山形口縁をなし，胴部までほとんど直線的でふくらみがない。３～８も同一個体と考えられ，これでは連続山形文が横位に施文されている。９～１４も同一個体と考えられ，横位の連続山形文は３～８に比べると細かくやや配列に乱れが見られる。胎土には他と同様，雲母・石英・長石等を含むが，より砂質の強いものである。これらの土器片には山形文の他に横位ないしは若干斜位の平行の貝殻刺突文がみられ，文様のバラエティーの一つの要素が認められる。１５は，そうした平行の貝殻腹縁刺突文を施文した口縁部であるが，Ⅲ類土器の中

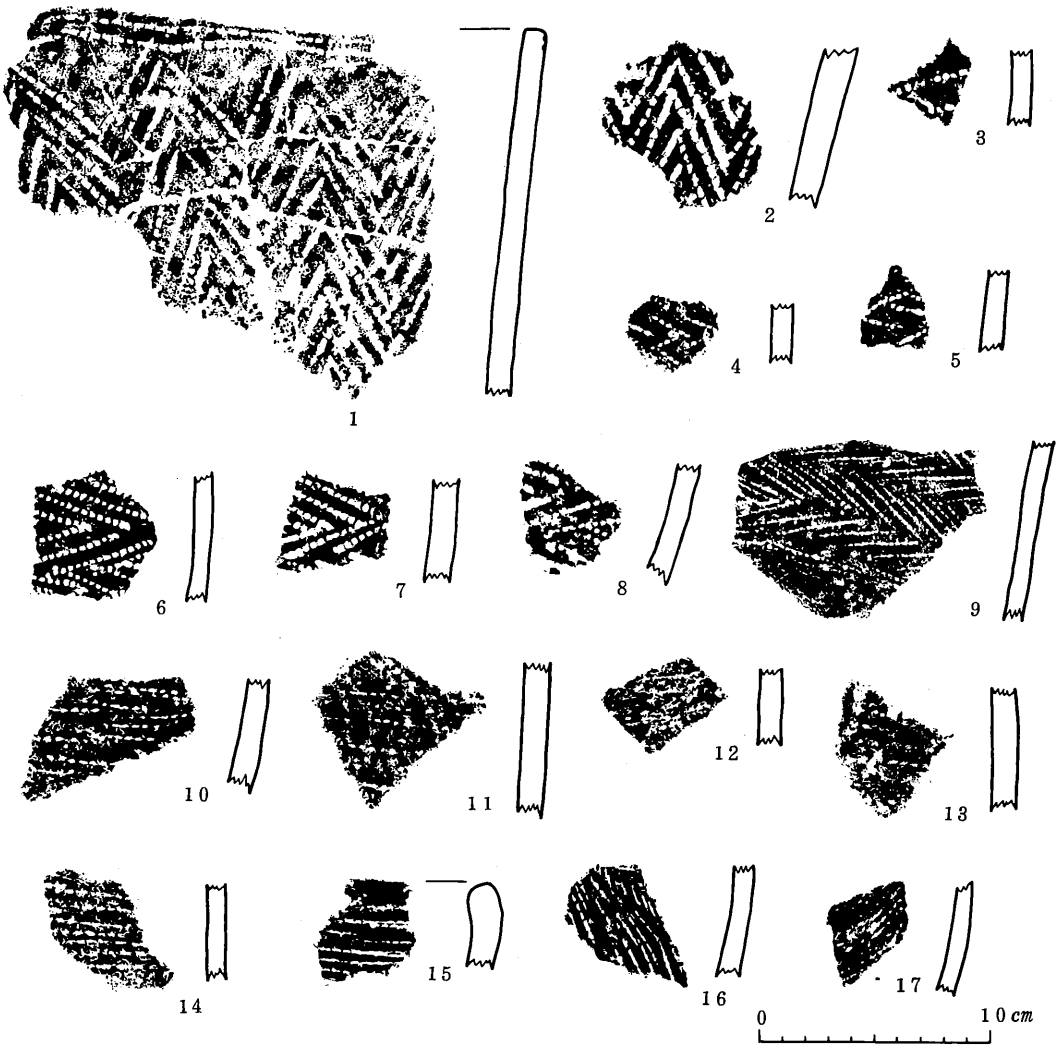


第Ⅰ地区５・６・１３，第Ⅱ地区１～３・７～１２，第Ⅳ地区４

第１８図　第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区出土Ⅱ類土器実測図・拓影

第２表　Ⅱ類土器一覧表

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第18図 1	Ⅱ・C−3	口縁部	沈線文・ヘラ描き綾杉文	（推定口径３４cm）穿孔有り	石英粒を多く混入	黒灰～灰褐色	良好	同一個体
2	Ⅱ・C−8	口縁部						
3	Ⅱ・C−8	胴部	沈線文・ヘラ描き綾杉文		石英粒を多く混入	黒灰～灰褐色	良好	1，2と同一個体（？）
4	Ⅳ・C−7	口縁部	ヘラ描き綾杉文	口唇部が肥厚し，平坦である	雲母・石英粒混	黒～暗黒褐色	良好	内面はヘラ状の工具で研磨されている
5	Ⅰ・C−4	口縁部	沈線文・ヘラ描き綾杉文	口唇部はやや肥厚するが，丸みを帯びている	石英粒を多く混入	灰黒色	普通	
6	Ⅰ・C−3	口縁部	貝殻腹縁刺突文	口唇部が肥厚し，平坦である	石英粒を多く混入	灰褐～赤褐色	普通	文様は異なるが，口縁部の形状の類似から参考としておけた
7	Ⅱ・C−7	胴部	ヘラ描き綾杉文・横位貝殻刺突文		石英粒を多く混入	暗褐～黒褐色	普通	同一個体（？）
8	Ⅱ・C−7	胴部				暗褐～黒褐色	普通	
9	Ⅱ・C−8	胴部	ヘラ描き綾杉文			黒褐色	普通	
10	Ⅱ・C−6	胴部	ヘラ描き綾杉文・横位貝殻刺突文		石英粒混	灰褐色	普通	
11	Ⅱ・B−6	胴部	ヘラ描き綾杉文	器壁は比較的薄い	石英粒混	灰褐色	良好	
12	Ⅱ・C−6	胴部	沈線文・ヘラ描き綾杉文		石英粒混	淡赤褐～黒褐色	普通	内面は丁寧に研磨されている
13	Ⅰ・C−3	胴部	ヘラ描き綾杉文	器壁は比較的薄い	石英粒混	赤褐～黒色	普通	



第Ⅰ地区 3～15，第Ⅱ地区 1～2・16～17

第１９図　第Ⅰ・第Ⅱ地区出土Ⅲ類土器実測図・拓影

第３表　Ⅲ類土器一覧表

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第19図 1	Ⅱ・C−3	口縁部	貝殻腹縁刺突連続山形文	口縁直口	雲母・石英粒を多く混入	黒褐～暗赤褐色	普通	同一個体
2	Ⅱ・C−3	胴部	貝殻腹縁刺突連続山形文					
3	Ⅰ・D−5	胴部	横位貝殻腹縁刺突連続山形文	胴部にほとんどふくらみをもたない	雲母・石英粒を多く混入	黒褐～暗赤褐色	普通	同一個体（？）
4	Ⅰ・C−5	胴部						
5	Ⅰ・C−5	胴部						
6	Ⅰ・E−6	胴部						
7	Ⅰ・E−6	胴部						
8	Ⅰ・E−6	胴部						
9	Ⅰ・E−6	胴部	横位貝殻腹縁刺突連続山形文下位に平行刺突文をもつ	胴部にほとんどふくらみをもたない	雲母・石英粒を多く混入	灰褐色	普通	同一個体（？）
10	Ⅰ・D−5	胴部						
11	Ⅰ・D−5	胴部						
12	Ⅰ・D−5	胴部						
13	Ⅰ・D−5	胴部						
14	Ⅰ・D−5	胴部						
15	Ⅰ・C−4	口縁部	平行貝殻腹縁刺突文	わずかに内湾する口縁	石英粒混	暗黒褐色	普通	
16	Ⅱ・C−9	胴部	貝殻腹縁刺突文		石英粒混	灰褐～褐色	普通	同一個体
17	Ⅱ・C−1	胴部						

に加えることが出来ようと思う。しかし，口縁部の形状には１と違いがあり，やや器壁も厚く，わずかに内湾がみとめられる。１６・１７での貝殻腹縁刺突文には配列の乱れがみられ，１０～１４にみる平行な貝殻腹縁刺突文とも異なるが，やはり文様のバラエティーの一つとして考えられそうである。

Ⅳ　類（第２０図・第２１図１～３・６～２０，図版９・１１）

いわゆる「吉田式」系の土器で，第Ⅰ地区からの出土が大半を占める。角筒土器と円筒土器が認められるが，器形の全体を復元出来るものはなかった。角筒土器は**第２０図１～４・１２・１７・１９・２０・２７・３３・３５・３９・４１～４３**，**第２１図１１・１２**などで，円筒土器は**第２０図２１・２２**，**第２１図１・９・１０・１３・１６**などである。角筒土器と円筒土器との間には，文様をはじめとし胎土・焼成・色調・器壁の厚さなどに大きな違いは認められず，全般に比較的微細な石英・長石等の砂粒を胎土に混じえ，焼成も良好な方である。

口縁部の形状には，**第２０図１・２・４**など山形口縁をなすと認められるものがあり，すべての口縁部片の口唇には刻目が施されている。口縁端部の文様は３条の横位の貝殻腹縁刺突線文を施すものがほとんどで，以下に縦位あるいは斜位の貝殻腹縁刺突線文が施されている。貝殻腹縁による刺突文は多くの場合波状の線文として表現されるが，**第２０図４０～４３**などでは若干刺突部分が方形に表現されている。条痕文の地文はほとんどの土器片に認められたが，**第２０図２・３・１１・１２・２０・３７・３８**，**第２１図６・１６**には条痕の地文が施されていない。又，条痕文は斜位に施文されるものがほとんどであるが，**第２０図２１・２２**などは縦位に施文されるものである。**第２０図３９**，**第２１図２・４**などは条痕というより押し引きに近いが，いわゆる押し引き文は**第２１図２０**に認められる。「吉田式」の特徴とされるクサビ形貼り付け文は最も良好には**第２０図２**に認められたが，他は貼り付け文の磨滅等が著しい。その中でも，**第２１図７・８**のクサビ形貼り付け文は若干幅の広くなるもので，最近の資料の集積の中で進められている「吉田式」の細分化の中に組み入れられるもののようである。底部片としては**第２０図４４**があり，角筒土器のもので刻目を施している。

Ⅴ　類（第２１図４・５，第２２図，図版１０）

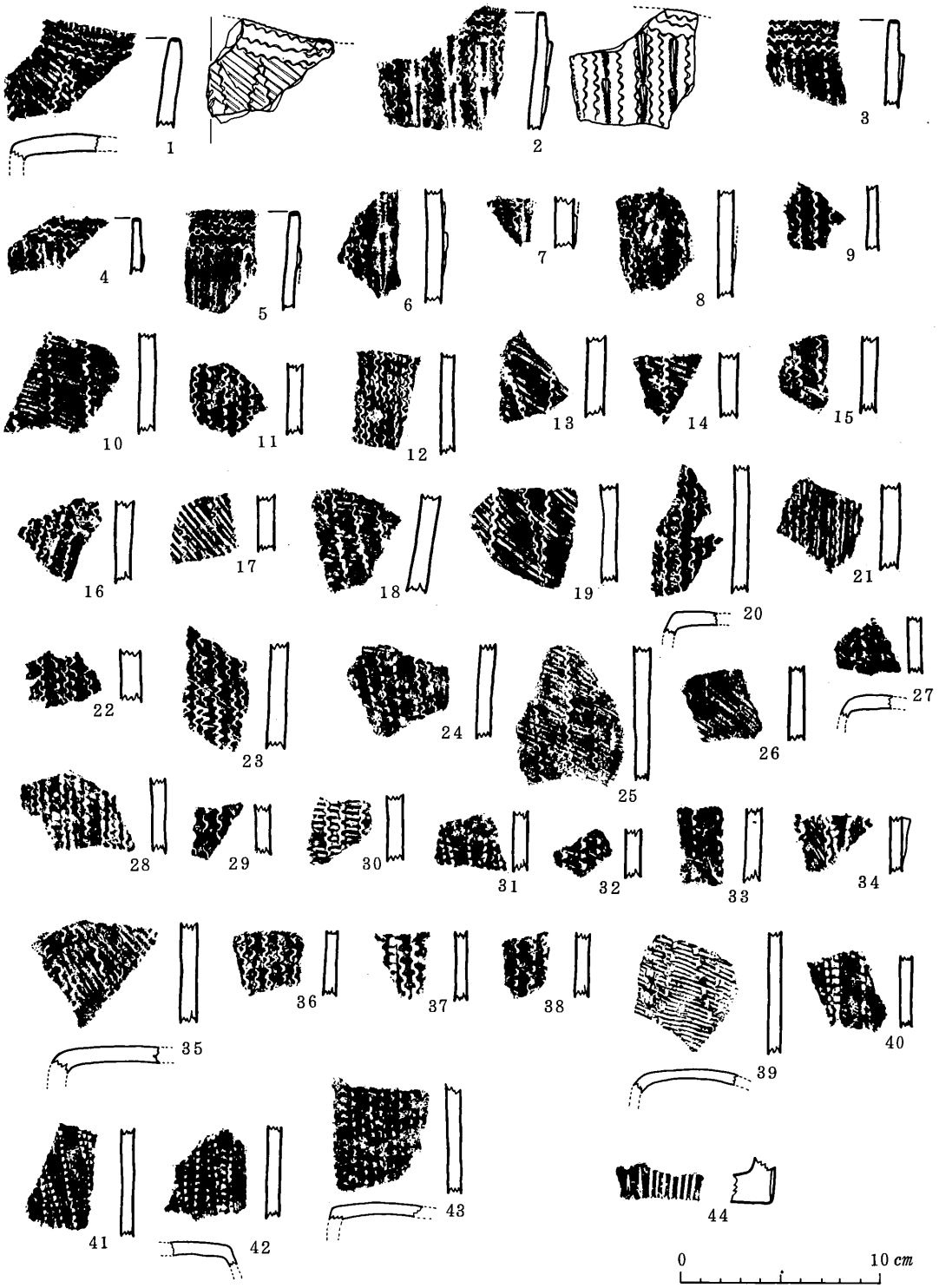
いわゆる「前平式」に属するとされるもので，その出土数は少なく，主には第Ⅱ・第Ⅳ地区にみられた。角筒土器と同筒土器が認められ，**第２１図４・５**，**第２２図１７～１９**はその角筒土器と考えられる。**第２２図１～３**は，口縁端部にヘラ状の施文具により羽状あるいは列点状に凹凸文を施すもので，口唇部は平坦になり角ばっている。２・３では口縁端部下に沈線を施文して区画し，１では口縁端部下に粗い条痕文を施文している。**第２２図４～１５**はいずれも口縁端部に貝殻腹縁連続刺突文を施文し，以下は条痕文を施すタイプのものである。口縁部はいずれも直口をなすが，６がわずかに外湾を示している。１６は角筒土器の胴部と考えられ，やや粗大に方形状に表現された貝殻腹縁刺突文が施文されている。条痕の地文も施文されている。１７～１８は同一個体で条痕文のみが施文されており，１７の破片に角筒のコーナーの片鱗がわずかに認められるほか，横位断面も直線的で角筒土器と判断される。

全般的にⅣ類「吉田式」土器に比して，胎土に混入される石英・長石等の砂粒が多く，砂質が強い粘土が使用されている。焼成も全般的に悪くはないが，さほど良好ともいえない。

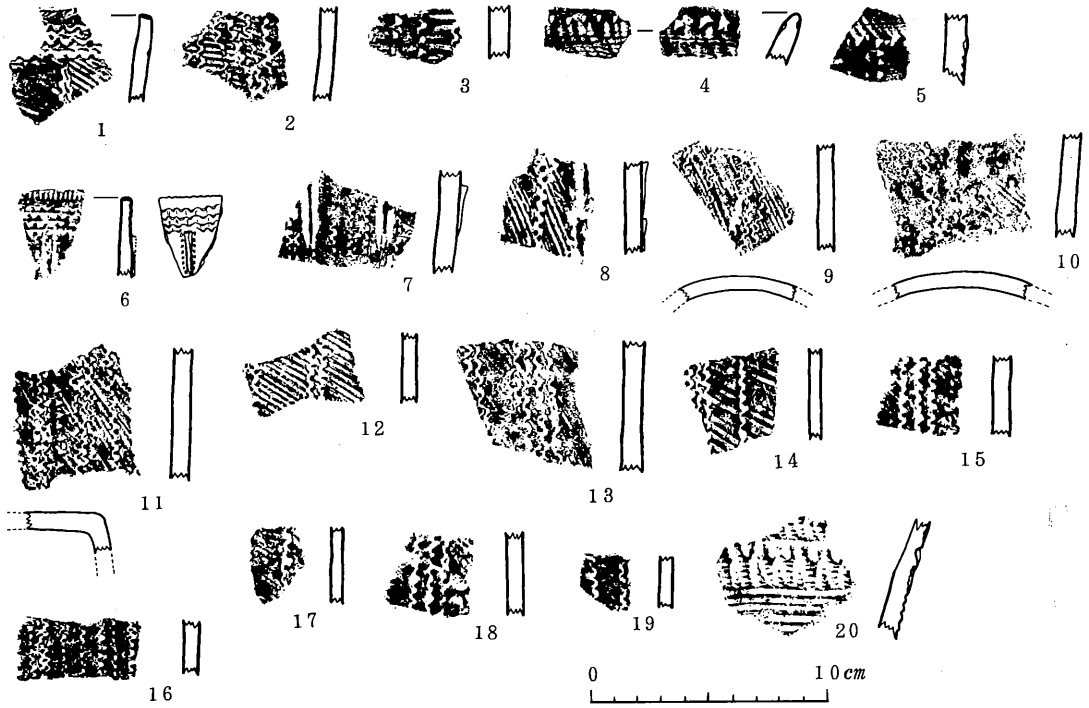
第４表　Ⅳ類土器一覧表

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第20図 1	Ⅰ・C－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒・山形口縁	微細石英混	黒褐～褐色	良好	口唇部刻目
2	Ⅰ・C－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文 クサビ形貼り付け文	角筒・山形口縁	石英粒混	黒褐色	良好	口唇部刻目・条痕の地文なし
3	Ⅰ・B－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文 クサビ形貼り付け文	角筒	微細石英混	黒褐～赤褐色	普通	口唇部刻目・条痕の地文なし
4	Ⅰ・C－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文	角筒・山形口縁	石英粒混	黒褐色	良好	口唇部刻目
5	Ⅰ・C－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		微細石英混	黒褐色	普通	口唇部刻目・条痕は縦位に施文される
6	Ⅰ・C－4	口縁部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	黄褐色	良	
7	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	黒褐～赤褐色	良好	
8	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	淡黄褐色	普通	
9	Ⅰ・C－1	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	黒褐～褐色	良好	
10	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒～白黄色	良	
11	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文		石英粒混	黒褐色	普通	条痕の地文なし
12	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文	角筒	石英粒混	褐色	普通	条痕の地文なし
13	Ⅰ・C－9	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	黒褐～黄褐色	良好	
14	Ⅰ・C－9	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	赤褐色	普通	
15	Ⅰ・B－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	暗褐色	良好	
16	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒褐色	普通	
17	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	石英粒混	黒褐～赤褐色	良好	
18	Ⅰ・E－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒を多く混入	黒褐～赤褐色	良好	
19	Ⅰ・E－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	石英粒混	黒褐色	良	内面は剥離している
20	Ⅰ・A－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	石英粒混	黒褐色	良	条痕の地文なし
21	Ⅰ・E－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒	石英粒混	暗赤褐色	良好	条痕は縦位に施文される
22	Ⅰ・A－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒	大きめの石英粒を混入	明赤褐色	普通	条痕は縦位に施文される
23	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文		微細石英混	灰褐～白灰色	不良	
24	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	赤褐～黒褐色	良	
25	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	黒褐色	良好	
26	Ⅰ・D－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	黒褐～茶褐色	普通	
27	Ⅰ・D－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	微細石英混	茶褐～黒褐色	不良	
28	Ⅰ・D－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒褐～黒色	良好	
29	Ⅰ・C－3	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細な石英粒を混入し精良な粘土	褐～赤褐色	良好	
30	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文を押し引き風に施文		石英粒混	黒色	普通	内面は剥離している
31	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒褐色	良好	
32	Ⅰ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒褐色	普通	
33	Ⅰ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	石英粒混	黒褐色	普通	
34	Ⅰ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	赤褐～黄褐色	良	幅のやや広い大きめのクサビ形貼り付け文
35	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	微細石英混	白黄～褐色	良好	

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第20図36	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		微細石英混	黒褐～褐色	良好	
37	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文		微細石英混	暗褐色	普通	条痕の地文なし
38	Ⅰ・C－4	胴部	貝殻腹縁刺突線文		石英粒混	黒褐色	普通	条痕の地文なし
39	Ⅰ・B－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文を押し引き風に施文	角筒	雲母・石英粒混	明褐色	良好	
40	Ⅰ・B－5	胴部	貝殻腹縁刺突文・条痕文		雲母・石英粒混	暗褐色	良	貝殻刺突文は若干方形状に表現
41	Ⅰ・C－5	胴部	貝殻腹縁刺突文・条痕文	角筒	石英粒混	黒褐色	普通	同一個体
42	Ⅰ・C－5	胴部						
43	Ⅰ・C－5	胴部						
44	Ⅰ・B－4	底部	刻目文	角筒	微細石英混	灰褐色	良好	
第21図 1	Ⅱ・C－5	口縁部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒	石英粒混	暗赤褐色	良好	口唇部刻目
2	Ⅱ・B－3, 4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	灰褐色	普通	
3	Ⅱ・C－6	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	赤褐～黄褐色	良好	
4	Ⅱ・C－8	口縁部	貝殻連続刺突文・条痕文	角筒	石英の混入は少なく精良な粘土	黒褐～暗赤褐色	普通	Ⅴ類土器・同一個体
5	Ⅱ・C－8	胴部						
6	Ⅳ・D－10	口縁部	貝殻腹縁刺突線文 クサビ形貼り付け文		微細な雲母・石英を混入	暗黒褐色	良好	条痕の地文なし
7	Ⅳ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	黒褐～黄褐色	普通	条痕の地文なし
8	Ⅳ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文 クサビ形貼り付け文		石英粒混	暗赤褐色	良好	
9	Ⅳ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒（推定径15.2cm）	微細石英混	黒褐色	良好	内面は剥離が進んでいる
10	Ⅳ・C－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒	石英粒を多く混入	黒褐色	普通	9と同一個体（？）
11	Ⅳ・C, D－3, 4	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	微細石英混	黒褐～暗褐色	良好	
12	Ⅳ・D－5	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	角筒	微細石英混	黒褐～褐色	普通	
13	Ⅳ・D－13	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文	円筒	石英粒混	赤褐色	普通	
14	Ⅳ・D－10	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	赤褐色	普通	
15	Ⅳ・D－10	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	暗赤褐色	普通	
16	Ⅳ・D－7	胴部	貝殻腹縁刺突線文	円筒	石英粒混	暗灰褐色	普通	条痕の地文なし
17	Ⅳ・C, D－3, 4	胴部	貝殻腹縁刺突線文		石英粒混	黒褐色	良	
18	Ⅳ・D－10	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒を多く混入	黒褐色	良	
19	Ⅳ・D－8	胴部	貝殻腹縁刺突線文・条痕文		石英粒混	黒褐色	普通	
20	Ⅳ・D－8	胴部	貝殻押し引き文・条痕文		雲母・石英粒混入	茶褐色	良好	



第２０図　第Ⅰ地区出土Ⅳ類土器実測図・拓影

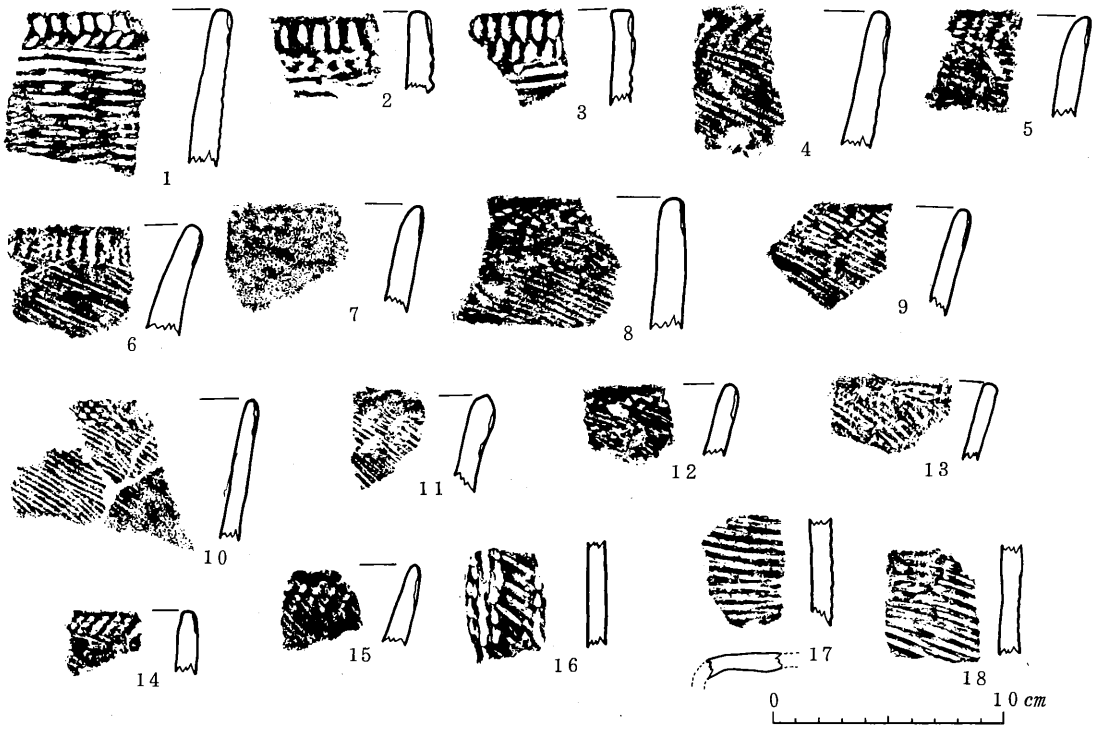


第Ⅱ地区１～５，第Ⅳ地区６～２０

第２１図　第Ⅱ・第Ⅳ地区出土Ⅳ類Ⅴ類土器実測図・拓影

Ⅵ　類（第２３図，図版１２）

山形・楕円・格子目の３タイプの押型文が出土している。わずかに第Ⅳ地区に１点みとめられた他はすべて第Ⅰ地区からの出土である。口縁部はおおよそ直口をなすものであるが，２では外へ開きぎみとなっている。胴部片では９・１５・２０・２１など器壁の厚いものと７・１１・１６・１７・２６などのように薄いものとがある。底部片は１点のみで，山形押型文を施文し平底のタイプである。文様では，２の口縁部が両面に山形押型文を施文し，内側の口縁端部に押型原体を押し引いた時に得られるとされる平行短線を施している。山形押型文では，文様の比較的しっかりしたものは１・２・１５などで，７・１２・１３・１６・１９では山形が鋭角になり，逆に１・９ではそれが鈍角なものとなっている。楕円押型文では，２２・２６・２７のように精緻なものと，２３・２４・２８のようにやや粗大になるものとがみられる。又，４・１２・２３・２５～２７・３１の胎土には石英・長石等の砂粒の他に雲母が混入されている。焼成は全般的に比較的良く，２１・２２などの器面内側はヘラ状の工具で研磨され丁寧な作りが認められる。



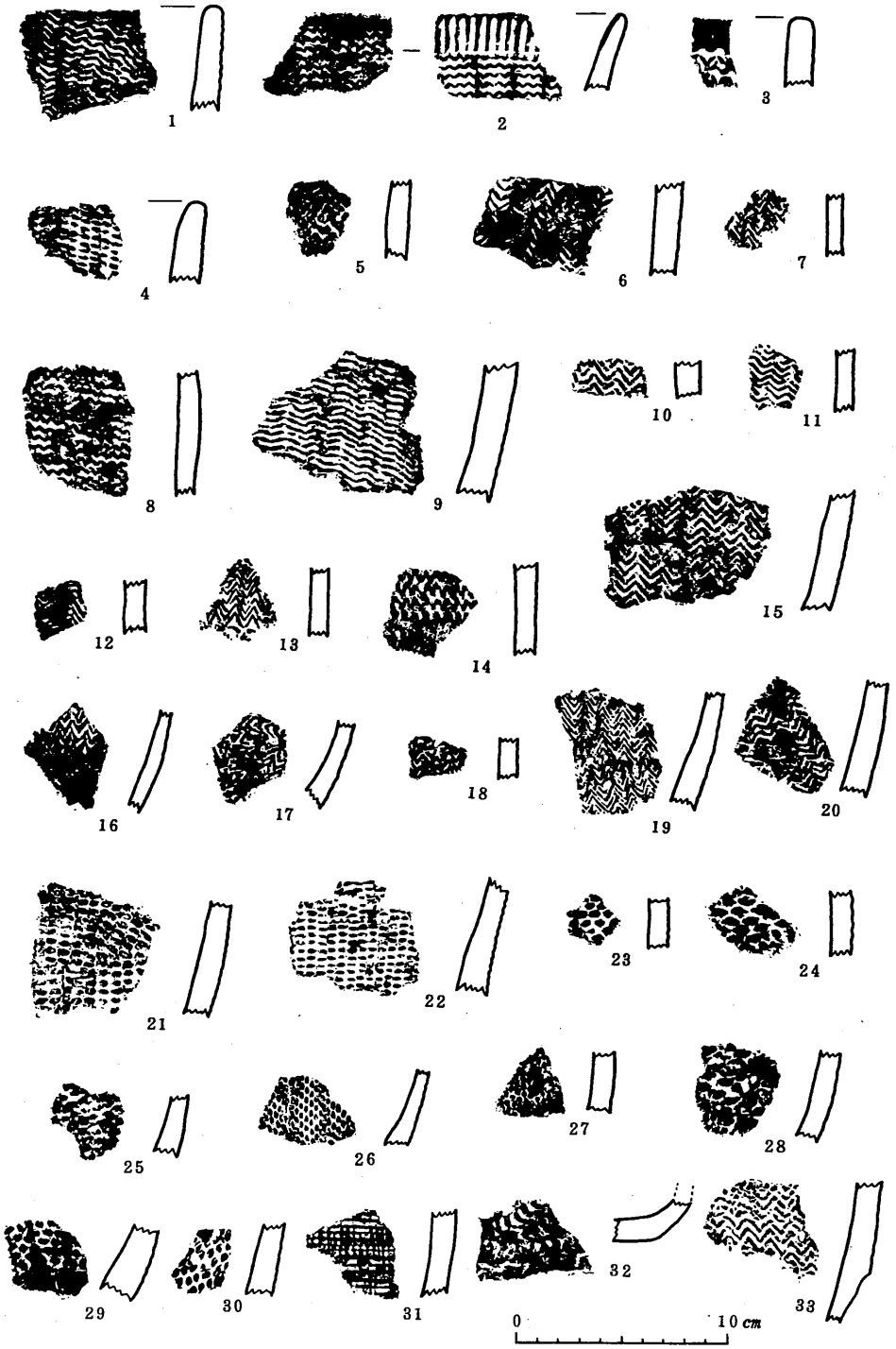
第２２図　Ｖ類土器実測図・拓影

第５表　Ｖ類土器一覧表

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第22図 1	Ⅱ・C－3	口縁部	ヘラ描き凹凸文・条痕文	口縁直口・円筒	石英粒多量に混入	暗褐色	普通	
2	Ⅳ・C,D－3,4	口縁部	ヘラ描き凹凸文・沈線文	口縁直口・円筒	石英粒多量に混入	黒褐色	普通	
3	Ⅱ・C－5	口縁部	ヘラ描き凹凸文・沈線文	口縁直口・円筒	石英粒多量に混入	灰褐～赤褐色	良	
4	Ⅳ・D－8	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	石英粒多量に混入	白灰色	普通	
5	Ⅳ・D－10	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	石英粒多量に混入	淡黄・褐色	普通	
6	Ⅳ・C－7	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁わずかに外湾	石英粒混	黄褐～灰褐色	普通	
7	Ⅳ・D－3	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	微細石英混	黒褐～黄褐色	良好	
8	Ⅳ・C－7	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	石英粒多量に混入	黒褐色	良	
9	Ⅳ・D－1	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	石英粒混	茶褐色	良好	
10	Ⅳ・D－5	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁直口	石英粒多量に混入	黒灰～黄褐色	普通	
11	Ⅱ・C－8	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	口縁部わずかに肥厚	石英粒混	黄褐色	良好	
12	Ⅱ・B－3	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文		石英粒多量に混入	黒褐色	普通	
13	Ⅳ・C,D－3,4	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文	小型の円筒土器	微細石英混	黄褐色	普通	
14	Ⅳ・D－10	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文		石英粒混	赤褐色	良好	
15	Ⅱ・C－2	口縁部	貝殻腹縁連続刺突文・条痕文		石英粒多量に混入	灰黒色	普通	
16	Ⅱ・B－4	胴部	貝殻腹縁刺突文・条痕文	角筒土器	石英粒混	赤褐色	良好	
17	Ⅰ・B－4	胴部	条痕文	角筒土器	石英粒混	赤褐色	普通	同一個体
18	Ⅰ・B－4	胴部						

第6表　Ⅵ類土器一覧表

挿図番号	出土地区	器部	施文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
第23図 1	Ⅰ・C－ 9	口縁部	山形押型文	口縁直口	微細石英混	黒褐～茶褐色	良好	
2	Ⅰ・E－ 4	口縁部	山形押型文を表裏両面に施し口縁内側に原体押し引き	やや外反	石英粒混	黒褐色	良好	
3	Ⅰ・C－ 5	口縁部	山形押型文・口唇部にかけては施文なし	口縁直口	石英粒混	暗黒～黄褐色	不良	
4	Ⅰ・C－ 3	口縁部	楕円押型文	口縁直口	雲母・石英粒混	灰褐色	良好	
5	Ⅰ・C－ 9	胴部	山形押型文		石英粒混	黒褐色	普通	文様は崩れている
6	Ⅰ・E－ 4	胴部	山形押型文		石英粒混	灰黒色	良好	
7	Ⅰ・B－ 4	胴部	山形押型文		石英粒混	黒褐色	普通	
8	Ⅰ・E－ 4	胴部	山形押型文	胴部はややふくらみをもつ	石英粒混	赤褐～黒褐色	良好	細かい山形文
9	Ⅰ・C－11	胴部	山形押型文	器壁は厚く，ややふくらみをもつ	石英粒を多く混入	黄褐～灰褐色	良好	文様はややルーズである
10	Ⅰ・B－ 5	胴部	山形押型文		石英粒混	白黄～白灰色	普通	
11	Ⅰ・C－ 7	胴部	山形押型文		石英粒混	暗赤褐～灰褐色	普通	
12	Ⅰ・A－ 6	胴部	山形押型文		雲母・石英粒を多く混入	褐色	良好	内面に指頭痕あり
13	Ⅰ・B－ 4	胴部	山形押型文		石英粒混	黒褐色	普通	
14	Ⅰ・C－ 4	胴部	山形押型文		石英粒を多く混入	黒褐～白黄色	普通	大きな粒の石英も混入する
15	Ⅰ・C－ 5	胴部～底部	山形押型文	底部にかけて器壁はやや肥厚	石英粒混	灰褐～白灰褐色	普通	大きな粒の石英も混入する
16	Ⅰ・E－ 6	胴部～底部	山形押型文	底部にかけて器壁はやや薄くなる	石英粒を含み精良な粘土	暗褐～赤褐色	良好	
17	Ⅰ・C－ 4	胴部～底部	斜位山形押型文		石英粒混	暗赤褐～黒色	普通	
18	Ⅰ・C－ 4	胴部	山形押型文		石英粒混	茶褐色	良好	
19	Ⅰ・B－ 4	胴部～底部	山形押型文	底部にかけて器壁はやや肥厚	石英粒混	赤褐～黒褐色	良好	内面は縦位に研磨されている
20	Ⅰ・C－ 3	胴部～底部	山形押型文		石英粒を多く混入	黄褐～褐色	普通	
21	Ⅰ・B－ 4	胴部～底部	楕円押型文		石英粒混	褐色	良好	内面はヘラ状工具により研磨
22	Ⅰ・C－ 3	胴部～底部	楕円押型文		雲母・石英粒混	黒褐～白黄色	良好	内面はヘラ状工具により研磨
23	Ⅰ・B－ 4	胴部	楕円押型文		雲母・石英粒混	黒褐～黒色	普通	
24	Ⅰ・D－ 5	胴部	楕円押型文		石英粒混	淡黄褐～灰褐色	良好	
25	Ⅰ・D－ 5	胴部～底部	楕円押型文	底部にかけて器壁はやや肥厚	雲母・石英粒混	灰褐～灰黒色	普通	
26	Ⅰ・E－ 6	胴部～底部	精緻な楕円押型文	底部にかけて器壁は大きく肥厚	雲母・石英粒混	灰褐色	良好	内面は横位の擦痕で調整
27	Ⅰ・C－ 5	胴部	比較的細かい楕円押型文		雲母・石英粒混	淡赤褐～灰褐色	良好	
28	Ⅰ・C－ 9	胴部	楕円押型文		微細石英混	赤褐～黒褐色	普通	
29	Ⅰ・C－11	胴部～底部	楕円押型文		石英粒混	灰褐色	良好	
30	Ⅰ・E－ 4	胴部～底部	斜位楕円押型文		石英粒を含み精良な粘土	赤褐～黒褐色	普通	
31	Ⅰ・C－11	胴部	格子目押型文		雲母・石英粒を多く混入	暗灰褐色	普通	
32	Ⅰ・D－ 5	底部	斜位山形押型文		石英粒混	黄褐～黒灰色	普通	
33	Ⅳ・C,D－3,4	胴部	山形押型文	（推定径 8 cm）	石英粒混	黄褐～茶褐色	良好	土器片表面の半分は剝離している



第Ⅰ地区１～３２，第Ⅳ地区３３

第２３図　第Ⅰ・第Ⅳ地区出土Ⅵ類（押型文）土器実測図・拓影

その他の土器（第２４図，図版１３）

以下，点数は１～２点であるが特徴的な土器について列記することにする。

１は第Ⅱ地区Ｂ－４出土で，Ⅳ層（暗褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を少量混入し，比較的精良な粘土を用いている。色調は暗褐～黒褐色で，焼成は良好である。口唇部には微細な刻目突帯をもち，胴部にまでほとんどふくらみをもたず直線的で，深鉢形をなすと考えられる。文様は貝殻条痕文を連続山形状に配し，Ⅲ類土器との文様の近似が認められる。器壁は比較的薄く，内面は粗い擦痕で調整されている。又，ススを付着している。

２は第Ⅱ地区Ｃ－８出土で，Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を含み，色調は黒褐色を呈し，焼成は良好である。山形口縁をなし，内外の口縁端部・口唇部に細かい刻目を施しており，微細な刻目突帯は口縁下位にも施され，地文はＲＬの単節斜縄文である。又，土器片下部の文様は撚糸文と思われ複雑な文様構成をもっている。器面内側はヨコナデ調整で，内面には炭化物あるいはススの付着を認める。

以上１・２は「轟式」の系統の土器ともみられるが，ことに２はその文様要素からいって，いわゆる瀬戸内地方の前期土器の影響を受けたとされる土器に類似性が強い。

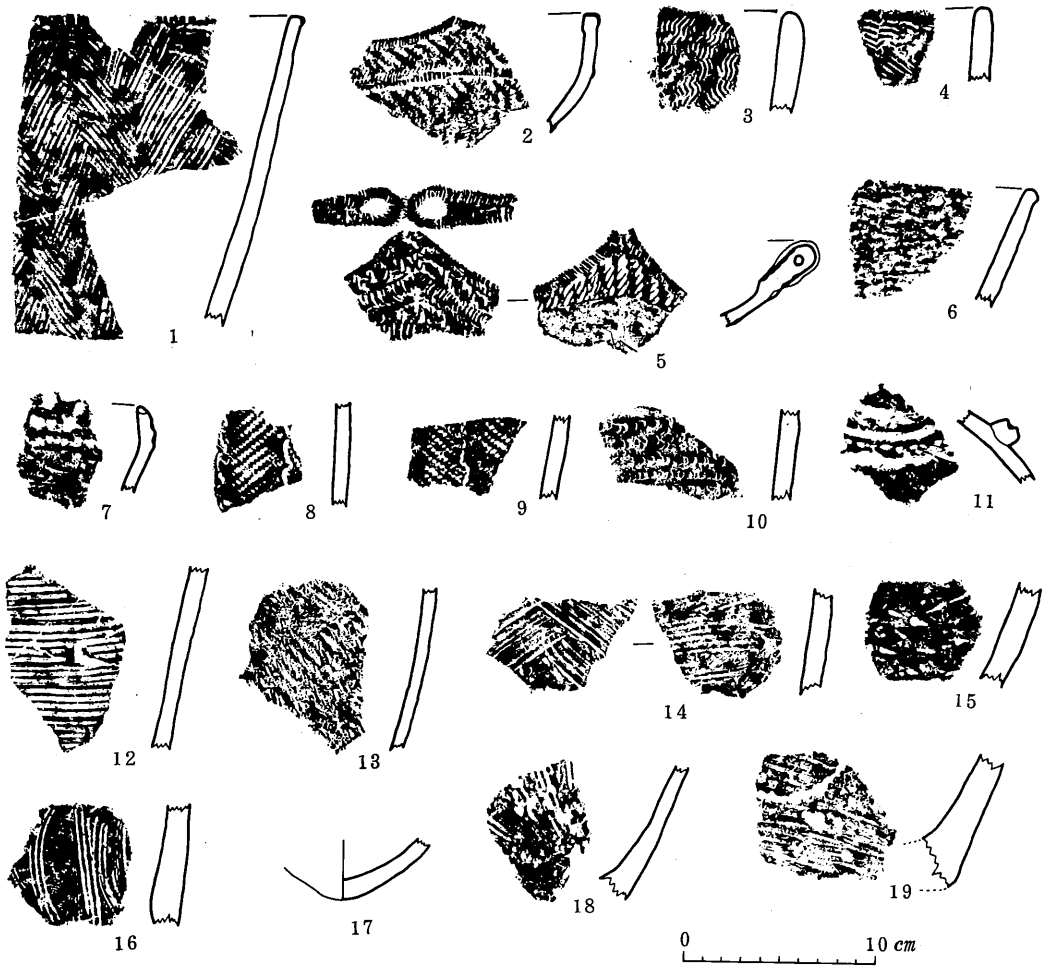
３・４は前者が第Ⅰ地区Ｂ－４，後者が第Ⅳ地区Ｄ－７の出土で，前者はⅣ層（暗褐色土層），後者は第Ⅳ地区Ⅳ層（黒色土層）に包含されていた。共に貝殻条痕と思われる文様を波状に施文したもので，鹿児島県下にも類例が求められるが，まだ型式化はされていない。３は，胎土に石英・長石等を多量に混入し，色調は赤褐～黒褐色を呈し，焼成は良好である。若干の山形口縁をなすとみられ，器面内側はヘラ状の工具によって撫で付けられている。４も，胎土に石英・長石等を多量に混入し，色調は黒褐～黄褐色を呈し，焼成は普通である。

５は第Ⅱ地区Ｂ－５出土で，攪乱層からの出土である。胎土に混入される石英砂は少量で比較的精良な粘土を用いている。色調は黄褐～茶褐色を呈し，焼成はきわめて良好である。山形に外反した口縁をなし，口唇部には細かい刻目がまんべんなく施され，装飾孔をもっている。貝殻およびヘラ状工具によると思われる短かく引っ掻いたような斜短線を地文とし，幅広の刻目突帯がその上に貼り付けられている。キャリパー状に近い器形をなすものと考えられ，中期土器の系統が考えられる土器で，２の土器と共に県内での類例が待たれる。

６は第Ⅴ地区Ａ－１出土で，黒褐色土層に包含されていた。口唇部に刻目突帯が施されているが，風化が著しくその詳細の確認は困難である。胎土には，やや大粒の黒曜石片が混入していた他石英・長石等を多量に混入している。色調は暗黒褐～黒色で，焼成はさほど良い方ではない。器面には粗い条痕文を施文し，内面は口縁端部がヨコナデ調整されている。

７は第Ⅰ地区Ｄ－５出土で，Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土は砂質の強いもので，焼成は良好である。口唇部には粗大なヘラ状の工具を押し付けたと思われる刻目が施され，その下にも粗い凹凸文が二条施文されている。口縁は内湾し，塞ノ神式にみる二重口縁風の口縁を思わせるが，ここでは別に扱い保留しておいた。

８・９は共に第Ⅱ地区Ｃ－５出土で，Ⅳ層（褐色土層）に包含されていた。８の破片において，縦位のＲＬ単節斜縄文の他，結節の回転痕の反対側にＬＲ単節斜縄文がみられることから，ＬＲ単節斜縄文



第２４図　その他の出土土器実測図・拓影

の施文された７とは同一個体とみられる。共に，胎土には少量の石英・長石等の砂粒を含み精良な粘土が用いられており，色調は茶褐色を呈し，焼成は良好である。

１０は第Ⅰ地区Ｄ－５出土で，Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には雲母・石英・長石等を混入し，色調は灰黒色を呈し，焼成は普通である。貝殻腹縁による刺突文を半截竹管様に表現したもので，鹿児島県下に類例が知られる。

１１は第Ⅰ地区Ｃ－９出土で，Ⅳ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等を混入し，色調は外面が赤褐色，内面は黒褐色で，焼成は良好である。粗大な貼り付け突帯をもち，突帯上には刺突文を施している。

１２は第Ⅱ地区Ｃ－７出土で，Ⅳ層（暗褐色土層に包含されていた。胎土への石英・長石等の混入は少量で，色調は黒褐～黒色を呈し，焼成は良好である。精緻な貝殻条痕文を施文し，文様の施し方は先の１の土器に類似している。

１３は第Ⅱ地区Ｂ－３，４の出土で，出土層が判然とせず一括土器としてとり上げたものである。胎土には石英・長石等を混入し，色調は暗茶褐～黒灰色を呈し，焼成は良いとはいえない。貝殻腹縁により粗く削り器面を調整したものであろうか。

１４は第Ⅳ地区Ｃ，Ｄ－３，４出土で，第Ⅳ地区Ⅲ層（黒色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等を混入し，色調は暗赤褐色で，焼成は良好である。器面には貝殻条痕文を交互に斜位に施文し，内面には横位ないしは斜位の粗い条痕文を施文している。

前期貝殻条痕文のバラエティーは最近の資料の蓄積の中で，かなり捉えられるに至っているが，この土器も鹿児島県下に類例が求められる。

１５は第Ⅰ地区Ｃ－９出土で，Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を多く混入し，色調は茶褐～赤褐色を呈し，焼成は普通である。器面には粗雑にヘラ状の工具と思われるもので，はね上げた短線を不揃いに施文している。この文様はⅡ類土器ヘラ描き綾杉文と関連があるとみられ，鹿児島県下の類例では，その幾つかのバラエティーを指摘出来るようである。

１６は１４と同じく第Ⅰ地区Ｃ－９出土で，Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には微細な石英・長石等の砂粒を混入し，色調は黒灰～灰褐色を呈し，焼成は普通である。器面にはススを付着している。文様はヘラ状あるいは櫛状の施文具を使用しているとみられる。底部に近い破片で下部がやや肥厚化している。

１７は第Ⅱ地区Ｃ－４出土で，Ⅳ層（暗褐色土層）に包含されていた。丸底に近い尖底で，胎土に混入される石英・長石等は少量で，色調は褐～黒色を呈し，焼成は普通である。器面には文様はみられず，内面の底にかけてヘラ状の工具で調整を施している。

１８は第Ⅳ地区Ｄ－５出土で，第Ⅳ地区Ⅲ層（黒色土層）に包含されていた。胎土には比較的多く石英・長石等を混入し，色調は表面が赤褐～黒褐色，内面が褐色を呈し，焼成は普通である。器面には貝殻条痕文を施文し，底部に近い破片で，底部にかけて器壁は肥厚化している。

１９は第Ⅰ地区Ｃ－３出土で，出土層が判然とせず一括してとり上げたものである。胎土には石英・長石等を混入し，色調は黄褐色を呈し，焼成は普通である。推定径は破片の下部で１８*cm*と比較的大きな平底の底部へと続くものと思われる。器面には条痕文を施している。

「第Ⅴ章　まとめ」において触れる鹿児島県桑ノ丸遺跡・下剝峯遺跡・村原（栫ノ原）遺跡など近年の比較的良好な縄文前期遺跡からの出土土器に以上の土器の類例は何らかの形で求めることが出来る。なお，宮崎県下においては今後の蓄積と類例化に待たなければならないが，こうした鹿児島県下の類例を基にこれらの土器の位置付けを考えていく必要を感ずる。

(2) 石　器

石器では，石鏃のほか，敲石・磨石・凹石・石斧・剝片石器などが出土しており，又先土器時代の遺物と思われる尖頭器が出土している。

石鏃（第２５図・図版１４）

石鏃は未成品と思われるものも含めて３３点が出土しているが，その内２１点の出土が第Ⅱ地区に集中している。

２４・２５・２６は未成品と思われるが，２４は石鏃とみれば凸基式に入るが，ここでは異形の石器としてみなしておきたいと思う。石鏃の形式には平基式（５・９・２０・２３・３２）と凹基式（１・３・４・８・１０・１１・１３～１７・１９・２１・２２・２７～３１・３３）があり，凹基式が主体を占めている。６・１２・１８などは，基部へのノッチが浅いが，調整加工の施し方からみて凹基式に含められようと思う。又，それぞれの形状に応じて二等辺三角形状（６・８・９・１１～１９・２１・２７・３０・３１・３３），正三角形状（１・４・５・２０・２８・３２），五角形状（３・１０），ハート形状（２９）などに分類することが出来る。

石質は黒曜石が主で，他にチャート（３・１０・２９・３０），頁岩（５）などがある。又，黒曜石には気泡が多く白濁したもの（１・１３・３１・３３）と透明度の強いもの（６・８・１１・１７・３２）などがあり，少なくとも二種類の原産地の異なる黒曜石が使用に供されたことが想定出来る。

剝離・調整の特徴としては，３・３２が薄く剝離された剝片の反りをもつ形状を比較的残しており，３では基部のノッチと片側の刃部に調整加工がみられるが，一方の刃部は剝片の鋭利な部分をそのまま刃部として残している。一方３２では，三辺に細かな両面からの調整加工が施されており，基部にあたる一辺はわずかに内湾している。他は４・１３・１５などが原剝離面を比較的多く残し，刃部に微細剝離加工が施されているが，おおくのものは精緻な調整加工が施されている。

欠損部分は，先端部分を欠損するものが９・１６・２１・２２で，脚部を欠損するものが２・７・１１・１３・１５で，８は片側部にわずかな欠損がみられる。

これらの石鏃はいずれも縄文前期の遺物と考えられるが，５地区の内出土土器が相対的に少なかった第Ⅱ地区にその出土が集中しているという現象は注目される。同地区からはまた黒曜石の剝片等が多く出土している。<場>の想定をうんぬんするには資料が限られているが，石鏃の使用，あるいはその製作に関する<場>を想定することも可能かと思われる。

石斧（第２６図１・２・３・４，図版１５）

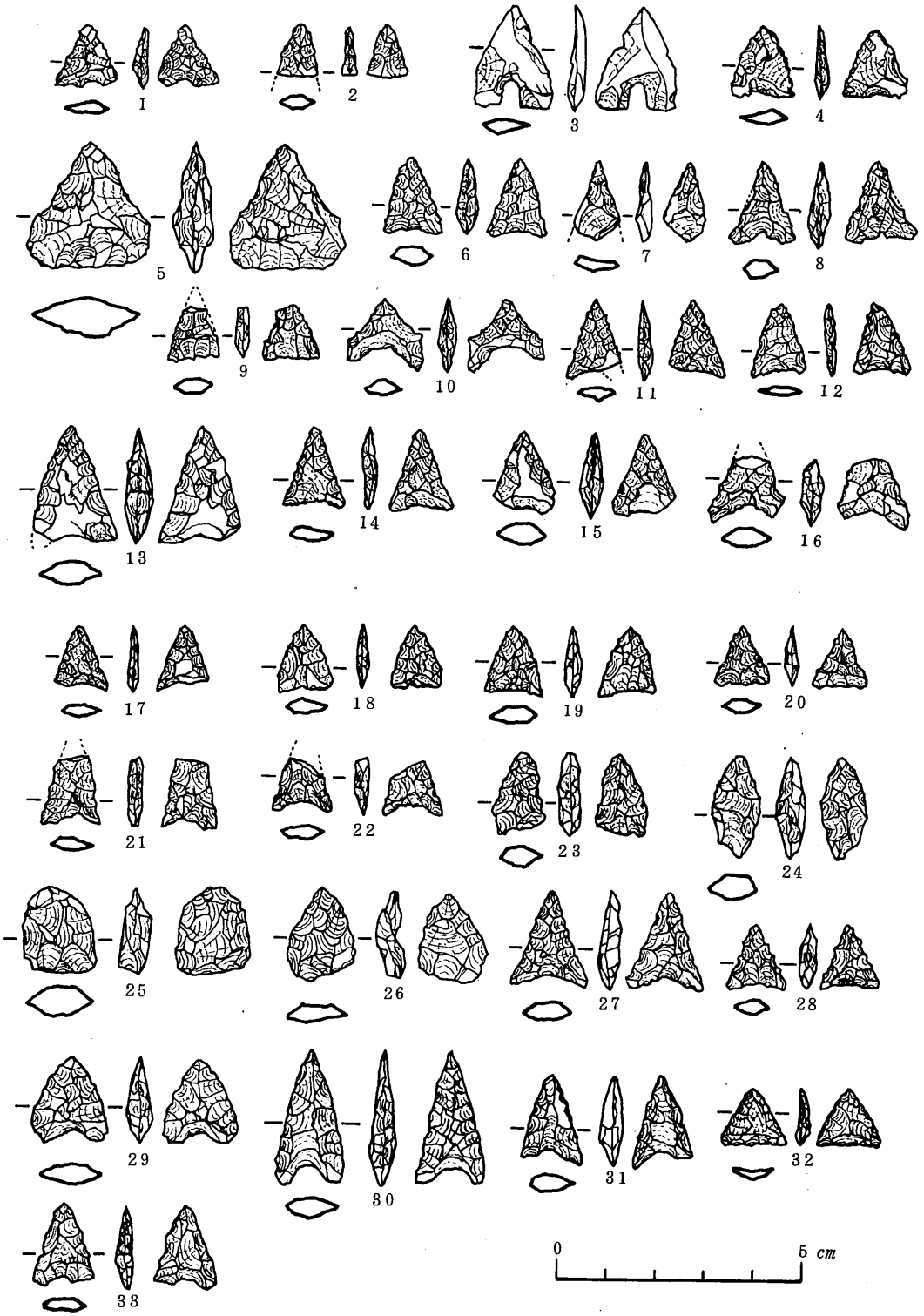
石斧では，磨製・打製の二種類が４点出土している。

１は砂岩製の磨製石斧で，第Ⅰ地区Ｃ－４の出土である。表面は風化が著しく，やや剝離がみえているために使用痕の確認は困難であるが，片側部の中途にわずかであるが凹みが生じているのが観察される。それが片側部にのみみられることで着柄による結索痕か手ずれとも断定しかねるが，製作時における凹みとも思われない。全長 7.6 *cm*，最大幅 4.4 *cm*，厚さ 1.4 *cm*である。

２はチャート製の磨製石斧で，第Ⅱ地区Ｃ－２の出土である。剝片を使用したもので，側面よりみる

第 7 表　石鏃一覧表（単位 cm）

第25図番号	出土地区	全長	最大幅	厚さ	石質	形式	備考
1	Ⅰ・C－7	1.2	1.2	0.4	黒曜石	凹基式	
2	Ⅰ・C－7	(1.1)	(0.8)	0.3	〃	－	脚部欠損
3	Ⅰ・B－4	2.1	1.6	0.3	チャート	凹基五角形	
4	Ⅰ・C－5	1.5	1.2	0.2	黒曜石	凹基式	
5	Ⅰ・D－5	2.6	2.3	0.9	頁岩	正三角形	
6	Ⅱ・C－5	1.6	1.2	0.4	黒曜石	凹基式	
7	Ⅱ・C－5	(1.6)	(0.9)	0.3	〃	－	脚部欠損
8	Ⅱ・C－1	1.7	1.3	0.4	〃	凹基式	
9	Ⅱ・A－5	(1.1)	1.1	0.3	〃	（平基二等式）	先端欠損
10	Ⅱ・C－1	1.4	1.6	0.3	チャート	凹基五角形	
11	Ⅱ・C－1	1.6	(1.1)	0.3	黒曜石	凹基式	一部欠損
12	Ⅱ・B－3．4	1.5	1.1	0.2	〃	〃	
13	Ⅱ・C－7	2.3	(1.7)	0.5	〃	〃	一部欠損
14	Ⅱ・B－3	1.7	1.3	0.3	〃	〃	
15	Ⅱ・C－3	1.6	(1.3)	0.4	〃	〃	
16	Ⅱ・C－7	(1.4)	1.5	0.5	〃	〃	先端欠損
17	Ⅱ・B－6	1.3	(1.0)	0.2	〃	〃	
18	Ⅱ・C－7	1.3	1.1	0.3	〃	平基式	
19	Ⅱ・B－3．4	1.4	1.2	0.4	〃	〃	
20	Ⅱ・B－4	1.2	1.2	0.2	〃	〃	
21	Ⅱ・B－3	(1.4)	1.2	0.3	〃	凹基式	先端欠損
22	Ⅱ・B－5	(1.1)	1.2	0.3	〃	〃	〃
23	Ⅱ・B－3	1.7	1.1	0.5	〃	平基式	
24	Ⅱ・C－6	2.1	1.0	0.6	珪石	－	未成品
25	Ⅱ・B－4	1.7	1.5	〃	黒曜石	－	〃
26	Ⅱ・C－6	1.9	1.4	0.5	〃	－	〃
27	Ⅲ・A－2	2.0	1.6	0.4	〃	凹基式	
28	Ⅲ・A－3	1.3	1.2	0.3	〃	〃	
29	Ⅲ・A－2	1.7	1.5	0.5	チャート	ハート式	
30	Ⅳ・C．D－3．4	2.7	1.4	〃	〃	凹基長辺三等辺	
31	Ⅳ・D－7	1.9	1.2	〃	黒曜石	凹基式	
32	Ⅳ・B－6	1.3	1.0	0.2	〃	正三角形	
33	Ⅳ・C．D－3．4	(1.7)	1.2	0.4	〃	凹基式	



第２５図　石器実測図(1)　石鏃

と反りがみられる。磨研は一応全面にゆきわたっているが，割り出した石材そのものが不整形で，いわゆる局部磨製のものとみられる。使用痕は認められず，刃先には横位の，両面にはいくぶん斜位の磨研の際の微細な擦痕がみられる。全長8.0cm，最大幅3.9cm，厚さ1.1cmである。

3は砂岩製の磨製石斧で，第Ⅳ地区D－7の出土である。磨研は丁寧に両面に施されている。刃部先端部を中心に細かく磨耗がみられるほか，両側部に結索痕あるいは手ずれと思われる磨耗が観察される。全長8.4cm，最大幅4.5cm，厚さ1.9cmである。

4は砂岩製の打製石斧であるが，1と同様風化が著しい。原石からの剝片を使用し，片面には自然面を残しており，刃部および両側は粗く割り出されている。刃部先端部は著しく磨滅している。全長10.3cm，最大幅5.3cm，厚さ2.5cmである。

凹石（第26図5・6，図版15）

5は赤褐色を呈する砂岩製のもので，径8.6×9.1cm，凹み部分での厚さ4.2cmである。6も同じく赤褐色を呈する砂岩製のもので，径8.8×9.9cm，凹み部分での厚さ3.7cmである。6は両面に凹みをもつ。共に第Ⅱ地区C－6の出土である。

磨石（第26図7～9，図版15）

すべて青灰色を呈した石英斑岩製のもので，7・8が第Ⅳ地区C，D－3，4，9が第Ⅰ地区C－7の出土である。7は径9.6×9.9cm，厚さ5.6cm，8は径10.2×10.3cm，厚さ4.7cm，9は径9.8×10.5cm，厚さ6.8cmである。

敲石（第27図5，図版14）

いくぶん茶褐色をした石英斑岩製で，第Ⅰ地区C－4出土である。長径8.1cm，短径6.7cm，厚さ4.3cmで，両側が敲き潰されている。

石錘（第27図7，図版14）

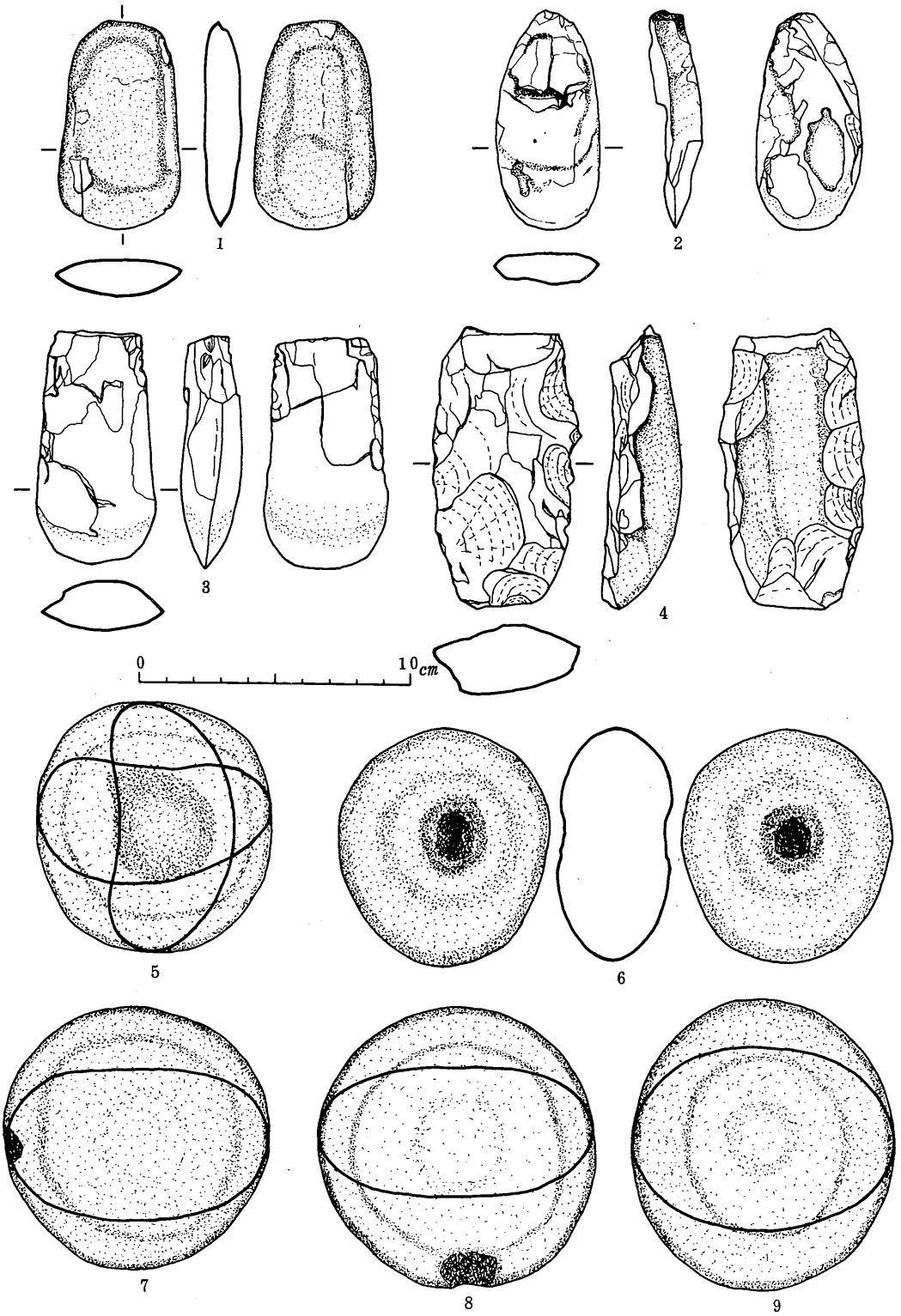
赤褐色を呈した砂岩製のもので，第Ⅱ地区C－1のピット上部の出土である。研磨して凹みをつけた磨製の石錘である。長径5.8cm，短径3.7cm，厚さ1.8cm，重さ44gである。

彫器（第27図1，図版14）

縦長の剝片を使用したチャート製で，第Ⅰ地区C－4の出土である。片面に第一次剝離面を残し，両側は剝離の鋭利な部分をそのまま残している。彫刻面は磨滅が著しいが，彫刻面加工と思われる微細な剝離を認めることが出来るため，彫器として取り扱っておく。全長3.2cm，最大幅2.2cm，厚さ1.0cmである。

ナイフ形石器（第27図3，図版14）

頁岩製で第Ⅰ地区C－4の出土である。断面は三角形を呈し，片側は剝片の鋭利さをそのまま利用し



第Ⅰ地区１・９，第Ⅱ地区２・５・６

第２６図　石器実測図(2)　石斧・凹石・磨石

たナイフ形石器とみられ，片側は刃潰し加工が行なわれている。全長5.5cm，最大幅3.0cm，厚さ1.4cmである。

剝片石器（第27図4，図版14）

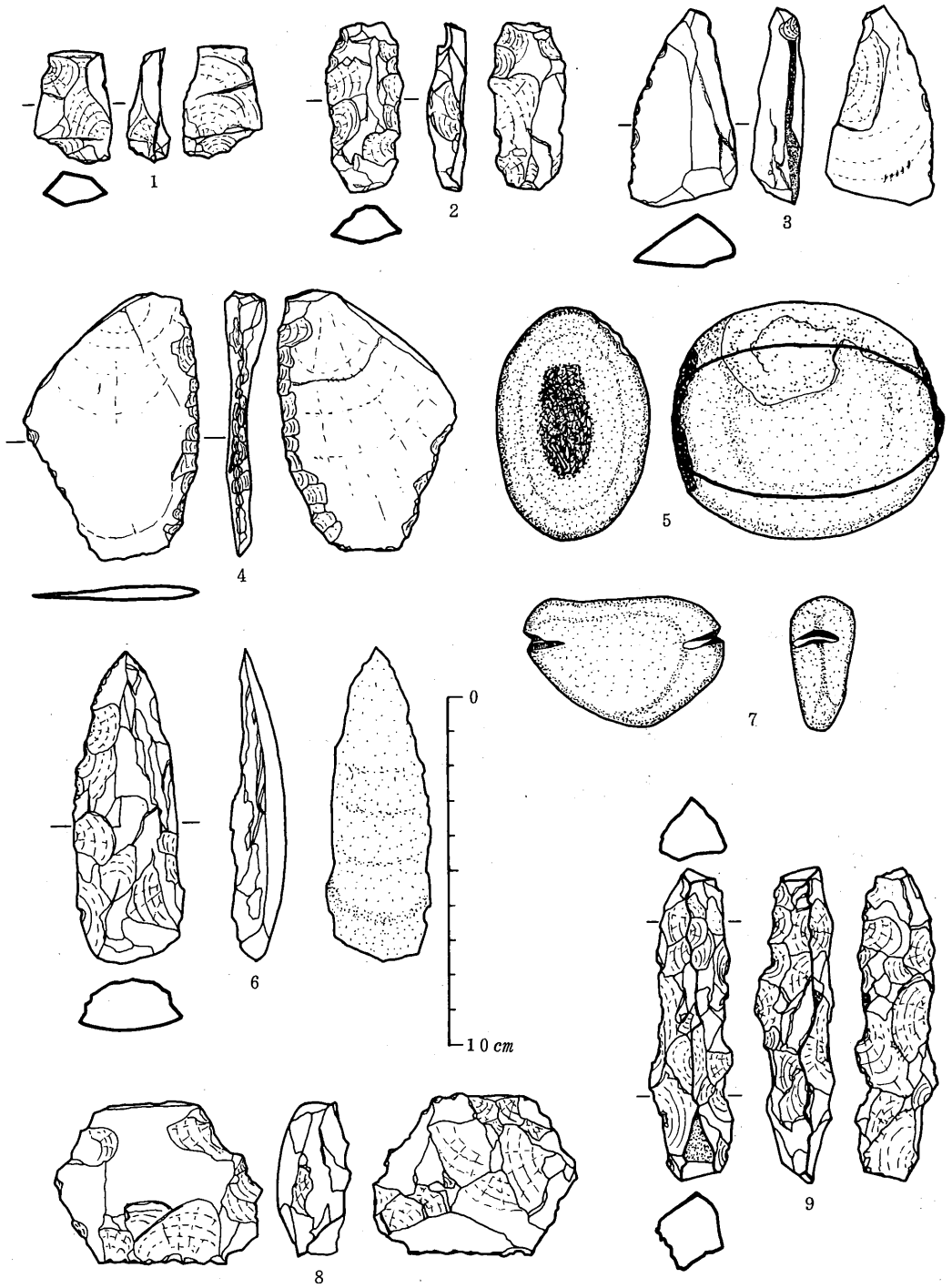
不均質な頁岩製で，第Ⅰ地区D－5の出土である。剝片から打ちかいた剝片を使用しており，両面に打瘤がみられる。両側に微細な剝離加工を施し刃部を作り出している。全長7.4cm，最大幅5.1cm，厚さ0.4cmの薄いものである。

石核石器（第27図8，図版14）

チャート製で，第Ⅴ地区G－1の出土である。剝離は粗いが刃部が作り出されており，ここでは一応石核石器としてとり上げておいた。長径5.9cm，短径4.6cm，厚さ2.1cmである。

尖頭器（第27図2・6・9，図版14）

2は頁岩製で第Ⅰ地区D－5の出土である。断面は三角形状を呈し，その三面に剝離加工がみられる。全長3.2cm，最大幅2.2cm，厚さ1.0cmである。6は砂岩製で第Ⅱ地区C－5の出土である。片面には自然面を残した反りをもつ剝片を使用している。片面剝離で，全長9.1cm，最大幅2.8cm，厚さ1.5cmである。9は頁岩製で第Ⅴ地区A－1の出土である。出土層は礫層上面にあたり，先土器時代の遺物と考えられる唯一のものである。断面は三角形状を呈し，いわゆる三稜尖頭器と呼ばれるものに相当する。剝離加工は三面にわたり粗く行われている。全長8.9cm，最大幅2.3cm，厚さは1.7～2.2cmである。



第Ⅰ地区 1～5，第Ⅱ地区 6・7，第Ⅴ地区 8・9

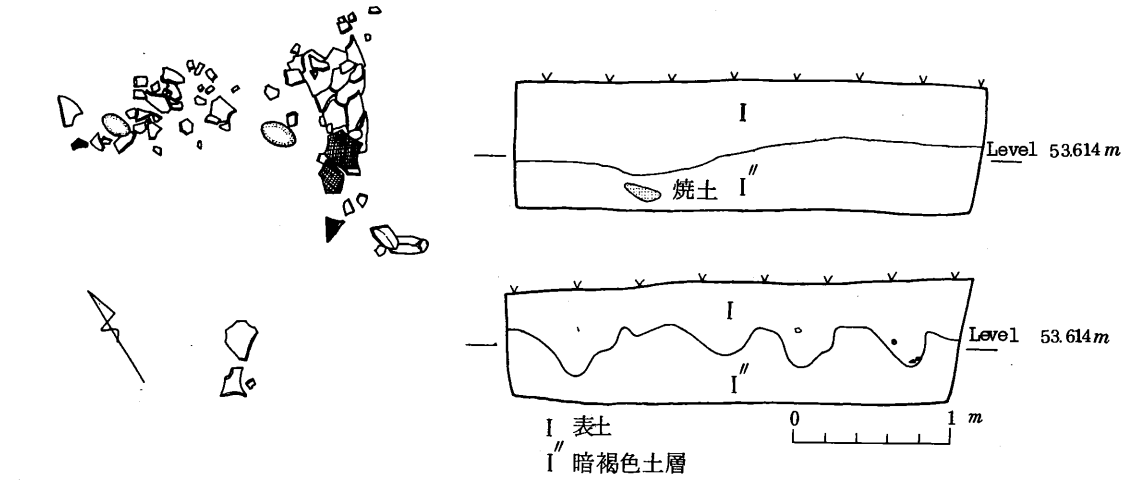
第２７図　石器実測図(3)　敲石・尖頭器・石錘など

第Ⅳ章　辻遺跡出土の土師器と須恵器について

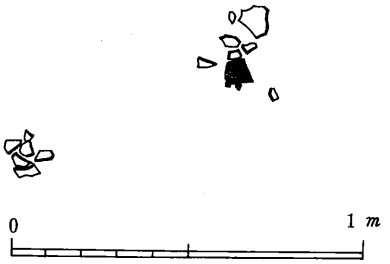
1　土師器と須恵器の出土状態

〈第Ⅰ地区〉

第Ⅰ地区ではC－7・9・11で出土しているが，特にC－7に集中している。C－7において，Ⅰ″層（暗褐色土層）の下部で1個体の土師器の甕がつぶれた状態で検出されたため，これと同レベルでの土器の出土状況を確認した（第28図）。出土した土器は，土師器の坏7（第30図5・6・17・18・20・29・30），高坏1（33），甕3（35・38・39），織布圧痕土器（第31図55～58），須恵器の甕2（第34図1・2）である。また土層断面図（第29図）で示されているように北壁のⅠ″層（暗褐色土層）に焼土が含まれている。そこで何らかの遺構として調査したが，遺構としては確認し得なかった。しかし，この土器は一括した資料である。C－9・11出土の土師器はⅠ層から出土している。



第29図　第Ⅰ地区C－7・北壁（上）・西壁（下）土層断面図



第28図　第Ⅰ地区C－7の土器の出土状態

〈第Ⅱ地区〉

第Ⅱ地区ではC－5～9，特にC－8・9のⅠ″層（暗褐色土層）から出土した。一括した土器の出土状態は確認し得なかったし，また遺構も検出されなかった。

〈第Ⅲ・Ⅳ地区〉

第Ⅲ・Ⅳ地区からは，土師器がⅠ層・Ⅲ層褐色土層上面から3点出土した。第Ⅴ地区からは全く出土しなかった。

2　土師器

東丘陵地の第Ⅰ・Ⅱ地区出土の土師器を総括して述べることにする。

坏　（第30図1～31，図版16の1～31）

坏は，底部の切り離し手法がヘラ切りであるA類と底部の切り離し手法が不明であるが平底であるB類に分かれる。A類は丸底に近いA－1類と，平底に近く底部の厚いA－2類に更に分かれる。B類は体部と底部の境が甘いB－1類と，体部と底部の境が明瞭で体部に横ナデを施しているB－2類に更に分かれる。

坏A－1類　（第30図1，図版16－1）

(1)は，口径12.6cm，底径7.6cm，器高4.2cmを測り，底部はヘラ切り離し後，部分的にナデを施す。器面には横ナデを，内底には指先によるナデを施す。体部はゆるやかに外反し，口唇部先端はやや丸味をおびる。色調は黄褐色を呈し，胎土は精選され，焼成は良好である。

坏A－2類　（第30図2～4，図版16－2～4）

(2)は，口径10.4cm，底径5.4cm，器高4.6cmを測り，底部はヘラ切り離し後，部分的にナデを施す。器面には横ナデを施し，内底は平坦にナデ調整する。体部は垂直気味に外反し，口唇部先端は丸味をおびる。底部と体部の境は明瞭で，底部の厚さは1cmと厚い。平底に近い。色調は赤褐色を呈し，胎土には少量の砂を含み，焼成は良好である。(3)は，底径6.4cmで，色調は赤褐色を呈する。胎土には少量の砂を含み，焼成は普通である。(4)は底部で，色調は赤褐色である。胎土には多量の砂を含み，焼成は普通である。(5)は，ヘラ切り離しの底部で，器壁が薄く平底である。赤褐色を呈し，少量の砂を含み，焼成は普通である。(5)はA－1類，A－2類にも属さない。

坏B－1類　（第30図6～11，図版16－6～11）

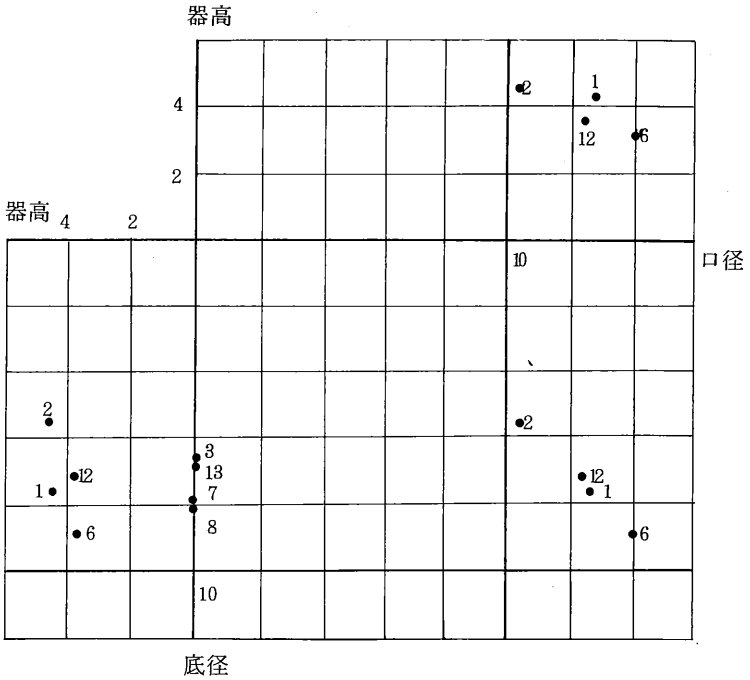
(6)は，口径14.0cm，底径8.8cm，器高3.7cmを測り，底部の切り離し手法は不明であるが平底である。器面にはナデを，内底には指先によるナデを施す。体部と底部の境は甘い。体部はゆるやかに外反し，口唇部で再度外反する。口唇部先端はやや尖り気味である。色調は赤褐色を呈し，胎土には多量の砂を含み，焼成は普通である。(7)は底径7.9cmの底部で，体部と底部の境は甘く，体部の内外面ともナデを施す。色調は黄褐色を呈し，胎土には多量の砂を含み，焼成は普通である。(8)は底径8.0cmの平底の底部で，底部と体部の境は甘く，体部の内外面ともナデを施す。(6)・(7)より器壁が厚い。体部に「＋」のヘラ記号を有する。色調は黄褐色を呈し，胎土には多量の砂を含み，焼成は普通である。(9)・(10)・(11)は底部片で，坏B－1類に属する。

坏B－2類　（第30図12～14，図版16－12～14）

(12)は，口径12.4cm，底径7.3cm，器高3.9cmを測り，底部の切り離し手法は不明であるが平底である。底部と体部の境は明瞭である。器面には横ナデを施し，内底は平坦にナデ調整している。体部は外反し，口唇部先端は尖り気味である。体部に「＋」のヘラ記号を有する。色調は赤褐色を呈し，胎土

には少量の砂を含み，焼成は普通である。(13)は底径６６*cm*で，底部の切り離しは不明であるが平底である。底部と体部の境は幾分甘い。器面には横ナデを施し，内底は平坦にナデ調整している。色調は赤褐色を呈し，胎土には多量の砂を含み，焼成は悪い。(14)は底部を欠いており，器面には横ナデを施す。色調は黄褐色を呈し，胎土には多量の砂を含み，焼成は普通である。

(15)～(28) は坏の口縁部である。（第３０図１５～２８，図版１６－１５～２８）(15)は外面は横ナデ，内面はナデを施し，口唇部は内外面とも強い横ナデを施し，口唇部先端は丸味をおびる。(16)は内外面ともナデを施し，器壁は薄く，口唇部先端はやや尖り気味である。(17)は内外面ともナデを施し，口唇部先端はやや尖り気味である。(18)は内外面ともナデを施し，器壁は薄く，口唇部先端は尖る。(19)は内外面ともナデを施し，口唇部の外面は強い横ナデを施し，口唇部先端は丸い。(20)は内外面ともナデを施し，器壁は薄く，口唇部先端はやや尖り気味である。(21)は内外面ともナデを施し，器壁は薄く，口唇部先端はやや尖り気味である。(22)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は尖る。(23)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は丸い。(24)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は丸い。(25)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は丸く，口唇部直下に強い横ナデを施す。(26)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は丸い。(27)は内外面ともナデを施し，口唇部先端は丸い。(28)は内面はナデを，外面は横ナデを施し，口唇部先端は丸い。(29)～(31) は底部の切り離し手法は不明であるが，平底である。しかし，Ａ－１類からＢ－２類には属さない。(29)は底部と体部の境はなく内外面ともナデを施す。(30)は (29) と同タイプであるが，底部が薄い。(31)は底部と体部の境に強い横ナデを施し，内外面ともナデを施す。底部は７*mm*と厚い。（図版１６－２９，図版１７－３０・３１）



第８表　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器（坏）の法量

番号	法量 (cm)			底部の切り離し	法量比	備考
	口径	底径	器高		(底径÷口径)	
1	12.6	7.6	4.2	ヘラ切り	0.60	A－1
2	10.4	5.4	4.6	ヘラ切り	0.52	A－2
3		6.4		ヘラ切り		A－2
6	14.0	8.8	3.7	不明 (平底)	0.63	B－1
7		7.9		不明 (平底)		B－1
8		8.0		不明 (平底)		B－1 (ヘラ記号)
12	12.4	7.3	3.9	不明 (平底)	0.59	B－2 (ヘラ記号)
13		6.6		不明 (平底)		B－2

第9表 第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器(坏)の計測表

椀 (第30図32, 図版17－32)

(32)は椀の口縁部で, 直立気味に外反している。口唇部先端は丸く, 内外面ともナデを施す。色調は黄褐色を呈し, 胎土には多量の砂を含み, 焼成は悪い。

高坏 (第30図33・34, 図版17－33・34)

(33)は高坏の脚部で, 外面はナデを施し, 上位には非常に浅い凹線がある。内面は横ナデを施し, 色調は黄褐色を呈する。胎土には多量の砂を含み, 焼成は普通である。(34)は高坏の坏部と脚部の接合部で, 風化が著しいために調整は不明である。色調は赤褐色を呈し, 胎土には多量の砂を含み, 焼成は普通である。

甕 (第30図35～48, 図版17－35～48)

(35)は, 口径26.4cmの長胴の甕で, 口唇部先端は平坦である。口縁部の内外面ともナデを施し, 肩部に斜め方向のハケ目を施す。色調は黄褐色を呈し, 胎土には多くの砂を含む。焼成は部分的に良好な所もあるが, 全体的にあまり良くない。(36)～(47)は, 甕の口縁部の破片で, 口径を復原できるものは1つもない。(36)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端は平坦に近い。(37)は内外面ともナデを施し, 器壁は薄く, 口唇部先端はやや丸い。(38)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端は厚くやや丸い。(39)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端は丸い。(40)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端は平坦である。(41)は器壁は厚く, 外面はヘラ磨きされ, その他の部位はナデを施し, 口唇部先端は凹状を呈する。(42)は内面はハケ目を, その他の部位はナデを施し, 口唇部先端は凹状を呈する。(43)は内面はハケ目を, その他の部位はナデを施し, 口唇部先端は平坦に近い。(44)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端は篦状の道具で平坦にされ, その際の粘土が残っている。(45)は内外面ともナデを施し, 口唇部先端はやや丸い。(46)～(48)は甕の底部である。(46)は底径5.4cmの上げ底の底部で, 内外面ともナデを施す。(47)は平底の底部で内外面ともナデを施す。(48)は底部の破片で, 内外面ともナデを施す。

黒色土器 (第30図49～52, 図版17－49～51)

黒色土器は, 炭素の吸着方法の違いで内面のみを燻すA類と内外面を燻すB類とに分かれる。[1] (49)～(51)はA類に, (52)はB類に属する。(49)は椀の口縁部で内面は黒色で研磨され, 外面は赤褐色でナデを施す。胎土は精選され, 焼成は良好である。(50)は椀の口縁部で, 口縁は直立気味に外反し, 口唇部先端は丸い。内面は黒色で研磨され, 外面は黄褐色でヘラ磨きを施す。胎土は精選され, 焼成は良好で

ある。(51)は椀の口縁部で，口唇部先端は平坦で，外面に強い横ナデを施す。内面は黒色で研磨され，外面は黄褐色でナデを施す。胎土は精選され，焼成は良好である。その他のA類の破片としては，第Ⅰ地区C－7で3点，第Ⅱ地区C－9で2点出土している。各々，(49)，(51)と同一個体のものである。(52)は内外面とも黒色で，内外面とも研磨されている。胎土は精選され，焼成は良好である。当遺跡ではB類は1点しか出土していない。

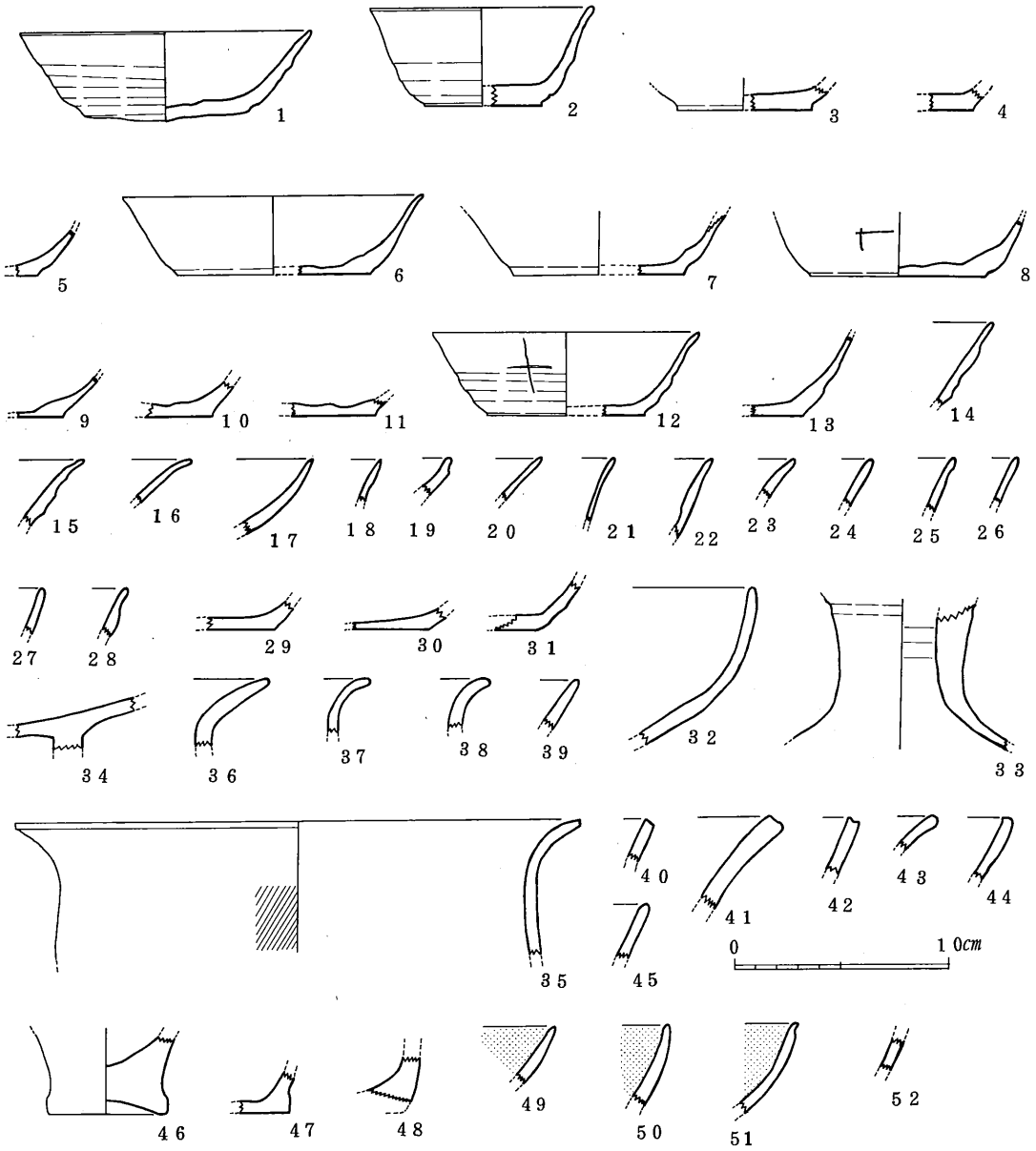
織布圧痕土器　（第31図53～61，図版18－53～61）

第Ⅰ地区C－7から多数出土している。(53)は口縁部を肥厚させており，口唇部先端は平坦である。外面には凹凸があり，内面は風化著しいために織布圧痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し，胎土には大粒の砂を含み，焼成はあまり良くない。(54)は口縁部になるに従って薄くなり，口唇部先端わ幾分内湾させている。外面には凹凸があり，内面は風化著しいために織布圧痕は口唇部内面に若干残っている程度である。色調は赤褐色を呈し，胎土には大粒の砂を含み，焼成はあまり良くない。(55)は全体的に器壁が厚く，口唇部先端を幾分内湾させている。口唇部先端は平坦に近い。口唇部内面には指の押圧痕が1ケ所ある。外面には凹凸があり，内面には1cm間の経糸・緯糸とも7～8本の織布圧痕がある。色調は赤褐色で，胎土には大粒の砂をかなり含み，焼成はあまり良くない。(56)は，1cmと全体的に器壁の厚い口縁部で，口唇部先端は平坦である。内面には1cm間の経糸・緯糸とも7～8本の織布圧痕を施す。色調は赤褐色を呈し，胎土には大粒の砂を含み，焼成はあまり良くない。(57)は1.3cmと全体的に器壁の厚い口縁部で肥厚しており，口唇部先端は平坦である。外面には凹凸があり，内面は風化著しいために織布圧痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し，胎土には大粒の砂を含み，焼成はあまり良くない。(58)は器壁の薄い口縁部で，口唇部先端は平坦である。内面は風化著しいために織布圧痕は消失している。色調は黄褐色を呈し，胎土には少量の砂を含み，焼成はあまり良くない。(53)～(58)は第Ⅰ地区C－7で出土した。(59)は肥厚した口縁部で，口唇部先端を内側につまみ出している。口唇部先端は平坦に近い。内面は風化著しいために織布圧痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し，胎土には少量の砂を含み，焼成はあまり良くない。(60)は器壁が厚い口縁部で，口唇部先端を内側に幾分つまみ出している。口唇部先端は平坦である。内面には1cm間に経糸・緯糸とも7～8本の織布圧痕を施す。色調は黄褐色を呈し，胎土には大粒の砂を含み，焼成はあまり良くない。(61)は口唇部の断面が三角形を呈し，口唇部先端は平坦である。内面は風化著しいために織布圧痕は完全に消失している。色調は赤褐色を呈し，少量の砂を胎土に含んで，焼成はあまり良くない。織布圧痕土器の器形は，国分寺跡（西都市大字三宅字国分寺）で出土した，外面にそぎおとされた断面三角形の口唇部を持つ口径径13～14，高さ9～11cmの尖底或いは丸底の椀形土器[2]と同様なものと推定される。

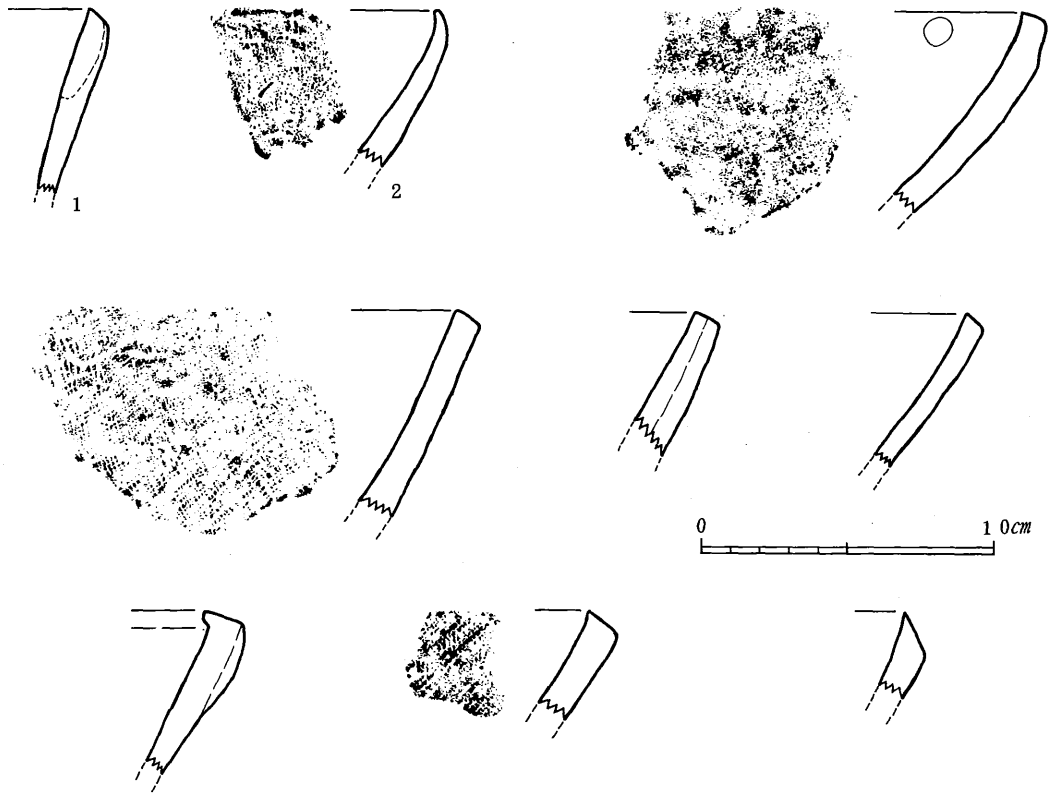
第 10 表　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器一覧表

番号	出土地	器種	器部	色調	胎土	焼成	備考
1	Ⅱ－C－8	坏	完形	黄褐色	精選	良好	A－1類
2	Ⅱ－C－5～9	坏	略完形	赤褐色	少量の砂	良好	A－2類
3	Ⅱ－B－4	坏	底部	赤褐色	少量の砂	普通	A－2類
4	Ⅱ－C－9	坏	底部	赤褐色	多量の砂	普通	A－2類
5	Ⅰ－C－7	坏	底部	黄褐色	少量の砂	普通	
6	Ⅰ－C－7	坏	略完形	赤褐色	多量の砂	普通	B－1類
7	Ⅰ－C－7	坏	口縁欠	黄褐色	多量の砂	普通	B－1類
8	Ⅰ－C－7	坏	口縁欠	黄褐色	多量の砂	普通	B－1類・ヘラ記号有
9	Ⅱ－C－5～9	坏	底部	赤褐色	多量の砂	普通	B－1類
10	Ⅱ－C－5～9	坏	底部	黄褐色	多量の砂	普通	B－1類
11	Ⅰ－C－7	坏	底部	赤褐色	精選	普通	B－1類
12	Ⅰ－C－7	坏	略完形	赤褐色	少量の砂	普通	B－2類・ヘラ記号有
13	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁欠	赤褐色	多量の砂	悪い	B－2類
14	Ⅱ－C－8	坏	底部欠	黄褐色	多量の砂	普通	B－2類
15	Ⅰ－C－7	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
16	Ⅰ－C－7	坏	口縁	赤褐色	多量の砂	普通	
17	Ⅰ－C－7	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
18	Ⅰ－C－7	坏	口縁	赤褐色	精選	良好	
19	Ⅰ－C－7	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
20	Ⅰ－C－7	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
21	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	赤褐色	多量の砂	普通	
22	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	黄褐色	少量の砂	普通	
23	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
24	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
25	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
26	Ⅱ－C－5～9	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
27	Ⅱ－C－9	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
28	Ⅱ－C－9	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
29	Ⅰ－C－7	坏	底部	黄褐色	精選	良好	
30	Ⅰ－C－7	坏	底部	黄褐色	精選	良好	

番号	出土地	器種	器部	色調	胎土	焼成	備考
31	I－C－7	坏	底部	赤褐色	精選	普通	
32	I－C－7	椀	底部欠	黄褐色	多量の砂	悪い	
33	I－C－7	高坏	脚部	黄褐色	多量の砂	普通	
34	I－C－7	高坏	接合部	赤褐色	多量の砂	普通	
35	I－C－7	甕	口頸部	黄褐色	多量の砂	普通	
36	I－C－7	甕	口縁	赤褐色	大粒の砂	良好	
37	I－C－7	甕	口縁	赤褐色	大粒の砂	良好	
38	I－C－7	甕	口縁	赤褐色	大粒の砂	悪い	
39	I－C－7	甕	口縁	黄褐色	精選	良好	
40	II－B－4	甕	口縁	赤褐色	多量の砂	悪い	
41	II－C－5～9	甕	口縁	赤褐色	少量の砂	良好	
42	II－C－8	甕	口縁	黄褐色	多量の砂	良好	
43	II－C－8	甕	口縁	黄褐色	少量の砂	普通	
44	II－C－8	甕	口縁	黄褐色	精選	普通	
45	II－C－9	甕	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
46	II－C－9	甕	底部	黄褐色	大粒の砂	悪い	
47	II－C－5～9	甕	底部	赤褐色	多量の砂	悪い	
48	II－C－5～9	甕	底部	赤褐色	精選	普通	
49	I－C－7	椀	口縁	黒色	精選	良好	黒色土器A類
50	II－C－9	椀	口縁	黒色・黄褐色	精選	良好	黒色土器A類
51	II 表採	椀	口縁	黒色・黄褐色	精選	良好	黒色土器A類
52	I－C－7	椀	破片	黒色	精選	良好	黒色土器B類
53	I－C－7	鉢	口縁	黄褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
54	I－C－7	鉢	口縁	赤褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
55	I－C－7	鉢	口縁	赤褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
56	I－C－7	鉢	口縁	赤褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
57	I－C－7	鉢	口縁	黄褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
58	I－C－7	鉢	口縁	黄褐色	少量の砂	不良	織布圧痕土器
59	II－A－5	鉢	口縁	黄褐色	少量の砂	不良	織布圧痕土器
60	II－C－5～9	鉢	口縁	黄褐色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
61	II－C－5～9	鉢	口縁	赤褐色	少量の砂	不良	織布圧痕土器



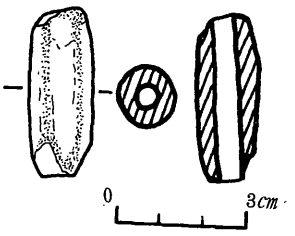
第３０図　第Ⅰ・Ⅱ地区出土土師器実測図



第３１図　第Ⅰ・Ⅱ地区出土の織布圧痕土器

土錘（第３２図，図版１８）

第Ⅱ地区C－６で出土した円筒状の土錘である。長さ３.８cm，最大幅１.５cm，孔径０.４cmを測る。重さ１０g，両端の一部を欠損する。棒などに巻いて作ったものではない。色調は淡黄褐色を呈し，胎土には微細な石英などを含み，焼成は良好である。

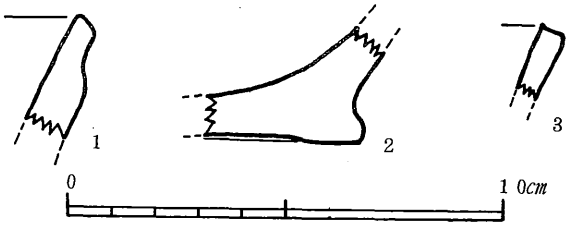


第３２図
第Ⅱ地区出土土錘実測図

〈第Ⅲ・Ⅳ地区〉

甕（第３３図１～３）

(1)は口縁部の破片で，内外面ともナデを施す。口唇部先端は平坦で外面を強く横ナデする。器壁が厚く，色調は黄褐色を呈する。胎土には大粒の砂を含み，焼成は悪い。(2)は若干上げ底気味の底部である。



第３３図　第Ⅲ・Ⅳ地区出土の土師器

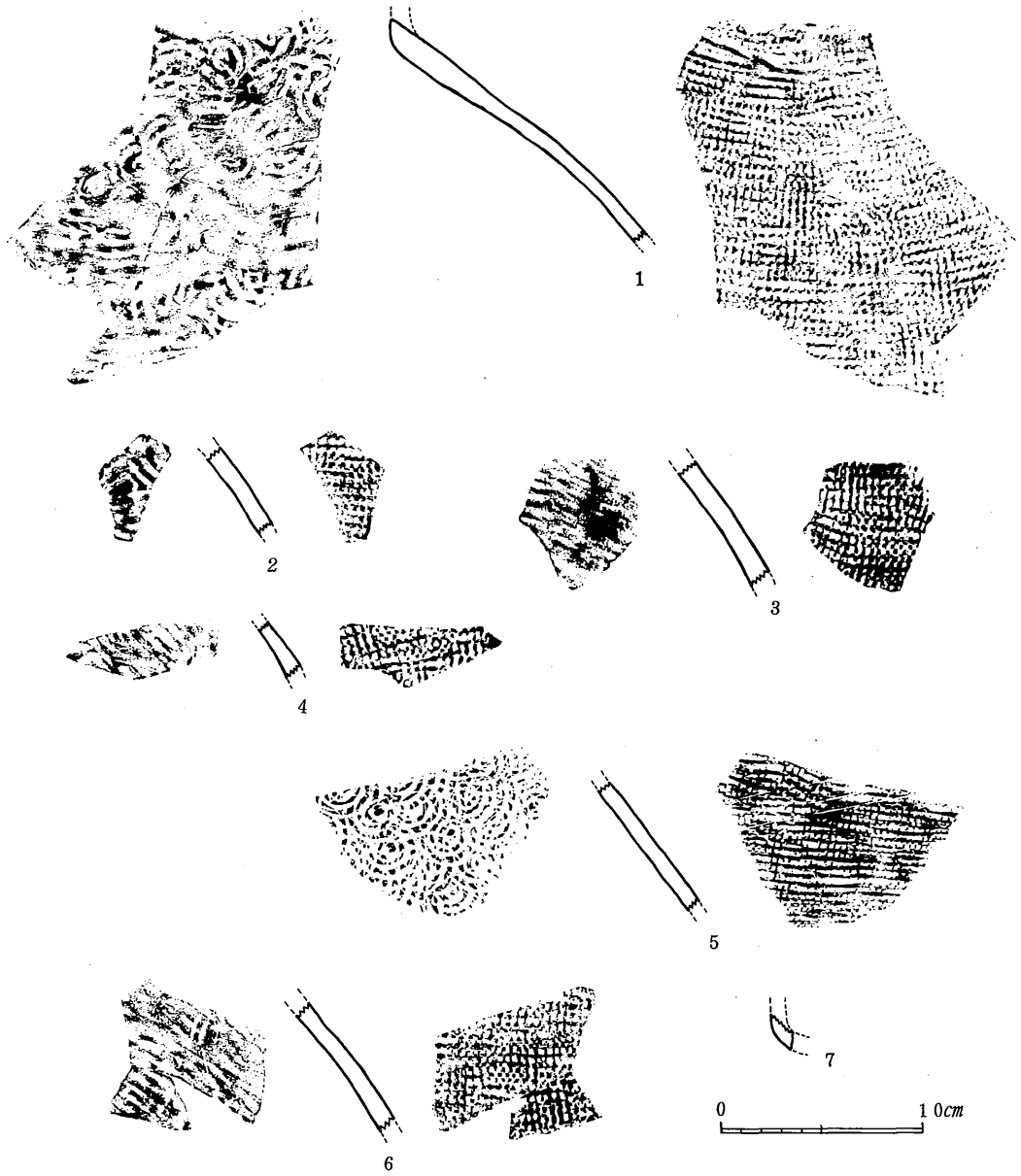
底部が張り出し，器壁・底部とも厚い。色調は黄褐色を呈し，胎土には多くの砂を含み，焼成は普通である。(1)・(2)とも第Ⅲ地区のＡトレンチのⅢ層（褐色土層）上面から出土した。(3)は第Ⅳ地区Ｃ・Ｄ３・４から出土した口縁部の破片で，内外面ともナデを施す。口唇部先端は凹状を呈する。色調は黄褐色を呈し，胎土には多くの砂を含み，焼成は普通である。

3　須恵器

当遺跡の東丘陵地の第Ⅰ地区Ｃ－７で５点（第３４図１～５），第Ⅱ地区Ｃ－５～９で２点（第３４図６・７）出土した。すべて甕の破片である。

甕　（第３４図１～７，図版１８－１・５）

(1)は甕の肩部で口頸を欠いている。頸部が取れた部分に叩き目が残存しているので胴の器壁に内外から打圧を加えた後，口頸部を付けたものである。体部の内面は青海波状の叩きを施した後に，部分的に横方向にナデ消している。外面は格子目状の叩きを施す。色調は内面が淡黄褐色，外面が暗黄褐色である。胎土は精選されているが，焼成はあまり良くない。(2)は(1)と同一個体の甕の体上半部の破片である。内面は青海波状の叩きを施した後に，部分的に横方向にナデ消している。外面は格子目状の叩きを施す。色調は，内面が淡黄褐色を，外面が暗黄褐色を呈する。胎土は精選されているが，焼成はあまり良くない。(1)，(2)とも第２８図の状態で出土した。(3)は甕の体上半部の破片で，内面には横位のゆるい曲線状の叩きを，外面には格子目状の叩きを施す。内外面とも淡黄褐色を呈する。(4)は体上半部の破片で，内面は横位のゆるい曲線状の叩きを施した後に，部分的にナデ消している。外面は格子目状の叩きである。(3)・(4)とも胎土は精選されているが，焼成は悪い。(5)は体上半部の破片で，内面に青海波状の叩きをシャープに施し，外面には格子目状の叩きを施す。また外面の叩きの上から篦状の道具で三条の沈線を施す。内面は青灰色で，外面は灰色である。胎土は精選され，焼成は堅緻である。(3)～(5)は第Ⅰ地区Ｃ－７のⅠ層・Ⅰ″層から出土した。(6)は体上半部の破片で，内面は横位のゆるい曲線状の叩きを，外面には格子目状の叩きを施す。内面は黄褐色を，外面は青灰色を呈する。胎土は精選されているが，焼成は悪い。(7)は口頸を欠いた肩部の破片である。頸部がはずれた部分には叩き目を残しているので(1)と同じ製作技法で製作された甕である。内面はナデを施し，色調は淡黄褐色を呈する。胎土は精選されているが，焼成は悪い。(6)・(7)は第Ⅱ地区のＣ－５～９のⅠ層～Ⅰ″層から出土した。



第３４図　須恵器の実測図

4　小　結

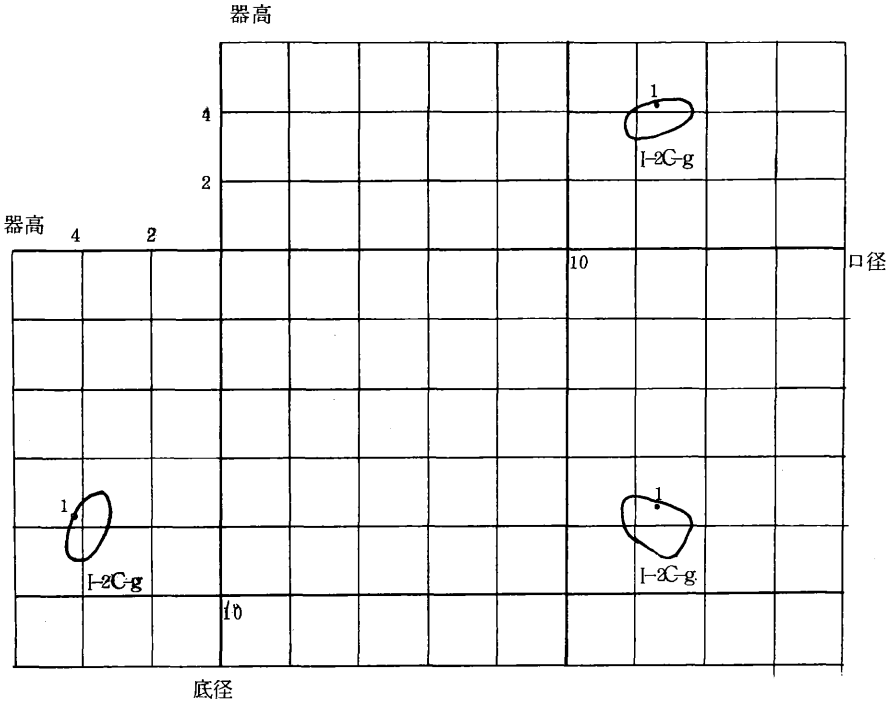
当遺跡で出土した土師器（黒色土器・織布圧痕土器を含めて）と須恵器に関する問題点について述べる。問題点としては，土師器の時期，黒色土器と他の土器類との共伴関係，織布圧痕土器と他の土器類との共伴関係，須恵器の時期と窯（生産地）の問題の４点が挙げられる。

第一に土師器の時期について述べる。７・８世紀の土器が，胎土・製作手法を異にし明らかに生産地を異にしながらも，同一形態・同一法量をもっているのは，強い規制下で生産されたと考えられている。[3] よって，この法量を規準にして歴史時代の土師器の編年を行なうのは有効な手段と考えられる。九州では，特に御笠川南条坊遺跡[4]（福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字平野・泉水）においてその編年が着々と進められている。宮崎では比較しうる歴史時代の土師器の有効な資料があまりないので，[5] 御笠川南条坊遺跡出土の土師器の法量に，当遺跡出土の土師器の法量をあてはめて当遺跡出土の土師器の時期を考えてみたい。この方法には地域差や時期差など種々な問題があるが，当遺跡出土の土師器の時期の１つの目安を求めるための一つの方法として試案的に採用したい。

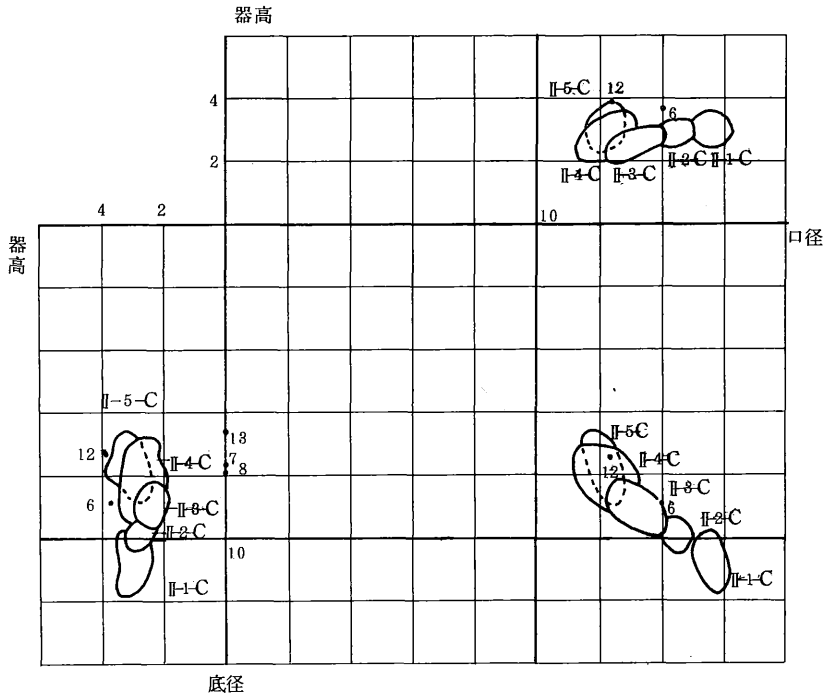
当遺跡では，まとまった資料としては坏がある。底部の切り離し手法と平底を基準にしてＡ－１類，Ａ－２類とＢ－１類，Ｂ－２類に分けた。底径を推定復原した坏を含めて８個体あるが，口径・底径・器高の法量をすべてそろえている完形の坏はわずか４個体だけで，数量的には非常に制限されている。Ａ－１類を代表する(1)は，御笠川南条坊遺跡のⅠ－２Ｃ－ｇ類に相当する（第１１表）。Ⅰ－２Ｃ類の推定年代は１０世紀中頃～後半である。[6] Ｂ類は平底であるので底部の切り離し手法が糸切りの可能性も考えられる。そこで糸切りと仮定して比較すると，口径と底径の法量では，Ｂ－１類を代表する(6)はⅡ－３－Ｃ$^{c}_{類}$に，Ｂ－２類を代表する(12)はⅡ－５－ｃ類に相当する。[7] しかし，(6)，(12)とも器高が高いという点で不都合が生じる（第１２表）。糸切りの出現の時期は，関東が早く８世紀中葉，[9] 畿内では遅れて奈良末，[10] 九州の大宰府では更に遅れて第９次調査のＳＥ２２５の１２世紀初頭，[11] 御笠川南条坊遺跡のＳＫ３１２土拡上部・下部，ＳＫ３３８土拡出土のⅡ－１類の土師器の１２世紀中頃～後半とされている。[12] 以上のように糸切りへの技法的転換は，かなりの地域差がある。また高台付坏が１点も出土していない。大宰府では高台付坏の出現は，第１８次調査のＳＥ４００出土の土師器の９世紀前半，[13] 御笠川南条坊遺跡のＭＥ１３区下層出土のⅠ－１Ａ類の土師器の８世紀末～９世紀初頭である。[14] 以上の点から地域差・時期差などを加味して考えると，当遺跡出土の土師器の坏の時期は平安時代前半（９世紀～１０世紀）頃とするのが妥当であろう。[15]

黒色土器は，当遺跡ではＡ類８点，Ｂ類１点が出土している。黒色土器Ａ類の出現は，大宰府では第１８次調査のＳＥ４００の平安初期に，[16] 御笠川南条坊遺跡ではⅠ－１Ａ類の土師器と共伴しており８世紀末～９世紀初頭に[17] 求められている。Ａ類の終末は，Ⅰ－２Ｃ類の土師器と共伴する１０世紀中頃から後半に[18] 求められている。Ｂ類は，御笠川南条坊遺跡では，Ⅰ－１Ａ類からⅠ－２Ｃ類と共伴しており，８世紀末～１０世紀末まで存続した。[19] 一方，大宰府政庁では１０世紀中頃から１１世紀後半頃まで存続した。[20] 黒色土器Ａ類からも前述した坏の時期が首肯される。

織布圧痕土器は，宮崎県内では尾平野洞窟[21]（北諸県郡大字安久尾字平野），下弓田遺跡[22]（串間市大字南方字下弓田），こまくりげ遺跡[23]（小林市大字細野），竹山遺跡[24]（小林市大字細野字竹山），国分寺跡[25]（西都市大字三宅字国分寺）などで出土している。外面にそぎおとされた断面三角形の口唇部を持ち，



第１１表　御笠川南条坊遺跡の土師器との法量対照表



第１２表　御笠川南条坊遺跡の土師器との法量対照表

口径１３～１４，高さ９～１１cmの尖底或いは丸底の椀形土器である。[26] 尾平野洞窟と下弓田遺跡は縄文時代の遺跡である。こまくりげ遺跡では土師器の高台付椀，歴史時代の須恵器と共伴し，竹山遺跡では土師器の高台付椀，黒色土器A類，墨書土器と共伴し，国分寺跡では布目瓦，土師器の高台付椀と共伴した。織布圧痕土器の点からも坏の時期が首肯される。

須恵器の時期については，甕の肩部と胴部の破片だけで，時期の決め手である口頸部を欠いているので限定できない。しかし，叩きや製作技法の特徴からすれば歴史時代の須恵器である。当遺跡の東約2.5Kmにある松ケ迫窯跡[27]（宮崎市大字郡司分）は，奈良時代の須恵器の窯で，[28] 県内の知られている６ケ所９例の窯の中では最古の窯である。[29] 他の窯は平安時代を中心に操業された窯である。当遺跡の須恵器は松ケ迫窯跡で生産された可能性が強いと考えられる。

また，第２８図の出土状態で見られるようにB－１類の土師器の坏と須恵器の甕，織布圧痕土器が共伴していたことからも首肯される。

以上の土師器の坏，黒色土器（特にA類），織布圧痕土器，須恵器などの遺物の点，そして共伴関係などから総合的に判断すると，当遺跡出土の土器類は平安時代前半（９世紀～１０世紀）頃の所産と考えられる。[30] 今後の資料の増加に期待したい。

（注）

(1) 田中琢　「古代・中世における手工業の発達（窯業）ー畿内」（『日本の考古学』Ⅵ）昭和42年
稲垣晋也氏は，A類を第二類，B類を第一類としている。（稲垣晋也「瓦器椀の成立と展開 奈良時代黒色工人から奈良時代火鉢座への系譜１」（『日本考古学論叢』２）昭和４３年

(2) 茂山護　「竹山遺跡」（『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)）昭和４７年

(3) 小笠原好彦　「７・８世紀の土器の生産」（『考古学雑誌』第６５巻第３号）昭和５４年

(4) 前川威洋他　「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第２集　昭和５０年
同上第３集　昭和５１年，同上第６集　昭和５２年，同上第８集　昭和５４年

(5) 岩永哲夫氏の御教示によれば，当遺跡の東へ約８００mにある若宮田遺跡で糸切り底の皿が多数出土した。　岩永哲夫・日高正晴「若宮田遺跡・発掘調査報告書」　昭和５４年

(6) (4)と同じ

(7) (4)と同じ

(8) 糸切りには静止糸切りと回転糸切りとがある。回転糸切りには前引き糸切り，まわし糸切り，離し糸切りがある。小川貴司　「回転糸切り技法の展開」（『考古学研究』第２６巻第１号）昭５４年

(9) 大塚初重　「土師器・須恵器の編年とその時代」（『日本考古学を学ぶ(1)』）昭和５３年

(10) 平城宮の主馬寮の井戸出土の須恵器である。高島忠平　「第４７・５０～５２次発掘調査宮城西方官街地区」（『奈良国立文化財研究所年報１９６９』）昭和４４年　しかし，阿部義平氏は畿内の製品ではないという。「ロクロ技術の復元」（『考古学研究』第１８巻第２号）昭和４６年

(11) 横田賢次郎・森田勉　「大宰府出土の土師器に関する覚え書」（『九州歴史資料館研究論集２』）昭和５１年　亀井明徳他　「大宰府史跡」　昭和４６年

(12) (4)と同じ

(13) (11)と同じ

(14) (4)と同じ

(15) 関東の土師器編年では国分式土器に相当する。杉原荘介　「土師式土器集成　本編四」昭和48年
最近の研究では，国分式土器の存続期間が９世紀から１０世紀代であることが明瞭になった。
(9)に同じ

(16) 森田勉　「九州地方の瓦器類について－型式分類と編年試案－」（『考古学雑誌』第５９巻第２号）昭和４８年

(17) (4)と同じ

(18) (4)と同じ

(19) (4)と同じ

(20) (16)と同じ

(21) 小林久雄　「宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野洞窟住居址」（『考古学』第８巻第５号）昭和42年　小笠原好彦氏は編布土器の範疇に入れている。「縄文・弥生式時代の布」（『考古学研究』第１７巻第３号

(22) 鏡山猛　「下弓田遺跡」（『日向遺跡総合調査報告』第１輯）昭和３６年

(23) 田中茂　「こまくりげ遺跡」（『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1)）,昭和４７年

(24) (2)と同じ

(25) (2)と同じ

(26) (2)と同じ

(27) 石川恒太郎　「宮崎県の考古学」昭和４３年

(28) 小田富士雄　「九州地方古代窯址（須恵器・瓦）地名表（第一稿）」（『九州考古学』２９・３０）昭和４１年　岩切池須恵窯址（宮崎市東郷南方，岩切池畔）（奈良）と記載されており，松ケ迫窯址と同じと考えられる。

(29) 福尾正彦　「宮崎県内出土の須恵器－地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として」（『古文化談叢』第６集　昭和５４年）松ケ迫窯跡は奈良時代でも古い時期の所産であろうと指摘している。

(30) この時期は，当遺跡出土の土器類，特に土師器の坏の時期の１つの目安である。方法的には御笠川南条坊遺跡の法量をそのまま導入しており，種々な問題を取捨して得た結果である。今後の資料の増加と，それに伴なう検討作業を経て，当遺跡の再検討の機会を得たい。

第Ⅴ章　まとめ

(1) 縄文前期土器の出土頻度について

発掘調査区は現況の畑地の段差に応じて便宜的に設定したものに過ぎなかったが，各地区から出土した各類の土器の出土頻度には，地区ごとにある種の傾向が看取されるようである。ただし，第Ⅲ・第Ⅴ地区は発掘区の狭小さから，比較の対象としては除外するしかない。

Ⅰ～Ⅵ類に分類したタイプ別からみると，Ⅰ類土器は第Ⅰ・第Ⅳ地区でほぼⅠ類の出土総数を二分し，Ⅱ・Ⅲ類土器は出土数の絶対量に不足するが，主には第Ⅰ・第Ⅱ地区から出土している。Ⅳ類土器は第Ⅰ地区で全体のほぼ3分の2が出土し，Ⅴ類土器は第Ⅱ・第Ⅳ地区で出土数総数をほぼ二分し，Ⅳ類土器はおよそ第Ⅰ地区に限られるといって良い。こうした各類の出土頻度を各地区内での出土土器全体に対する割合でみていくと，第Ⅰ地区ではⅠ・Ⅱ・Ⅵ類の各土器に出土が集中し，第Ⅱ地区ではⅠ～Ⅴ類まで比較的出土量が均一しているが一応Ⅳ・Ⅴ類に一つの集中が認められ，第Ⅳ地区ではⅠ類土器が主となり次いでⅣ・Ⅴ類土器が比較的多く出土している。

種別＼地区別	第Ⅰ地区	第Ⅱ地区	第Ⅲ地区	第Ⅳ地区	第Ⅴ地区
Ⅰ類	52	3	—	42	
Ⅱ類	(2個体)	(4個体)	—	(1個体)	3
Ⅲ類	(3個体)	(4個体)	—	—	—
Ⅳ類	70	7	—	23	—
Ⅴ類	5	40	—	55	—
Ⅵ類	97	—	—	3	—

第13表 タイプ別からみた各地区の出土パーセント(%)

地区別＼種別	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅲ類	Ⅳ類	Ⅴ類	Ⅵ類
第Ⅰ地区	36	1.6	2	34	0.7	25
第Ⅱ地区	14	18	9	23	36	—
第Ⅲ地区	—	—	—	—	—	—
第Ⅳ地区	56	1.5	—	22	17.1	1.5
第Ⅴ地区	—	—	—	—	—	—

第14表 地区別からみた各タイプの出土パーセント(%)

(註) 概算出したものである。この二表における数値はすべて概数であり、一応の目安として

こうした傾向から，Ⅰ類（塞ノ神式）の時期には，本遺跡の所在する台地上において主要には第Ⅰ・第Ⅳ地区に「居住生活」に関する一つの空間的範囲が存在したと考えることが出来る。又，Ⅳ類（吉田式）・Ⅴ類（前平式）の時期には第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区と比較的広範囲な一つの範囲が想定出来よう。しかし，Ⅵ類（押型文）の時期にはほとんどその範囲が第Ⅰ地区に限られていたと考えられる。

もとより，全面発掘の結果ではなく，部分的な発掘調査からの既算であり，その限りでは人間の生活の範囲あるいは人間行動の様態は常にこうした統計的数値を踏み破るものであり，前述した地区の範囲は必ずしも同時的な居住空間を意味するものでないことは確かであるが，台地上に繰り返えされた人間の生活の一つの断面は捉え得ている筈である。

(2) 層位について

第Ⅰ地区においては，Ⅲ層から塞ノ神式，Ⅳ層から前平・吉田式が出土し，その層序関係をとらえることが出来た。この前平・吉田式と塞ノ神式との先後関係は河口貞徳氏によって指摘[1]されて以来，鹿児島県内においては桑ノ丸[2]・村原（栫ノ原）[3]遺跡などにおいてもそのことが追確認されており，本遺跡の結果もその1例となった。

一方，Ⅵ類（押型文）土器は，第Ⅰ地区においてⅢ層下層からⅣ層に至る層位から出土したが，前後

する塞ノ神式あるいは前平・吉田式との厳密な層位的関係は必ずしも判然としない。又，Ⅱ・Ⅲ類土器は同層で集石遺構に供伴し，第Ⅱ地区においてⅣ層上層より出土している。

アカホヤ層について一言すれば，本遺跡においてはアカホヤ層上の自然層を畑地の耕作・開地等により欠き，そのために前期曽畑式以降に相当する土器類の出土をみなかった。アカホヤ層を境とする上層下層の縄文土器について言及し得る資料を宮崎県内では明確に持たないが，鹿児島県の近年の成果である別府（石踊）遺跡[4]では，アカホヤ層を境とし上層より曽畑式土器，下層より塞ノ神A・B式が出土しており，B．P．6000年を前後するといわれるアカホヤ層を境に従来「縄文前期」として捉えられてきた中に一つの明確な編年上の画線が存在することが，次第に発掘調査の成果の中で明らかとなってきている[5]。宮崎県内の例では，多くはさほど層位的にそうした関係の解明に直接役立つものはないが，近年の2・3の例で，黒草遺跡[6]ではアカホヤ層上に後期綾式土器，アカホヤ層下から撚糸文を施文した塞ノ神式のものと思われる細片を確認し，またアカホヤ直上において曽畑式土器片数点を検出している。また，前畑遺跡[7]ではアカホヤ層上で後期初頭の出水式土器の出土をみ，アカホヤ層下で黒草遺跡同様塞ノ神式土器の細片をみている。しかし，良好な曽畑式の単純遺跡であった柿川内第Ⅰ遺跡[8]では，Ⅰ層「スコリア混入灰黒色土層」，Ⅱ層「黄色細粒土（赤ホヤ）層」，Ⅲ層「漆黒色土層」としⅣ層がその包含層とされている。だが，Ⅴ層で再び「赤ホヤ層」が出てきており，同遺跡報告内では層位記述に混乱がみられるが，「赤ホヤ層」上で曽畑式が出土する傾向はとらえられている。

(3) 縄文前期土器について

宮崎県内の縄文前期の遺跡は，柏田・跡江両貝塚[9]など古くから知られたものがあるが，いずれもその全体像が明らかにされているとは言い難く，不幸なことにこれまで恣意的な扱いを受けてきており，原点的な資料整理の必要を感じる。縄文前期土器の中でも，本遺跡出土の塞ノ神式・吉田式・前平式のいずれも鹿児島県下の遺跡を標式としており，又近年の該当期の資料の蓄積についても同県の成果にはみるべきものがある。ここではそうした例を参照としながら，簡単に本遺跡出土の縄文前期土器をまとめてみたい。

Ⅰ類（塞ノ神式）土器には，口縁部の特徴に大きく二つの傾向がみられる。一つは「く」の字形に外反する口縁をもち，胴部の器壁の厚さに対し頸部から口縁部にかけてがむしろ肥厚するもので，いま一つは，同じく外反する口縁ではあるが，やや内湾する傾向をもつものである。いわゆる二重口縁風に内反する二重口縁部をもつものはみられない。胴部の形状にはさほどふくらみを示すものはみられず，おおむね寸胴に近いものであるが，第16図がよくその全体をうかがわしめるものである。そして，底部には平底と若干の上げ底とが認められる。こうした傾向は従来の塞ノ神式のバラエティーに矛盾するものではなく，賀川光夫氏の提唱[10]した跡江式あるいは柏田・大貫式などのそもそもの実体が不鮮明である現段階ではそれらと比べ得るすべもない。

Ⅱ類土器の大きな特徴は，ヘラ描き綾杉文と口縁部の厚みを帯びる肥厚化の現象である。管見の範囲では鹿児島内においてこれと同タイプの土器の報告をみないが，桑ノ丸遺跡において3類として分類されたものの中にクシ状の施文具と思われるがこれに似た文様要素のものをみることが出来る。南九州以外では，むしろ曽畑式に近いもののようであるが，長崎県下本川洞穴遺跡[11]・佐賀県白蛇山岩陰遺跡[12]な

どから本類土器の文様に酷似するものが出土している。一方，肥厚化した口縁部については，宮崎県内では石坂式からの派生とされる田野町出土の貝殻条痕文土器[13]に見ることが出来るが，この土器は鹿児島県桑ノ丸遺跡3類土器と同タイプの土器であり，先の文様の類例とも近く，そのあたりに標準的な遺跡が捉えられる期待がある。

Ⅲ類土器についても類例がとぼしいが，鹿児島県西之表市下剝峯遺跡[14]から同タイプの土器が出土している。しかし，まだ標準的な遺跡の発見がなく型式化はされていない。本類の特徴の一つは，多くの場合金雲母を胎土に混入することであるが，鹿児島県下剝峯遺跡出土のものにはそれがみられないようである。一方，下剝峯の例では口縁部あるいは胴部に瘤状の突起をもつものがあるが，本遺跡出土の中にはそれがみられなかった。本類土器は，口縁部が山形をなすものもあり，貝殻腹縁刺突文をもつという文様上からいえば前平・吉田式等の貝殻文系土器の範疇に含まれるものであるが，それらにみられる全体的なある種の精緻さという点に欠けるものである。

Ⅳ類吉田式，Ⅴ類前平式についてはこれまで両者の関係が不鮮明で混乱をまねく部分もなくはなかったが，一応近年の鹿児島県内の成果は両者の関係を鮮明化しつつあるようである。吉田式については村原（栫ノ原）遺跡[15]，前平式については桑ノ丸遺跡が好資料を出土し，両者の関係が言及されている。本遺跡出土のⅣ類・Ⅴ類土器については，その全体をうかがわしめる好資料にめぐまれず，角筒・円筒土器についても細片からその両者をうかがうに過ぎない。

Ⅳ類吉田式の角筒土器は，山形口縁・口唇部刻目・口縁端部への横位の貝殻腹縁刺突線文・以下の縦位あるいは斜位の貝殻腹縁刺突線文・クサビ形貼り付け文・押し引き文などよくその特徴を具備するものであった。しかし，円筒土器についてはその口縁部と思われるものは検出されていない。

一方，Ⅴ類前平式では角筒土器のものと思われる口縁部の細片がわずかに2点程出土しているのみで，他は円筒土器の口縁部である。多くのものが風化・剝離が著しく貝殻腹縁連続刺突文も不鮮明なものが多かったが，ヘラ状施文具による凹凸文の口縁部片には比較的良好な資料が得られている。

（4）集石遺構について

本遺跡においては拳大の礫の散布が多くみられた。中でも，第Ⅰ地区土層断面，第Ⅱ地区C－8，第Ⅳ地区C，D－3，4に認められた礫の集石は，それが「集石」という一つのまとまりをもつものであることから，多くの礫の散布とは区別されある種の人為的な遺構であることが想定された。しかし，集石中あるいは周辺からも焼土・炭化物などの残存等は全く認められず，また集石下の掘り込みも明瞭ではなかった。近年では，縄文早・前期の遺跡にこうした集石遺構が伴なうことが多く知られている。宮崎県内では，その具体的な報告例はないが，新田原の押型文土器散布地においてこの種の集石がみられ[16]，また黒草遺跡の所在する台地の切り通しにもアカホヤ層下に多くの礫が包含され，ある種の人為性を想起させるものであった。鹿児島県の例を数例あげれば，下剝峯遺跡で本遺跡Ⅲ類土器と同タイプの土器の出土層で安山岩質の集石遺構が検出され，桑ノ丸・村原（栫ノ原）・加栗山などの各遺跡からも検出されているが，いずれも本遺跡の例と同じく集石以外に人為の痕跡を認めないものである。

縄文早・前期の集石遺構では，福岡県深原遺跡[17]などのような「石蒸し」の機能をもつと考えられる集石遺構があり，宮崎県内においても野尻町梯（かけはし）遺跡[18]が押型文土器を共伴し同種の遺構をもつが，これらの

遺構にも焼土・炭化物等を一切見ない。しかし，明確な掘り込みをもちその人為性が明らかであること，礫に加火の痕跡がうかがえることなどが，「石蒸し」としての機能を想定させるものである。

ともあれ，縄文早・前期の遺跡に伴なうこうした集石遺構は，なお今後の当該期の大きな一つの課題である。なお，本遺跡検出の集石遺構は，第Ⅱ地区でⅡ類・Ⅲ類土器に，第Ⅳ地区でⅠ類土器に伴なうものと考えられ，第Ⅲ章ですでにふれたように，集石遺構は第Ⅰ・第Ⅱ地区でⅢ層下面からⅣ層上層にみられ，第Ⅳ地区でⅢ層中層にみられる。

(5) 石器について

５１点出土した石器の内，３３点が石鏃で，その中でも第Ⅱ地区出土のものが２１点とその大半を占めⅢ層からⅣ層にかけて出土している。第Ⅱ地区の土器の出土量が総体的に少なかったにもかかわらずこうしてその大半が出土した現象は，逆に第Ⅰ・第Ⅳ地区での主体的なⅠ類・Ⅳ類の土器の時期に相対的に狩猟用具である石鏃が少ないことを意味している。あるいは第Ⅱ地区で多くみられた黒曜石等の剝片などからある種の＜場＞を想定させるものかもしれないが，厳密に供伴の土器類を判別出来ない現状では多くを問いかけることが出来ない。

第Ⅴ地区Ⅶ層礫層（粘質褐色土層まじり）上面から出土した尖頭器は，先土器時代の遺物と思われ，今後周辺台地からの類例がまたれ，先土器時代の文化層解明が期待出来る好資料である。このいわゆる三稜尖頭器は宮崎県下では，新富町新山，西都市諏訪，国富町開拓などから採集されているが，(19) 発掘資料としては初の１例を加えることになった。

註

(1) 河口貞徳「塞ノ神式土器」『鹿児島考古』第６号（昭和47年）
(2) 「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)鹿児島県教育委員会（昭和52年）
(3) 「村原（栫ノ原）遺跡『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』加世田市教育委員会（昭和52年）
(4) 「別府（石踊）遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』志布志町教育委員会（昭和54年）
(5) 新東晃一「南九州の火山灰と土器形式」『どるめん』№１９（昭和53年）
(6) 「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(3)宮崎県教育委員会（昭和55年）
(7) 「前畑遺跡」(6)に同じ。
(8) 「柿川内第Ⅰ遺跡」『柿川内第Ⅰ遺跡・柿川内第Ⅱ遺跡』宮崎県教育委員会（昭和51年）
(9) 柏田貝塚については『宮崎県史蹟調査報告』第十集
(10) 賀川光夫「九州東南部」『日本の考古学』縄文時代
(11) 『九州の原始文様』佐賀県立博物館（昭和52年）
(12) (11)に同じ。
(13) 茂山護「田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考古』第４号（昭和53年）
(14) 「下剝峯遺跡」『西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書』西之表市教育委員会（昭和53年）
(15) (3)に同じ。
(16) 岩永哲夫氏の教示による。
(17) (11)に同じ。
(18) 昨年（昭和54年）２月に発掘調査が行われたが，未報告である。
(19) 茂山護・大野寅夫「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』第３号（昭和52年）

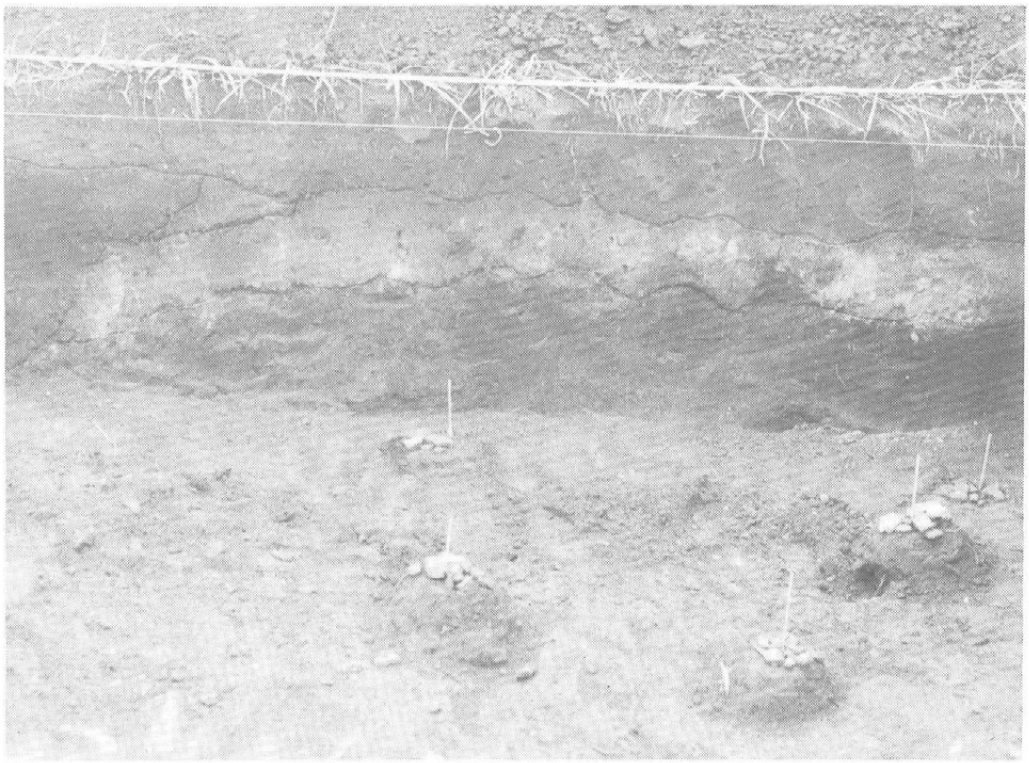
(1) 第Ⅰ・Ⅱ地区遠景（第Ⅲ地区より）

(2) 第Ⅰ地区発掘風景

図版 2

(1)　第Ⅱ地区発掘風景

(2)　第Ⅳ地区発掘風景



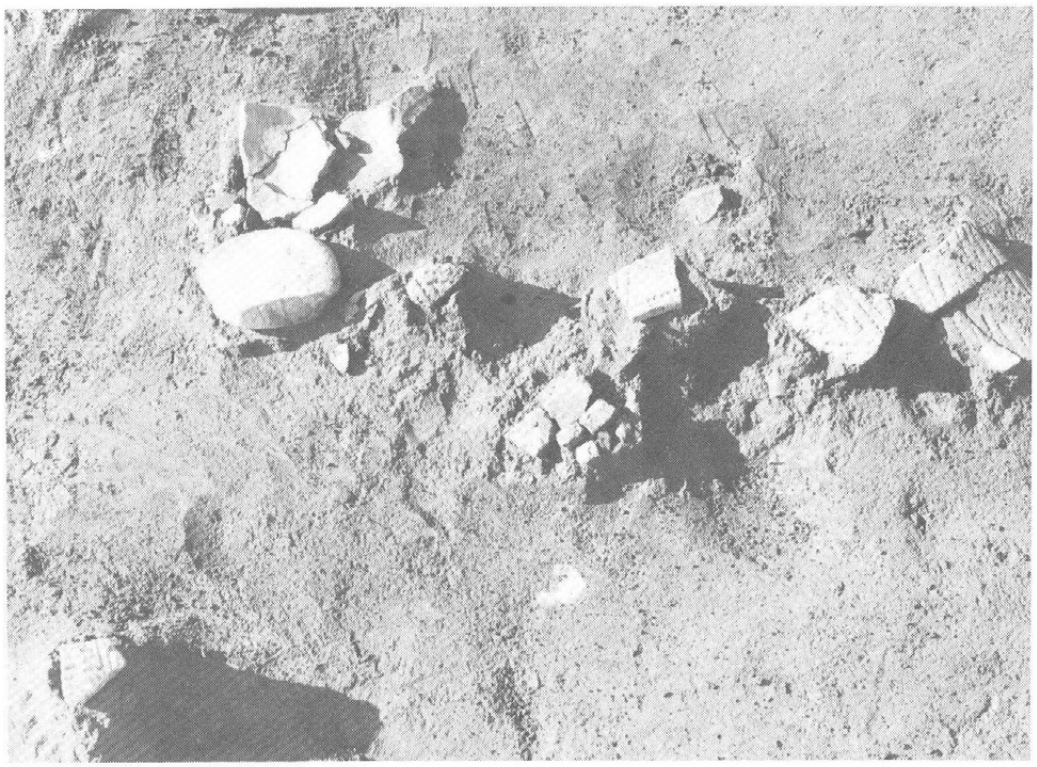
(1) 第Ⅳ地区・アカホヤ層の状態

(2) 第Ⅳ地区C，D－3，4・塞ノ神A式（左端）と集石遺構（右端）

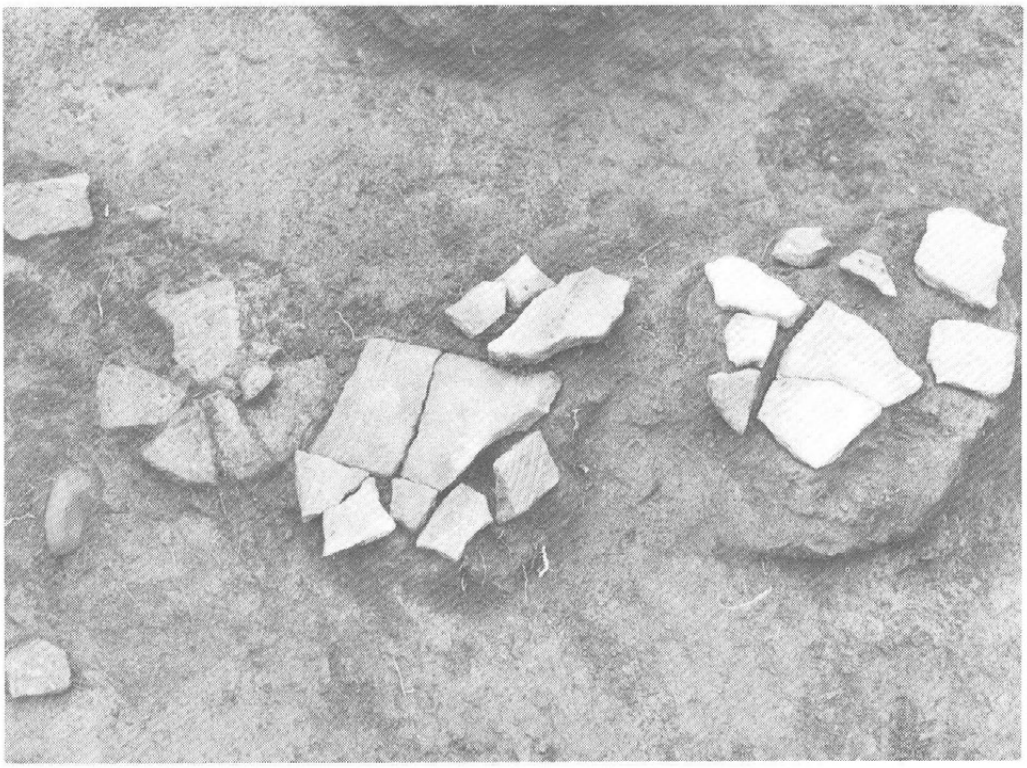
図版 4

(1)　第Ⅳ地区集石遺構

(2)　第Ⅱ地区集石遺構

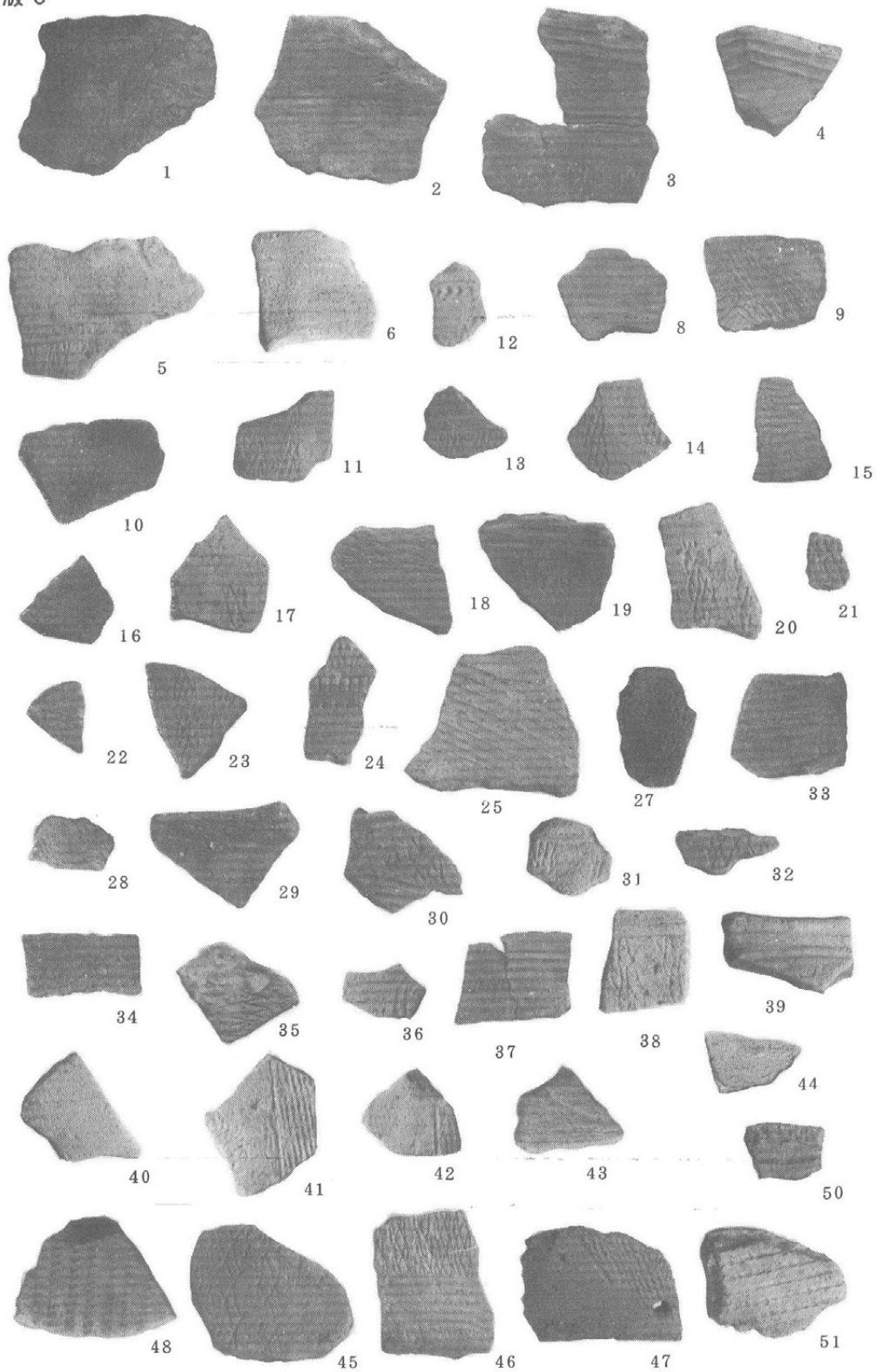


(1)　第Ⅱ地区Ⅲ類土器出土状態



(2)　第Ⅳ地区Ⅰ類土器出土状態

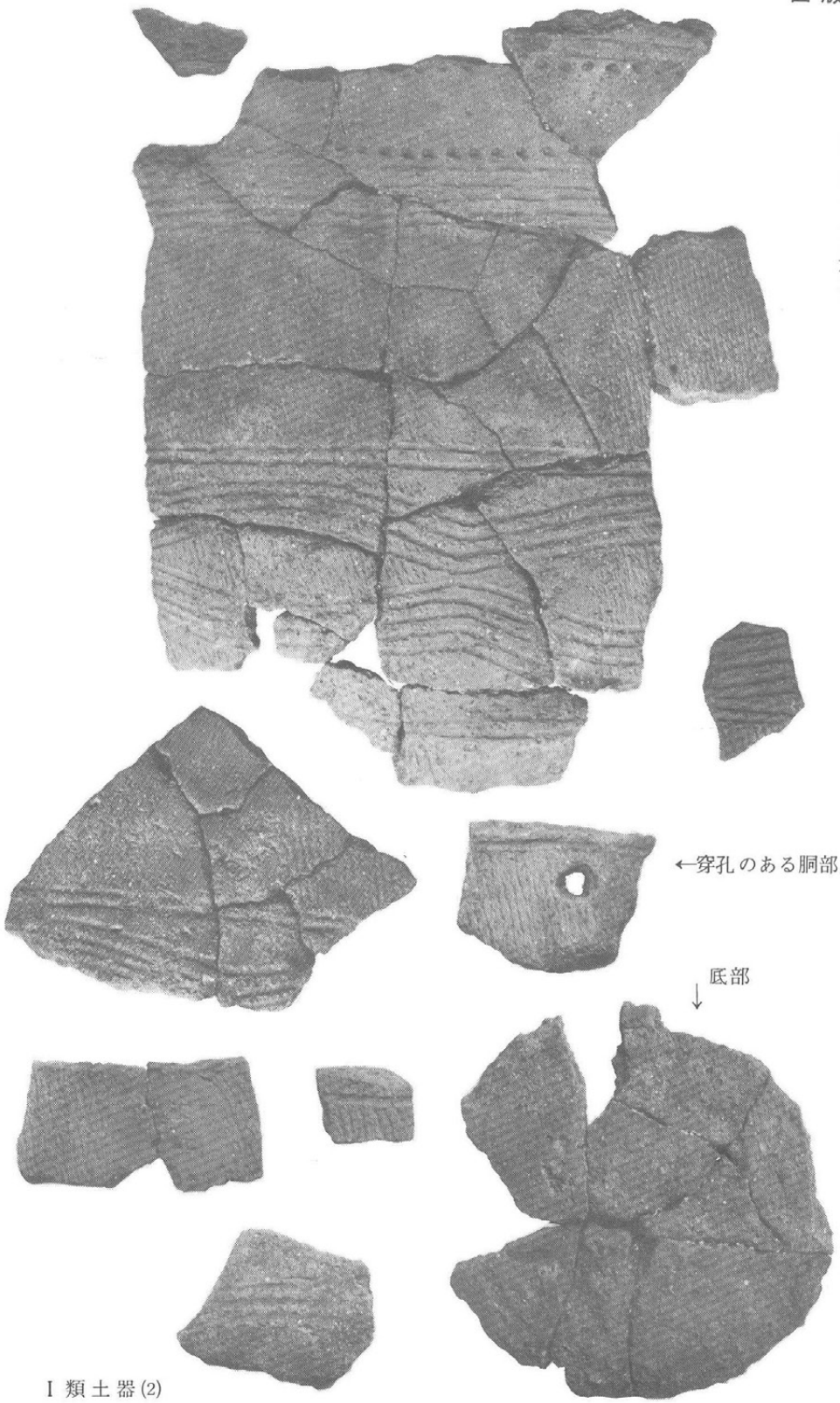
図版 6



第１５図（縮尺約 1/3）　　Ⅰ類土器(1)

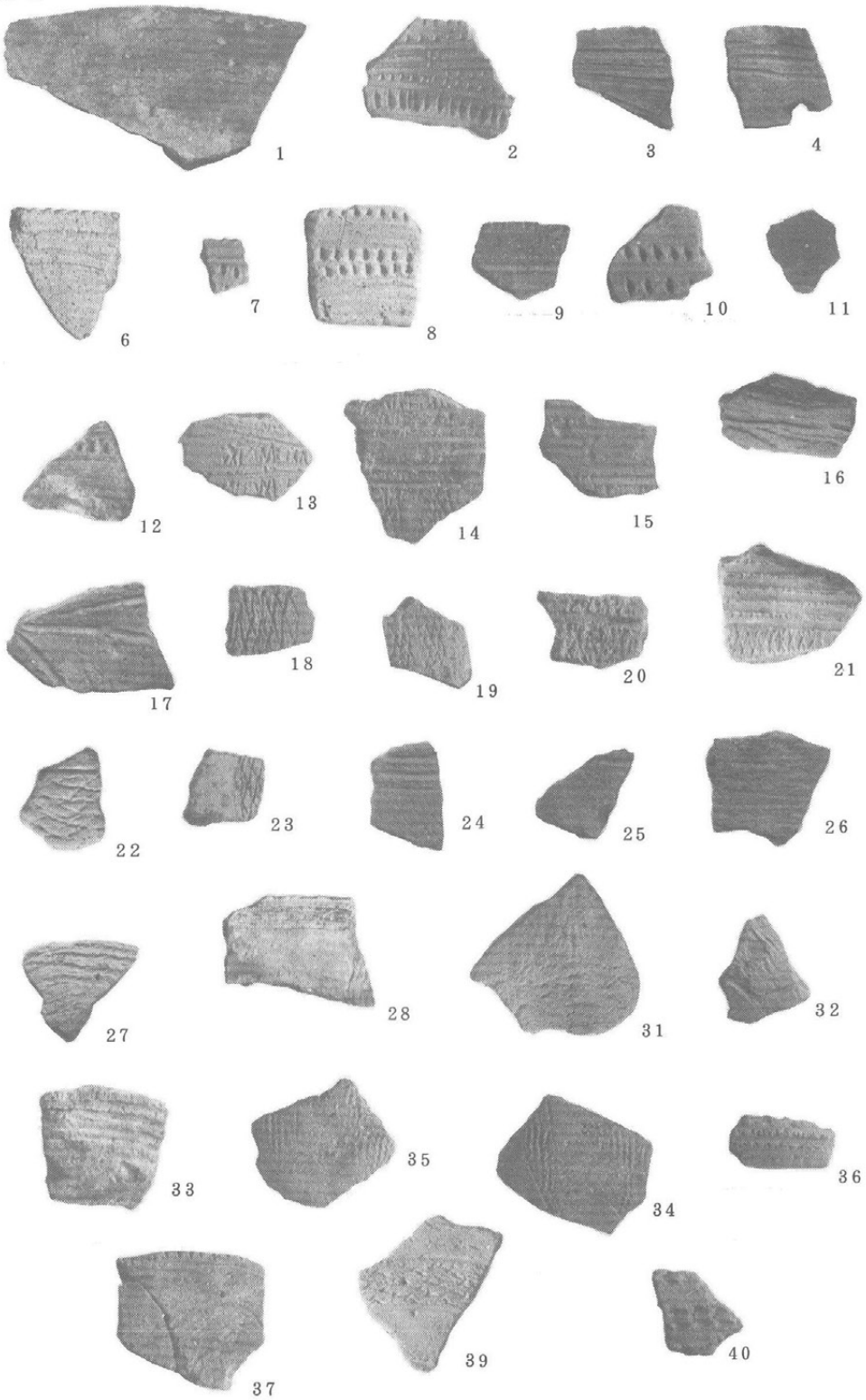
図版 7

第16図（縮尺約1/3）



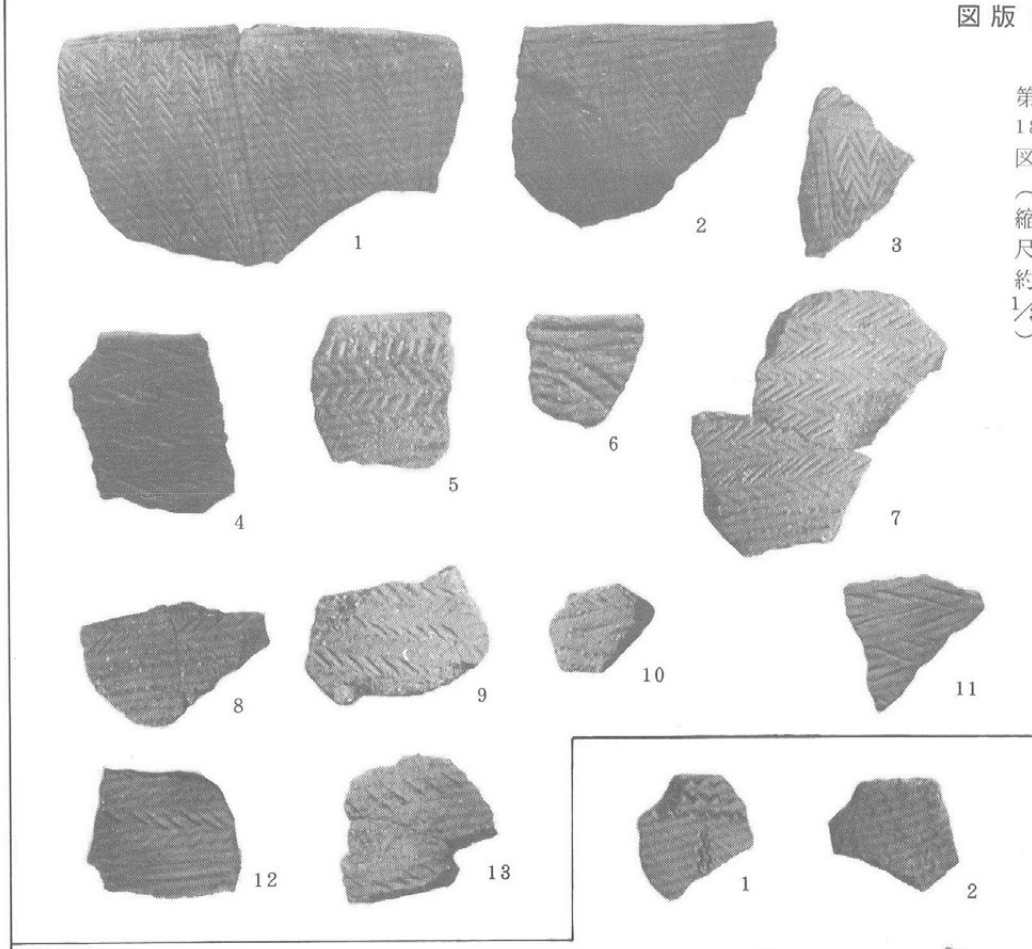
Ⅰ類土器(2)

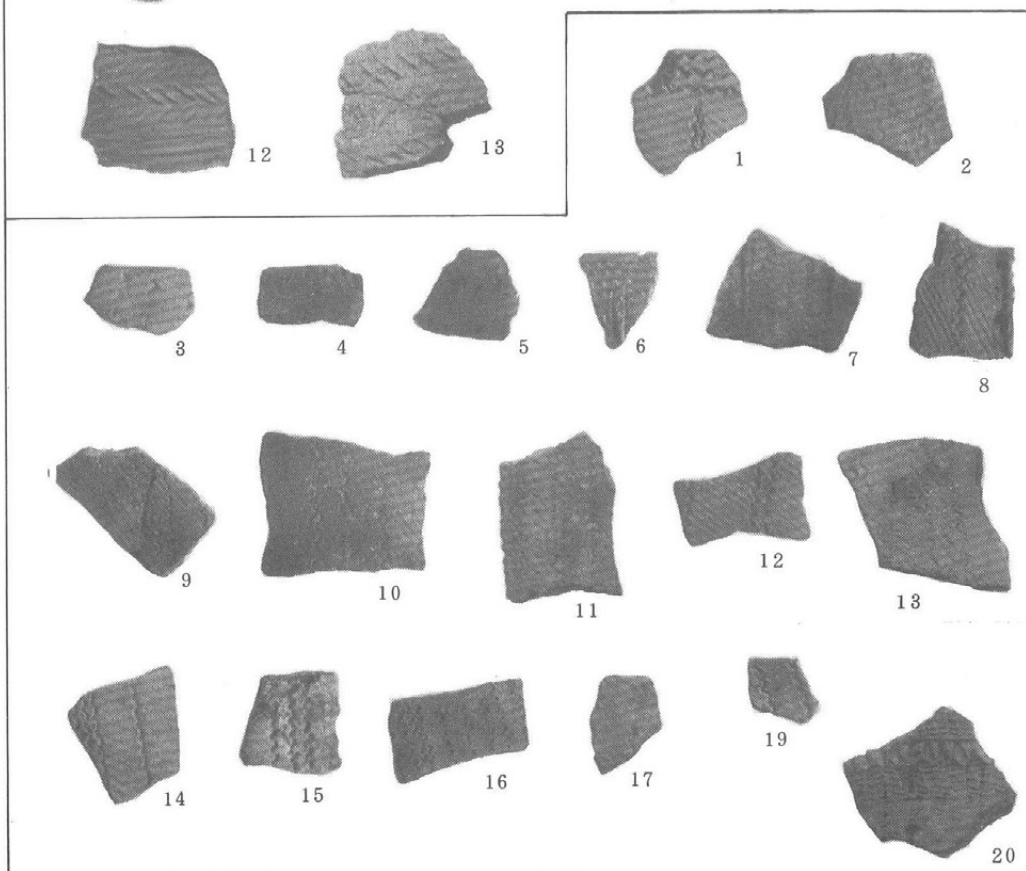
図版 8



第１７図（縮尺約 1/3）　　Ⅰ類土器(3)

第18図（縮尺約1/3）

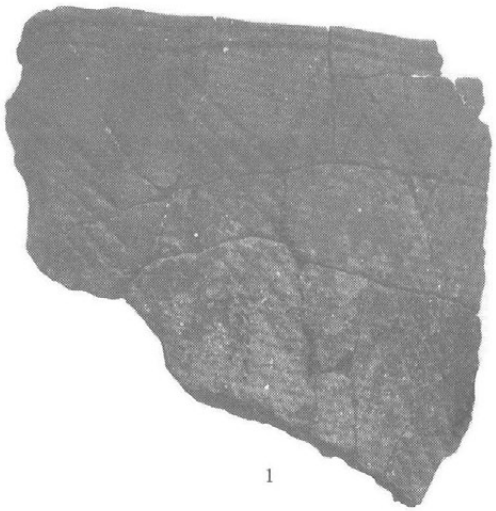


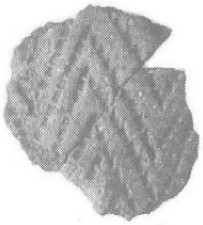


第21図（縮尺約1/3）　　Ⅱ・Ⅳ類土器

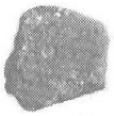
図版 10

第19図（縮尺約1/3）

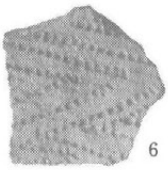

1

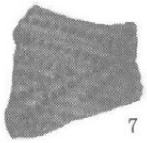

2

3

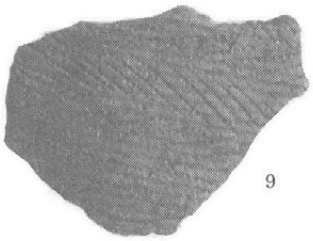

4

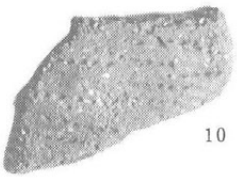
5

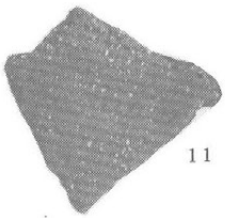

6


7

8

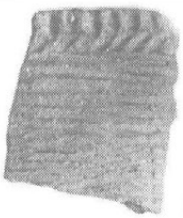

9


10


11

14

15


1

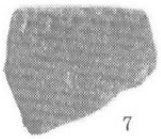
2

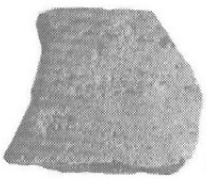
3

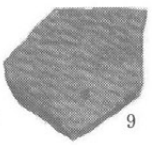
4

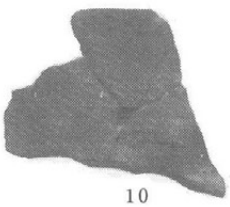
5

6


7


8


9


10

11

12

13

14

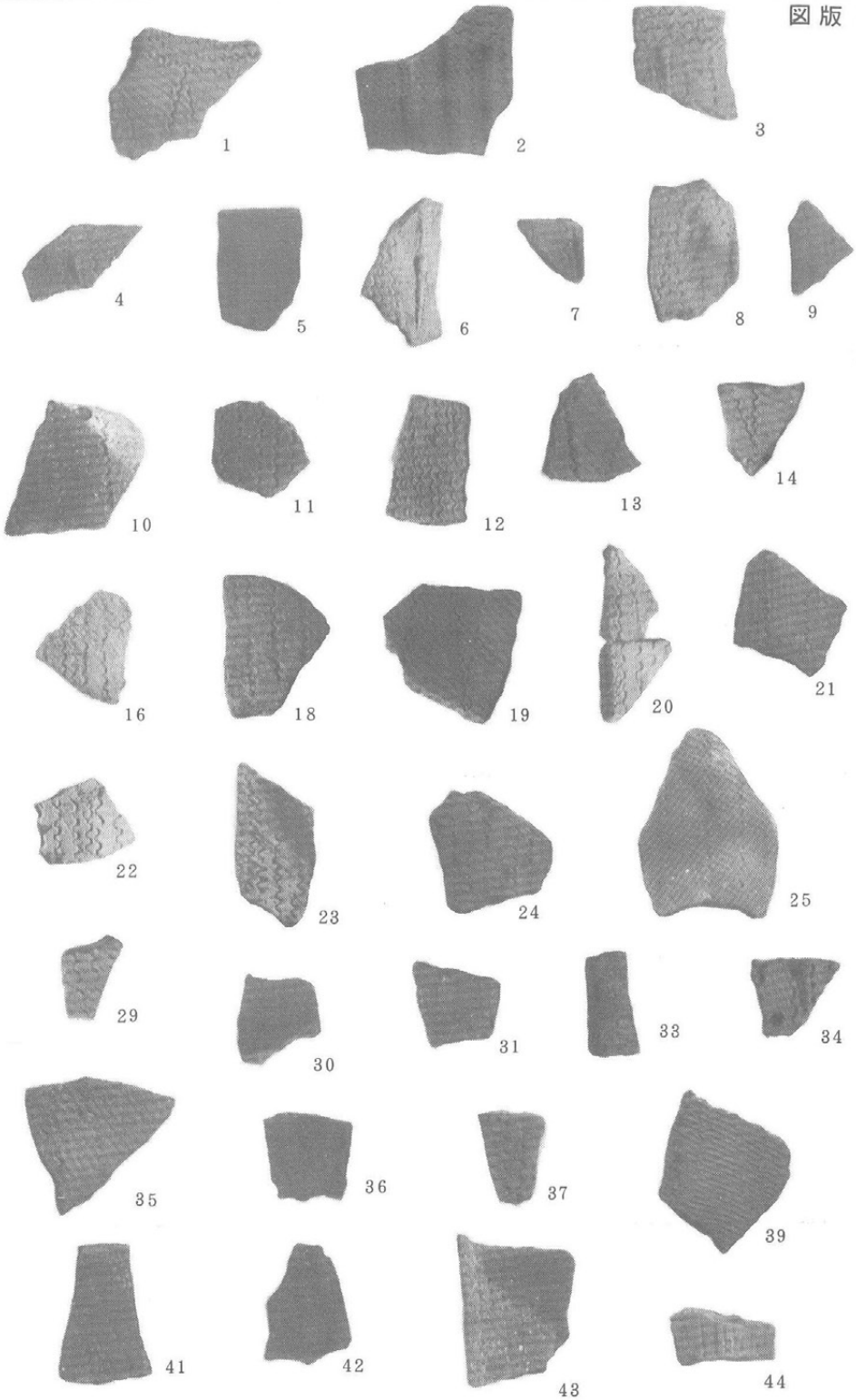
15

16

17

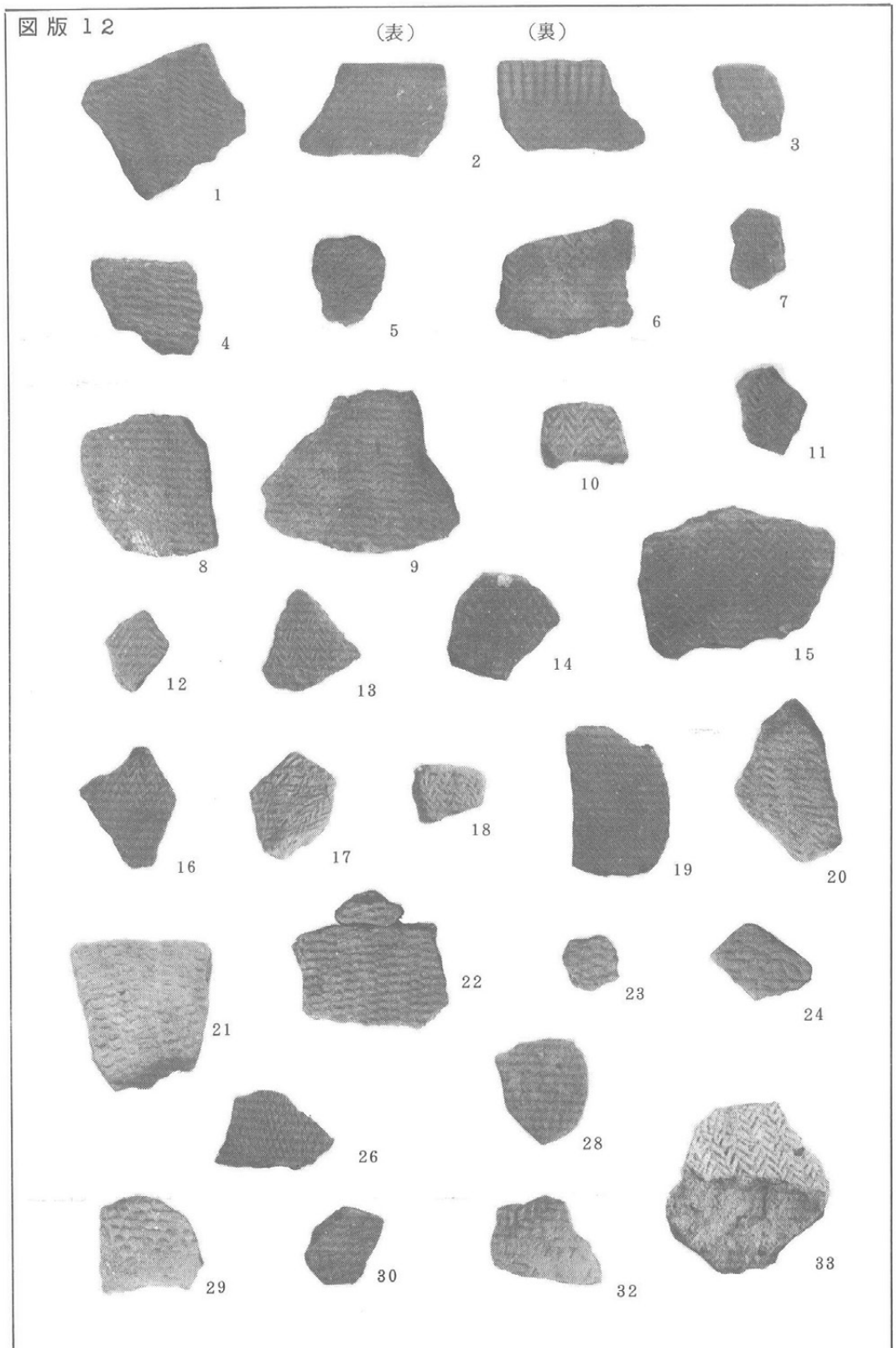
18

第22図（縮尺約1/3）
Ⅲ・Ⅴ類土器

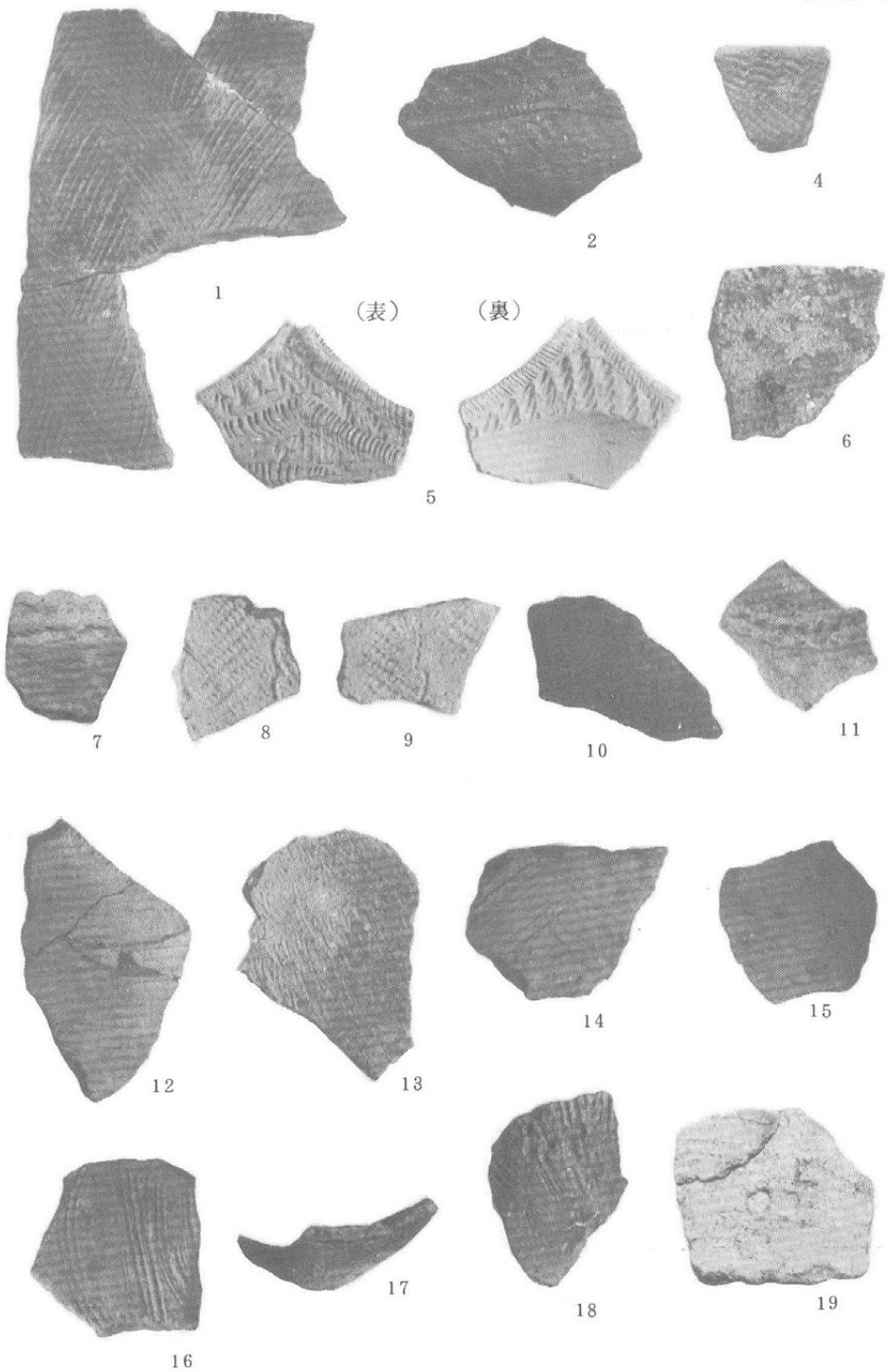


第２０図（縮尺約 1/3）　　Ⅳ 類 土 器

図版 12



第23図（縮尺約 1/3）　　Ⅵ類土器



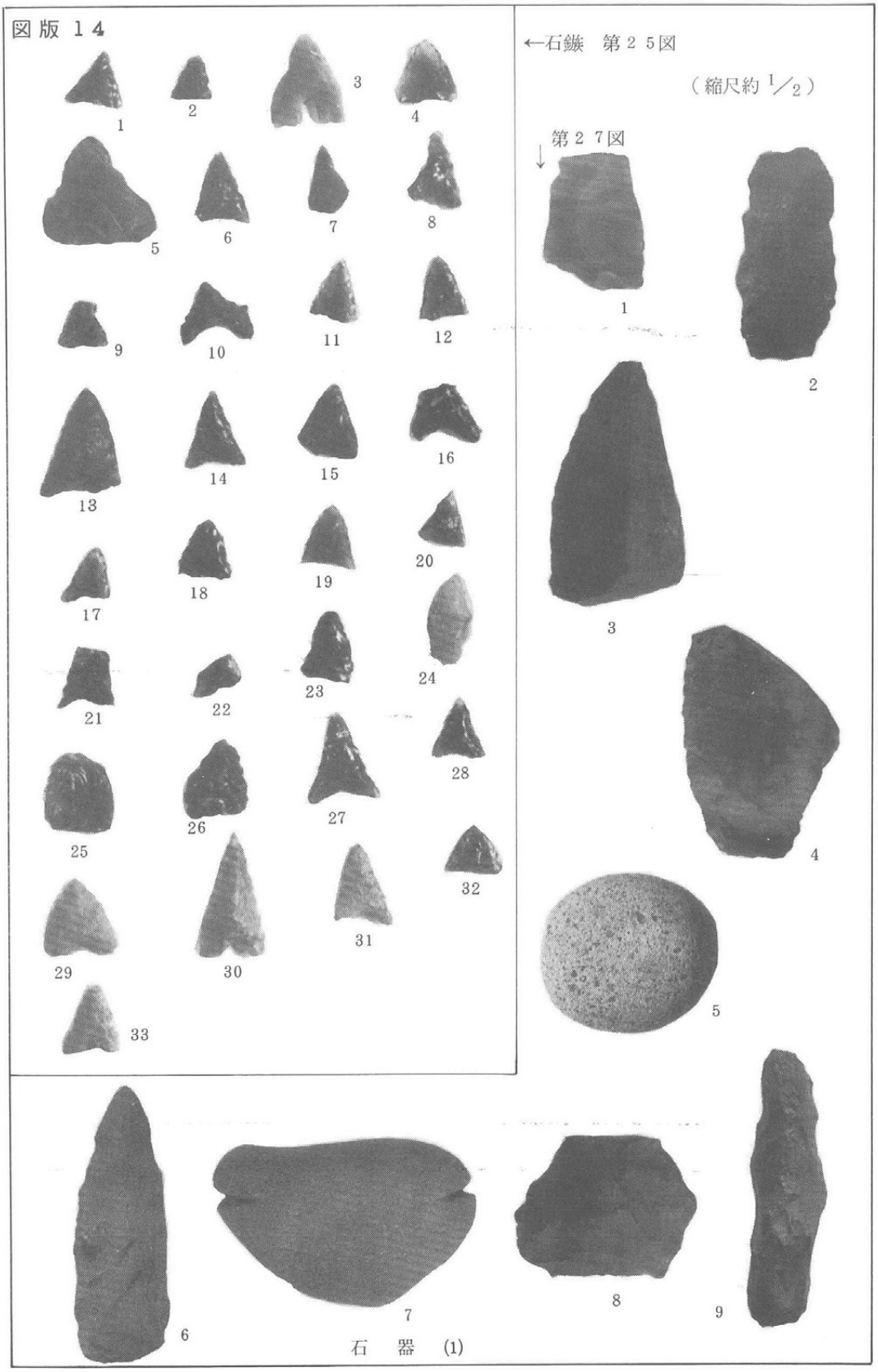
第２４図（縮尺約1／3）　　その他の土器

図版 14

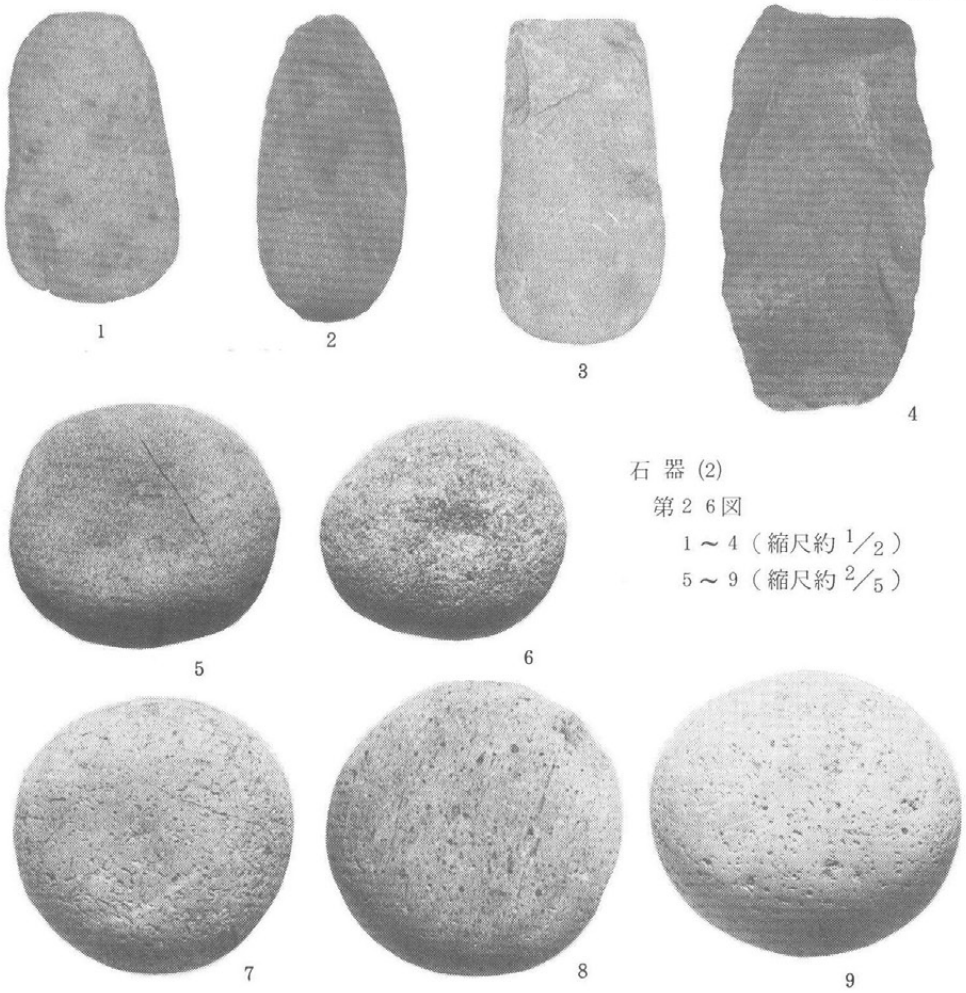
←石鏃　第２５図

（縮尺約 1／2）

第２７図



石　器　(1)

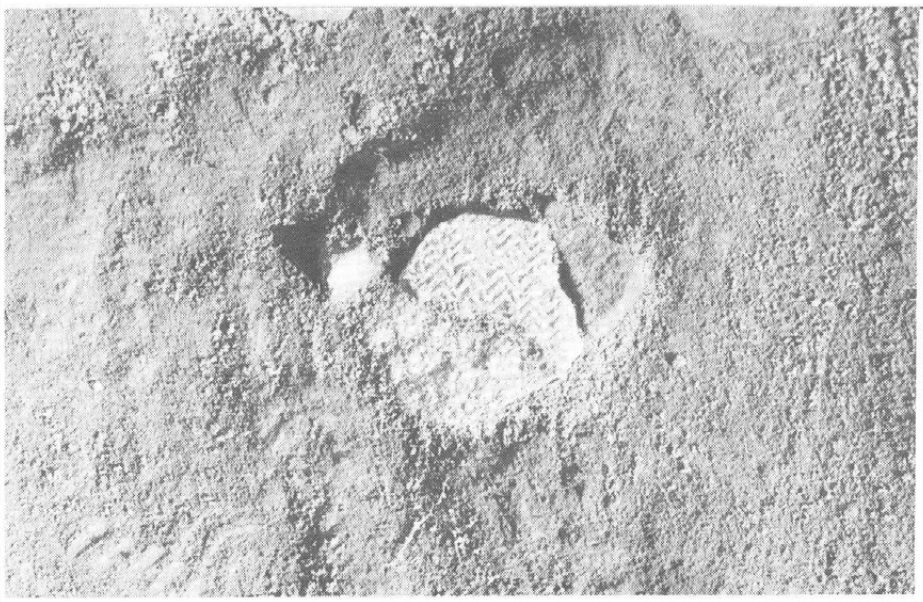


石器 (2)

第26図

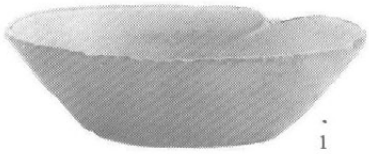
1～4（縮尺約 1/2）

5～9（縮尺約 2/5）



第Ⅳ地区押型文土器出土状態

図版 16


1

2

3

4

5

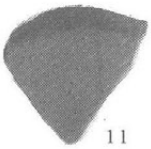
6

7

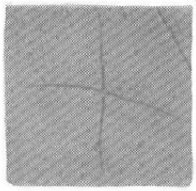
8

9

10


11

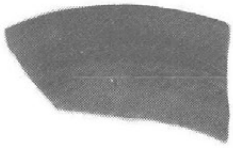
12. ヘラ記号拡大



12

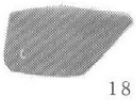
13

14


15

16

17


18

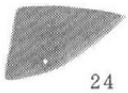
19

20

21

22

23


24

25

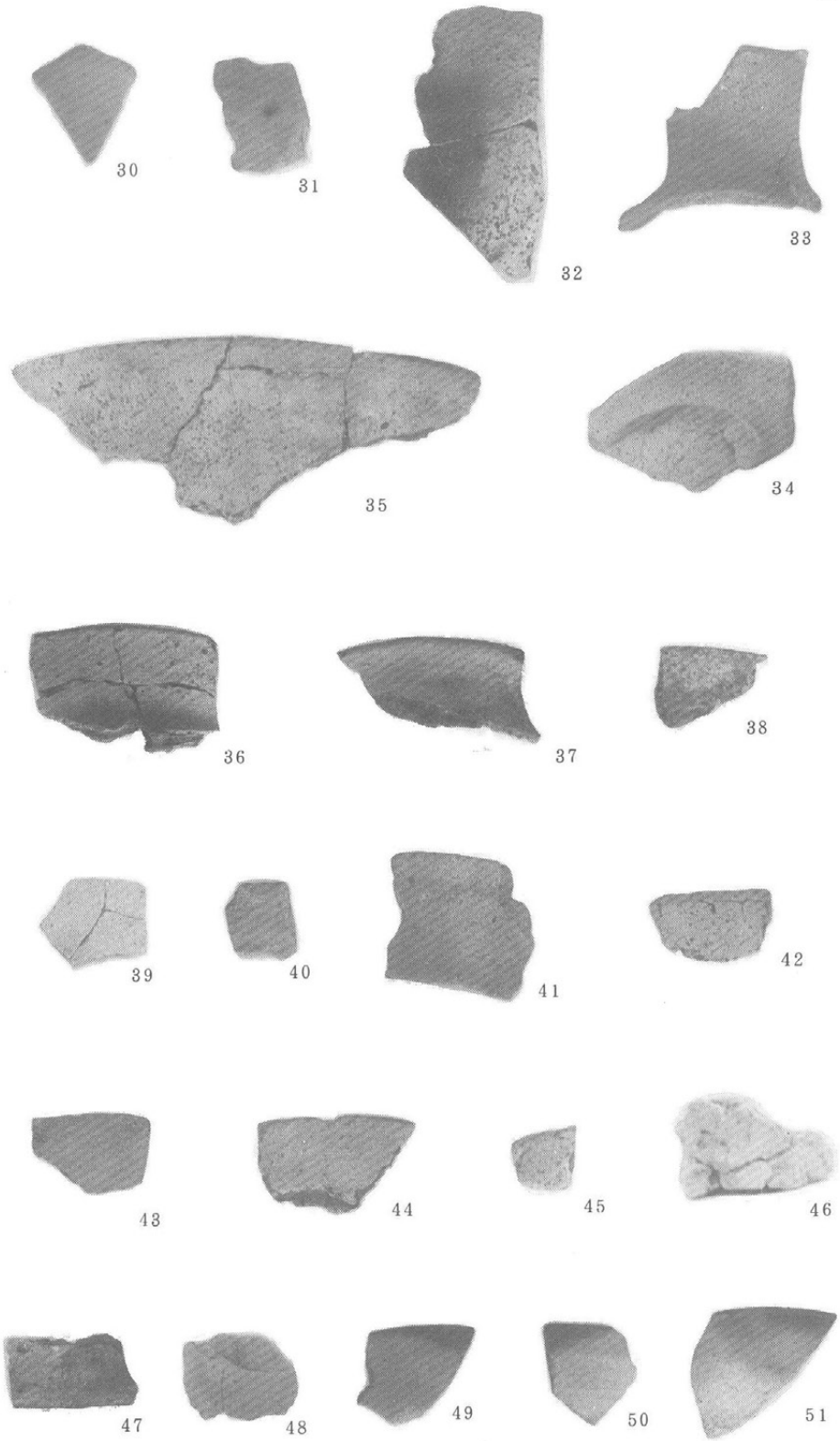
26

27

28

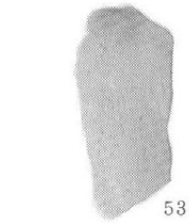
29

土 師 器 (1)

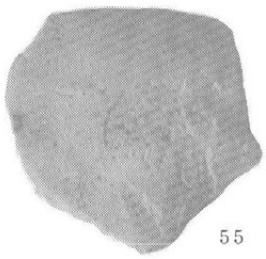


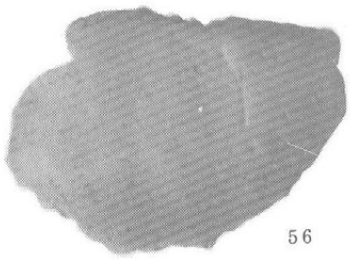
土 師 器 (2)

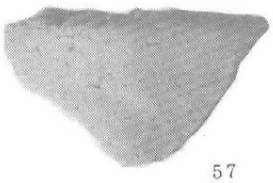
図版 18

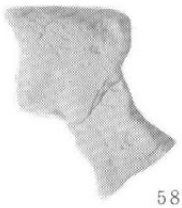

53

54


55


56


57


58

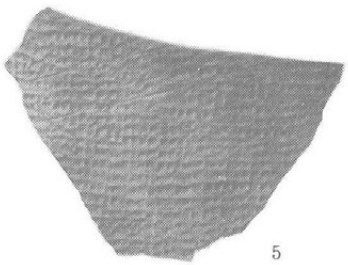
59

60

61

土錘

1


5

織布圧痕土器・須恵器・土錘

清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発　掘　調　査　報　告　書
辻　　遺　　跡

昭和５５年４月３０日発行

発行　清武町土地開発公社
　　清武町教育委員会
印刷　（有）　昭 和 印 刷
　　TEL (27) 8899

清武工業団地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書

辻遺跡

清武町土地開発公社・清武町教育委員会